
電腦世界に落ちた者

リリック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

電脳世界に落ちた者

【Nコード】

N8623T

【作者名】

リリック

【あらすじ】

”ネギま”の世界で生涯を終えた風水双樹の魂を引き継ぐ一之瀬奏の物語。

この作品は風水双樹の魂を引き継ぐということと魔法を出すつもりです。よってデジモンに魔法はNGと思われる方はご注意ください。

第1話（前書き）

お久しぶりです。

未だにスランプから立ち直れませんが、気分転換にこれを書いてみました。

ちゃんと書いていればいいのですが・・・

それでは『電脳世界に落ちた者』の始まりです。

第1話

- side 奏 -

始まりは1995年の春。

その日はいつもと変わらず平穏だった。ちよつと変わつてることといえば、空に昇るたくさんのシャボン玉が風に流されてゆつくりと、列をなしながらぷかぷか飛んでいた。

「あれ？・・・あつ・・・シャボン玉だ。それにこの音は・・・笛？」

お父さんとお母さんが仕事で家、正確にはマンションの一室にはいない。

だから何をするわけでもなくただぼーっと空を眺めるとシャボン玉が目に入る。

そして、小さくけどピツピ、とりズムを刻みながら笛の音が聞こえてきた。

「どこからだろう・・・近くかな？」

椅子に上がり、窓の外を覗いてみると

「やっぱり近くからだ。誰が飛ばしてるんだろ？綺麗だなあ」

私が住んでいるところの同じ階、それもこの家少し離れた真横から家からシャボン玉が出てきていた。

だけど、それはすぐに止んでしまった。

少し残念に思いながらもシャボン玉が途絶えてしまった空を再び眺め、ゆつくりと時間が過ぎ行くのを感じていた。

「・・・それにしても、ヒマだなあ」

夕方を過ぎてもお父さんとお母さんが帰ってこない。
どうしようかと思っていると家の中に電話の着信音が鳴り響いた。

—— p i r i r i r i r i p i r i r i r i r i

「はいもしもし、一ノ瀬です」

『あ、奏？ごめんね、お母さんとお父さん、ちょっと急なお仕事が入っちゃって今日はどうしても家に帰れそうにないのよ』

「そう・・・なんだ」

『本当にゴメンね。私たちも早く帰ろうと頑張ってるんだけど・・・』

『

「ううん、私一人でも大丈夫だよ。だからお母さん、お仕事がんばって」

『奏・・・わかったわ。奏なら大丈夫だとは思っけど、何かあったらお母さんでもお父さんでもいいからいつでも電話するのよ』

「うん、わかった。お母さん、お父さんにも頑張れって伝えてね」

『ええ、ちゃんとお父さんに伝えるわ』

「お願い」

『ええ、まだ早いけど・・・おやすみ、奏』

「うん、おやすみなさい、お母さん」

受話器を戻して、電話を切った。

「お母さんたち今日は帰ってこないんだ・・・だったら、あれをやってみよう」

夕日が沈みかけたマンションの屋上には私だけしかない。

私は目を閉じ、呼吸を整える。

そして、私の中に眠っている、力、をゆっくりと呼び起こす。

それをまずは手に、次は足に、そして全身へと、力を巡らせる。

「・・・・・・・・・・ッ」

身体が耐えきれなくなり、力を徐々に消していく。

「ハア・・・ハア・・・やっぱりこの身体じゃつらい、当たり前か・・・なんせこんな幼い身体じゃ無理があるよね」

荒くなった呼吸を整えながら自己分析を行う。

「でも、前にやった時よりかは3秒だけど延びた。あんまりやり過ぎると負荷がかかっちゃって身体を壊しかねないから程々にしないと」

そう言いながらも次をやるべく構えをとる。

「だけど、軽い運動程度なら問題ないはず。簡化24式太極拳でいいか」

起？から左右野？分？、白？亮翅、左右？膝拗？、手？琵琶へと繋いでいく。
ゆっくりと、型に忠実に進める。

「――・・・？身搬？捶・・・如封似？・・・十字手・・・收？・・・ふう、これで終わりつと。あ・・・もう日が暮れてる。家に戻ろつと」

周りに張っていた結界を解き、屋上をあとにした。

冷蔵庫にあるお母さんが準備していて夕飯を食べ、お風呂から上がった。

すると、家の中の一部の機械が不規則に光ったり、変な電子音を鳴らしていた。

「・・・なんだろう？故障・・・じゃないみたいだね」

これは・・・なんだか嫌な予感がする。

そう思っていると

「ヒカリイーーーーッ！」

——ドンッ！

「!？」

男の子が誰かを呼ぶ声が聞こえた途端、ものすごく大きな音が聞こえた。

クラクションが鳴り響いているため、おそらく何かが駐車場に止まっていた車を押しつぶしたのだろう。

一体何が起きているんだ!？・・・仕方ない

私は、'力'を使い、3つの光の球を作り出した。

その光の名前は『サーチャー』

前世で認識障害と併用して使っていた偵察用の魔法。

「よし」

サーチャーを飛ばし、この町で起きていることを調べ始めた。

「この身体じゃ歩き回ることができないけど」

実際に目で確かめるために私は家を出て、すぐに屋上へと向かった。

「何だろこれらは・・・」

サーチャーを飛ばしてしばらくすると様々なものがあつた。

何かに貫かれて壊れてしまった自動販売機。

爆発し、炎上している公衆電話。

「本当に何なんだろう？今は今で空には火の玉が飛んでつてるし」

魔法・・・じゃ、ないか。あれからは魔力を感じない。それにこの世界には魔法は存在しないはずだし・・・

そんなことを考えていると突然、家の中で聞こえたような電子音が辺りから聞こえ始めた。

——ゾワツ・・・

！？なに、今は・・・・・・・・・・あれかつ！

急に嫌な予感が一層強くなった。

その原因を探りながら辺りを見回し、そして空を見開ける。

私の目に映った光景に驚いた。

空が歪み、タマゴのようなものが何かに支えられながらゆっくりと地上へと伸び、下りてくる。

「タマゴ、なのか？・・・あれか、私を感じていた嫌な予感の原因は・・・・・・・・ん？」

私は空に浮かぶタマゴを見つめながら小さくつぶやく。
タマゴの降下はしばらくすると止まる。

そして、閃光と共に割れ、タマゴの中からは一匹の鳥のような生き物が生まれてきた。

「黄色と緑の鳥・・・オウム？」

すぐさまサーチャーをあの大きなオウムに向かわせた。

その途中で、人よりも何回りも大きな黄色い恐竜とそいつを必死に止めようとしている私と同じくらいの女の子、その女の子を連れてこの場から離れようとする男の子を見つけた。

恐竜は火の玉をオウムに向けて何度も放ち、命中させるが余り効果がなく、オウムは無傷でいた。

「あの恐竜とオウムとじゃ格が違いすぎる。このままだと・・・」

サーチャーを通して二体の戦いに目を向けていた。

今度はオウムが額の上に雷を溜め、恐竜に向けて放った。

雷は外れたが、上にかかっていた歩道橋を直撃し、恐竜と男の子と女の子が瓦礫の下敷きになってしまったかに見えた。

「っ！？あれは・・・？」

突如、マンシヨンの光が不規則に点灯と消灯を始めたが、それを無視し、サーチャーからの映像を見続けた。

そこには先ほどの黄色い恐竜とは違い、何十倍もの大きさになったオレンジの身体に青い模様が入った恐竜が二人を瓦礫から庇っていた。

「あの二人は・・・よかった、無事だったんだ。ん？男の子が何かつ

ぶやいている・・・コロモン？・・・友達の印？」

コロモン・・・それがあの恐竜の名前なのかな？

男の子が最後につぶやいた友達の印という単語に反応してか巨大な恐竜、コロモンは口から炎のようなエネルギー弾を放ち、オウムの方翼を折った。

そしてすぐさまインファイトに持ち込み初めのころはおしていたが徐々におされ始めた。

オウムがコロモンを投げ飛ばし、距離を取ると先ほど以上の威力で再び雷を放った。

それが直撃し、コロモンは倒れ伏してしまった。

「このままじゃコロモンは・・・」

映像には地に倒れ伏しているコロモン。

そんなコロモンを心配して泣き続ける女の子。

女の子を落ち着かせよう抱きかかえ、コロモンに声をかけ続ける男の子。

コロモンに止めを刺そうとするオウム。

「・・・このまま見過ごしたら目覚めが悪い。身体に負荷がかかってしまうけどやりますか」

私は目を閉じ、‘力’を呼び起こす。

‘力’を使い、コロモンから伝わる波長に合わせ心へと語りかける。

『・・・コロモン、君はこのままでいいの？このまま終わってしまうって』

『・・・』

『友達が涙を流しながら必死に君の名を呼び続けてるよ。その声に応えてあげないの？』

『・・・G U ・ ・ R U ・ ・』

『・・・もし力が・・・君の友達を守る力が欲しいのなら私が貸してあげる。あのオウムを倒せるほどの力を。君の大切な友達を守る力を』

『・・・G U R U R U R U 』

『そう、なら君はこのまま倒れているままじゃいけないよね。さあ、立ち上がって！君の友達の声に応えてあげて！』

私は‘力’を心の対話、念話を通してコロモンへと流し与えた。一気に与えてしまったせいで身体が耐え切れず、限界がきてしまい強制的に念話が中断され、サーチャーが消えてしまった。

「ハア・・・ハア・・・ツ、やっぱりこれが限界か・・・でも」

私はコロモンたちがいる方を見つめた。

すると、コロモンの咆哮が聞こえ、その付近で閃光が空に広がっていった。

「・・・やったみたいだね。よかったねコロモン。そして、さよなら」

私は先ほどの方角に背を向け、家に戻ろうと少しだるい身体を動か

した。

翌日、この事件はニュースとして報道された。

『光が丘爆弾テロ事件』

それがこの事件の名前。

警察関係者たちは犯人の搜索に力を入れていたようだったが、結局はわからずじまい。

この事件は次第に多くの人たちの記憶から薄まり、忘れ去られていった。

ほんのごく一部の子どもを除いて。

あれは早すぎる出会いだった。

あれはまだ・・・現実の世界で会ってはならないモンスターだった。そして、これがすべての始まりだった。

数年後に起こる、あの冒険の・・・

- side end -

第1話（後書き）

誤字訂正や感想、評価などよろしくお願いします。

*お知らせです。知っておられる方もいらっしゃると思いますが『世界に落ちた者』のアンケートもまだ継続中ですのでそちらもよろしく願います。

それから、さつきTwitterを始めました。

<http://twitter.com/#!Niyagala01>

10

第2話

- side 奏 -

あの事件から早くも3年が経った。

あの後、私は身体に負荷をかけすぎたために数日間寝込んでしまった。

お父さんとお母さんは自分たちがそのことを自分たちのせいだと嘆いてはいたけど、すぐに気持ちを切り替えて付きっ切りで看病してくれた。

それから、私が小学校に上がると同時にお台場のあるマンションへと引っ越した。

「奏くん？どうしたの？」

「何でもないよ、ヒカリちゃん」

今、私の隣にいるのは八神ヒカリちゃん。

同じマンションに住んでいて隣人で私と同年の女の子。

挨拶回りに行ったときにお母さんとヒカリちゃんのお母さんである裕子さんが出会ったことが始まりだった。

何でも二人は高校の同級生だったらしく、引っ越し後すぐに家族ぐるみでの付き合いが始まった。

その時に出会ったのがヒカリちゃん、そしてお兄さんの太一さん。

今では普通に話しているけど、会ったばかりのときは太一さんの後ろに隠れてばかりで太一さんが間に入っても会話という会話が成立しなかった。

「あっ・・・今日ってお兄ちゃんとサッカーの約束してたんじゃないか

ったの？」

「ん？・ああ、それは何か急に中止になっちゃったんだ。詳しくはわからないんだけどね」

「そうなんだあ。じゃあ、今日はずっとウチに居るんだよね？」

「そのつもりだよ。今日はお父さんもお母さんも仕事でいないからここにいて言うように言われてるから」

「そっか・・・」

そう言うと、ヒカリちゃんは小さく笑みをこぼしながら頷いた。

「微笑んじやったりして・・・そんなにうれしいものなの？」

「当たり前だよ。奏くんと一緒にいたいから。それとも奏くんは私と一緒にいるの・・・いや？」

ヒカリちゃんは笑みから一転し、不安そうな顔になって少し俯くと上目づかいで私を見つめた。

「うっん、そんなことはないよ。ごめんね、さっき変なこと聞いて」

「あ・・・えへへ・・・」

私は謝りながらヒカリちゃんの頭を撫でる。

すると、少し驚いたけどすぐに笑顔に戻った。

くすぐったそうにするけど、それでも私が撫でやすいように頭を差し出すのを見てつい私も笑みがこぼれた。

「クスッ」

「どうしたの？」

「ただ和むなあって思ってね、気にしないでいいよ」

よくわかってないみたいで首を傾げ、不思議そうに見た。

それから静かな時間が流れた。

それぞれ本を読み続けていると私の肩が急に重くなった。

「ん？・・・あ」

視線を肩に向けるとヒカリちゃんが私に身体を預け寝息を立てていた。

「・・・偶にはこういう時間もいいかもしれない」

私は読みかけの本を閉じてこのまま昼寝を始めた。

「ん・・・んん？・・・ああ、あのまま寝たんだったけ」

目が覚めるとすでに窓の外はオレンジ色に染まっていた。

「あら？やつと目が覚めたみたいね、奏君」

「あ、裕子おばさん」

「そのままでもいいわよ。ヒカリが起きちゃうから」

裕子おばさんは一点を見つめ、微笑みながら言った。

その視線を追うとヒカリちゃんが私の膝を枕にして眠っていた。

「ふふふ、本当にヒカリと奏君は仲がいいわよね。あのヒカリがここまで気を許すんだから」

「そう・・・なんですか？」

「そうよ。奏君、もう少しの間だけそのまま置いてくれないかしら？」

「別にいいですよ」

「そう？ならお願いね。もし、10分経っても起きなかつたら起こしてあげて」

「わかりました」

裕子おばさんはキッチンに戻って夕飯の準備を再開した。

「すう・・・すう・・・」

—— つんつん

「んっ・・・んっ・・・」

——ふにふに

「うんゝ．．ん．．」

「クススッ」

ヒカリちゃんの頬を指で突つついたり、摘まんでみたりとしていると可愛らしい反応をした。
それに満足して笑みがこぼれる。

「ん、んゝ．．かなで．．くん？」

「あ、起こしちゃった？」

「んーん、だいじょーぶだよ？」

「どうして疑問形．．？まだ目が覚めてないみたいだね、もう少しこのままででいる？」

「だいじょーぶ」

微睡む目をこすりながら起き上った。

「おはよう、ヒカリちゃん」

「うん．．おはよう．．」

ヒカリちゃんはまだ眠たそうで、小さく欠伸がこぼれた。
そして、何か思ったのか私に顔を向ける。

「・・・奏くん、もしかして見てた？」

「見てたって何を？」

「私の寝てる時に」

「それは、まあ、見てたけど？」

「・・・ずるい、私も奏くんの寝顔見たい」

「へ？・・・えーっと・・・」

ヒカリちゃんは無言でじわじわと迫ってくる。

そして、顔を少し赤く染め、恥ずかしそうに言った。

「だから・・・ね？き、今日、一緒に寝よ？」

「だからヒカリのやつ、いつもより嬉しそうだったんだな」

八神家で一緒に夕飯を食べ終わり、風呂から上がった後、太一さんと部屋で話していた。

「ええ・・・まあ、そんなところですよ」

「にしても、俺にさえ自分がやってほしいこととか言ってこないの

に奏には言ってるよな」

「確かにそうですね。これといって何かをやってるわけじゃないですけどね」

「そうだよな。でも、ヒカリに頼られたり、我が儘を聞くのは嫌なじゃないんだろ？」

太一さんは意地悪っぽく私に言った。

そんな言葉に太一さんと同じように答えた。

「太一さん、わかってて言ってるでしょ？」

「まあーな」

「お兄ちゃん、奏くん、上がったよ」

部屋の扉が開き、風呂から上がったヒカリちゃんが入ってきた。そして私の目の前に座り、私に背を預ける。

「だけど、兄としてなんか納得できないんだよなー」

「あ、あははは・・・」

「?どうしたの?お兄ちゃん、奏くん」

そう言いながら頭をかく太一さんに乾いた笑いか出ずにいた。こんな私たちの様子にヒカリちゃんは首を傾げている。

それからは、3人で話したり、トランプなどで遊んだりなどして時間を過ごした。

「さて、二人ともそろそろ寝るか」

太一さんは眠たそうなヒカリちゃんを見るとそう言った。

「ヒカリちゃん、大丈夫？」

「ふわぁ・・・うん・・・」

「ヒカリ、電気消すから早くベットに入りな」

「わかった・・・奏くん・・・」

「わかってるって。心配しなくても一緒に寝るから」

ヒカリちゃんは頷いて梯子を上り、ベットに入った。

すると、太一さんがヒカリちゃんに聞こえないくらいの小さな声で私に話しかけた。

「奏、ありがとな、ヒカリの我が儘を聞いてくれて」

「大丈夫ですよ。あまり我が儘を言わないヒカリちゃんからのお願いだから気にしないでください」

「それでもだよ。さ、奏も早く寝な」

「そうですね」

私も梯子を上り、ヒカリちゃんと同じベットに入る。
私がベットに入るのを確認した太一さんは電気を消した。

「ヒカリ、奏、おやすみ」

「おやすみ、お兄ちゃん」「おやすみなさい、太一さん」

ベットの中でヒカリちゃんが手を握ってきた。

「奏・・・くんも、おやす・・・み・・・」

「うん、おやすみ、ヒカリちゃん」

ヒカリちゃんはよほど眠かったのか言い終わるとすぐに眠りについた。

その寝顔はどこか幸せそうだった。

「・・・またここか」

私の目の前に広がっているのは誰もいない高原。
ここはあの事件の後に時々見る夢の中の世界。

「となると・・・そろそろかな？」

「奏！」

後ろから私の名前を呼ぶ青紫の毛むくじゃらが突進してきた。

「よつと」

「うわぁっ!？」

突進を避けると、毛むくじゃらは勢いを殺し切れずゴロゴロと転がった。

転がり終えた毛むくじゃらは私に文句を言いながら近寄ってきた。

毎回毎回こいつも飽きないねえホントに・・・

「もう！何で避けるのさ！」

「当たり前。あんな体重の乗った突進なんて好き好んで受けないよ」

「じゃあ何とかしてよ!」

「嫌だ、面倒くさい」

私に言い寄ってくる青紫の毛むくじゃらの名前はドルモン。

あの事件のコロモンやオウムと同種の生物でデジモンというらしい。最初に会ったころはよく攻撃を仕掛けられてたが今となってはいい思い出だ。

「久しぶり、でいいのかな？」

「別にいいんじゃない?・・・あ!それよりも、奏!はいつ、これ

「！」

ドルモンは何処からか変な形をした小型の機械のような物と首にかけていたペンダントを差し出した。

「ドルモン、これらは何？」

「デジヴァイスとタグが詰め込まれた紋章だよ」

「デジヴァイス？タグに紋章？」

「うん。何でも奏は選ばれし子供の一人でボクはパートナーデジモンらしい」

「・・・・・・は？」

「ごめん、言ってることが何時にも増してわからない」

「何時にも増してってどういうことなのさ！」

「さあね。で、選ばれし子供とかデジヴァイスとかっていうのは何なの？」

「はあ・・もういいよ。まずだけど、奏はここがただの夢の中の世界じゃないってことは気付いてるよね？」

さすがに何度もここに来てれば普通じゃないってことくらいわかるしね。現実世界と同じようなんだけど絶対的に何かが違う感じをずっと感じてたし。

それからしばらくの間、ドルモンの説明が続いた。
ここが何処なのか。

選ばれし子供のことやデジヴァイスにタグ、紋章についてなど。

「何となくわかった。でもなんでドルモンがそんなことを知ってるの？」

「それが・・・ボクにもわからないんだ。ボクの夢の中でこう言うようにって誰かから言われたような気がするんだ」

「ふーん・・・まあいいか」

「ごめんね、奏」

「いやいや、ドルモンが謝る必要なんてないでしょ」

それにしてもなぜ私が夢を通してこのデジタルワールドにいるのかわからないな。転生が原因なのか？それとも単なる偶然か・・・変なことに巻き込まれるのは前世でもあったから今更な感じだし別にいいかな。それはともかく、タグの意味が可能性・・・か。これは Rewrite を使っていた私へのあてつけなのか？

「奏？」

「何でもないよ。・・・多分そろそろ」

——ドクン

「あっ」

「うん、時間みたいだ」

空間全体が鼓動したかのような感覚に見舞われると私の身体が徐々に透け始めた。

「もうそんなに経ってたんだね。それじゃあ奏、また明日！」

「じゃあねドルモン」

言葉を交わし終わると私は消えた。

・・・あれ？それにしてもまた明日ってどういうこと？いつもならまた今度なのに・・・？

- side end -

第3話

- side 奏 -

「すう……かなで……くん……」

目の前では未だに目ているヒカリちゃんが寝言で私の名前を呼んだ。現在時刻は05:30、さすがにこの時間帯にはヒカリちゃんも太一さんもまだ寝ている。

「クスッ、私の寝顔を見るんじゃないの？」

起こさないように手を伸ばし、ヒカリちゃんの頭を撫でる。

すると頬が緩み、私の方に寄ると抱き着いてきた。

私は呆氣にとられたが私も同じように頬が緩み、少しの間そのまま撫で続けた。

その後、二人を起こさないように静かに梯子を下り、部屋を出ると

「あら？おはよう。早起きなのね」

「おはよう、奏君」

「おはようございます、裕子おばさん、進おじさん」

部屋から出ると朝食を運んでいる裕子おばさんと食べている進おじさんがいた。

「進おじさん、なんでこんな時間から朝ごはん食べてるんですか？」

「最近ちょつと仕事が忙しくなつてね」

「へえー、大変そうですね」

「まっただ。はははは」

笑いながら食べている進おじさんから裕子おばさんへと視線を移す。

「裕子おばさん、今から一度家に戻ってもいいですか？」

「家に？別にいいわよ。でも7時くらいにはここに戻ってきてね。朝ごはんも用意してるから」

「わかりました。それじゃあ、行ってきます」

「ただいまあゝ・・・って、誰もいるわけないよね」

家に戻る前に屋上で軽く1時間ほど体を動かした後に戻った。

パジャマから私服に着替えるために自分の部屋に戻ってみるとパソコンのそばにあるモノがあつた。

「なんでここにデジヴァイスと紋章が？」

デジタルワールドでもらったのとあれと同じものなのかを確かめるために記憶の中を探る。

これは確かにあの時ドルモンからもらったものだけど……それがどうしてこんなところに？……私が選ばれし子供だからとか言う無理矢理な理由でなのか？それはそれで何だかありえそうだね。

「ん？これらがここにあるということはドルモンもここにいたりする？」

そう思い、ドルモンの気配を探りながら辺りを見渡してみるがいる気配がない。

「いないみたい……まあいいか、今ここに居られても対処に困るし、今いなくても何らかの拍子に出て来るでしょ」

自分でそう納得しながらさっさと着替え、八神家へと戻った。

「それじゃあ、これで」

「奏くん、ほんとに帰っちゃうの？」

「そうよ、別に私たちと一緒に来てもいいのよ？」

八神家で朝食を食べ終わり、しばらくすると太一さんがサッカー部の朝練で行ってしまった。

それから、裕子おばさんとヒカリちゃんが出かけるといったので家に帰ると言ったところ二人に止められた。

「いえ、私もちょっとやりたいことができたので」

「そう、なら家に一人でいるんだから気を付けるのよ」

「お母さんたちからもいつも言われてるので大丈夫ですよ」

「奏くん・・・」

「もう、そんな顔しないでよヒカリちゃん。別にずっと会えないってわけじゃないんだからさ」

「うん・・・」

ヒカリちゃんは私の服の裾を摘まみながらも頷いた。

「ふふふ、本当に二人とも仲がいいわね。まるで付き合い始めた恋人同士みたいよ」

裕子おばさんがそう笑いながら言うと、ヒカリちゃんは顔を赤くし、俯いてしまった。

「裕子おばさん、あんまりからかわないでくださいよ」

「ごめんさないね」

言葉とは裏腹に今でも小さく笑っている。
そんな裕子おばさんにため息をつきた。

「それじゃあ、お邪魔しました」

「ええ、またいらっしやい。何かあったらいつでも来なさい」

「はい。またねヒカリちゃん」

「うん、またね奏くん」

ヒカリちゃんは私の服から手を放して手を振った。
私も同じように手を振り、家へと帰った。

「おはよう、奏！」

家に帰り、自分の部屋に入るとそこにはなぜかドルモンがいた。

「・・・なんでお前がここにいるの？」

「え？だって、ボクは奏のパートナーだから？」

・・・

「はぁ・・・」

やっぱりドルモンはドルモンか・・・

「え？なんで溜息つくのさ!？」

「いや、気にしないで・・・」

私は頭を抱えたがすぐに切り替える。

「ドルモン、いつの間に来たの？少し前に来たときにはデジヴァイスとタグと紋章がパソコンのそばにあっただけだったけど・・・」

「さあ？ボクも目が覚めたらここにいたよ？それにあの時言っただけじゃん、また明日って」

やっぱりか・・・あの言葉は間違えじゃなかった。ということは、あの時すでに自分が現実世界に、私の所に来ることを知っていたってこと？

「奏？」

ドルモンは突然黙った私を心配そうに見つめながら声をかけてきた。

「・・・ドルモンはあの時、夢の中でこう言うようについて誰かから言われたような気がするって言ってたけどその時には自分自身がここに来るってことを知ってたんだよね？」

「うん、そうだよ」

「だったらさ、他にも何か言われたことってあるの？」

ドルモンはうん、と言いながら思い出そうとしていた。しばらくそのままだったががつくりしながら首を振った。

「そっか・・・」

「うん・・・でも、多分なんだけど・・・奏は寝なくてもそのデジヴァイスを使ってデジタルワールドに行けると思うよ」

「そうなの？」

「多分だけど・・・」

確証はないみたいだね。でも・・・

「やってみる価値はあるか」

机の中にしまったデジヴァイスとタグを取り出した。

「ドルモン、行くよ」

「行くって・・・まさか!？」

「そうだよ。デジタルワールドへ」

「でもどうやって？」

デジタルワールドっていうぐらいなんだから・・・

私はパソコンに目を止めた。

そして起動させ、デジヴァイスを掲げる。

「こんな感じでやればできるんじゃない？」

するとパソコンの画面がデジヴァイスに反応したかのように光りだ

した。

そしてその光は私とドルモンを包み込んだ。

「・・・一応、冗談のつもりだったんだけどなあ」

「・・・本当に来ちゃったね」

光が収まると目の前には夢で見ていたあの高原にいた。
しかし夢の中とは異なり、雰囲気が異なっていた。

「奏、言い忘れてたけど奏たちの世界とデジタルワールドの時間の流れ方が違うんでしょ？」・・・何で知ってるの？」

「ん？なんでって今見て感じた。それに言わなかったけ？前世のことを。前世で時間操作の魔法を使ってたから時の流れについては敏感なんだよ」

「前世のことは聞いてたけど魔法なんて初めて聞いたよ」

「そうだったけど、そんな感じだよ」

・・・それにしてもここは前世でいうところのダイオラマの魔法球の性能を最高以上にしたところと考えていいのかもしれない。ここで数日が過ぎても元の世界では数分か・・・だったら

「か、奏？急に笑みなんて浮かべてどうしたの・・・？」

「あ、ごめんごめん。ここならあまり時間を気にせずに身体を鍛えることができるなって思ったから」

「なんで鍛える必要なんてあるの？」

「なんでって言われても・・・前世じゃこれが当たり前だったから、ついやりたくなるんだよ」

「そうなんだ・・・ん？前世では戦いばかりしてたってこと？」

「うん、ある一時期にはね・・・あれはどうしても成し遂げなきゃいけないことだったから」

「そっぴいなからドルモンに目を向けると心配そうにこちらを見ていた。」

「大丈夫だよ。別に辛いことだけじゃなかったんだから。大切に掛け替えのない人たちと笑って楽しんで・・・そんな時間を過ごしたのだから。だから、そんな顔しないでよドルモン」

にかつと笑いながら言い放つ。

それを見たドルモンしばらく呆気に取られていたが私と同じように笑い

「うん！」

元気に返事を返した。

ここに来て数日が経った。

ここら一帯の地理はドルモンがよく知っていたため特に困ったことは起きずに過ごすことができた。

「メタルキャノン！」

「よつと、そんなんじゃいつまで経っても当たらないよ」

「だったら・・・——ドルモン進化ーっ！・・・ドルガモン！」

「ちよつ！？進化はなしだろ！？」

「こうでもしないと勝てないじゃん！」

私たちはある一定の時間をとってはこうやって模擬戦を繰り返していた。

私は修行の一環として、ドルモンは遊びで。

これを繰り返しているうちに、全盛期のような身体能力までとはいかないがそこそこ、力'が使えるようになった。

一方でドルモンは気付くと成長期から成熟期へと進化ができるようになっていた。

私たちは互いに経験値を稼いでいた。

- s i d e e n d -

第4話

- side 奏 -

ドルモンが現実世界で過ごし始めて早くも一年が経った。

初めのころは上手く両親たちに隠し通せていたけど、ある日、ドルモンの自滅によって気づかれてしまう。

しかし、両親は何事もなかったようにドルモンを受け入れ、家族同然に接してくれた。

その理由を聞いてみると

『奏と強い絆で繋がっているんでしょ？だったら無理矢理に引き離すなんて私たちにはできないわよ』

『それに、今は八神さんたちがいるとはいえ、いつも私たちの都合のせいで奏には不自由させているんだ。だから・・・な』

と、言ってくれた。

そんな感じでドルモンが一之瀬家の一員となった。

その後も私とドルモンの二人でデジタルワールドと現実世界を行き来していて、模擬戦を繰り返している。

私が小学校に入学して二度目の八月一日を迎える前日の夜に突然、裕子おばさんから電話がかかってきた。

なんでも、ヒカリちゃんが風邪をひいてしまったので一緒にいてあげてほしいということだった。

看病しようにもヒカリちゃんが一人でも大丈夫と言うけど、やはり、一人にはできない。

よって、ヒカリちゃんが気を許している且つ、元々サマーキャンプには参加をしていない私に頼んできたようだった。

ドルモンはその話を聞いていたようで私に行くように言った。

なので、裕子おばさんに二つ返事を返し、翌日、向かうことになった。

「ヒカリちゃん、大丈夫？」

「うん。ごめんね、奏くん。私が風邪、ひいちゃったから・・・」

「気にしない気にしない。私はやりたいことやってるだけだから」

現在、八神家には私とヒカリちゃんの二人だけでいた。

ドルモンは家で留守番。

裕子おばさんと進おじさんは入院したおばあちゃんのお見舞いに病院へ。

太一さんはサマーキャンプ。

「まだ少し体調が優れないみたいだからちゃんと寝ること。洗い物してるから何か用なら呼んだらすぐに行くから。あと、流しを借ります」

「うん・・・ありがとう、奏くん」

ベットにヒカリちゃんを寝かせ、部屋を出た。

それからさっさと洗い物を終え、裕子おばさんに頼まれていた家事

をこなす。

全てを終えると、部屋に戻ってみるとヒカリちゃん眠っていた。

「・・・この様子じゃ、すぐに治りそうかもね」

椅子に腰をかけ、本を読みながら時間を過ごした。

お昼頃になるとヒカリちゃんが目を覚ました。

「おはよう。気分はどんな感じ？」

「奏くん、おはよう。少し寝たからなのかな？朝よりは大丈夫だよ」

「そうなの？・・・ちよつとごめんね」

「あ・・・」

私はヒカリちゃんの額に手を当て、自分の額の温度と比べる。

「・・・うん、熱は下がったみたいだ。食欲があれば何か食べてもらった方がいいか」

「うん、熱は下がってるね。ヒカリちゃん、食欲はある？」

「えっと・・・少しだけなら・・・」

「そつか、じゃあ、準備するからちよつと待っててね。出来上がったらお昼ご飯と一緒に食べよつか」

「うん」

調理に取り掛かろうとしたがあることを思い出し固まった。

そつえば・・・ドルモンを家で留守番頼んでいたんだった・・・

「奏くん、どうしたの？」

「・・・ヒカリちゃん、お昼ご飯少し遅くなってもいいかな？ちよつと用事思い出しちゃって・・・」

「用事？」

「うん、すぐに終わるんだけど・・・行ってきたもいいかな？」

「いいよ。それまで待つてるから」

「ほんとにごめんね、少し行ってきます」

私は急いで家に戻り、ドルモンのお昼を素早く作り始めた。

30分でドルモンのお昼を作り終え、八神家へ急ぐ。
そして玄関を勢いよく開けて入った。

「ヒカリちゃん、ごめん、すぐにお昼作るから……って、
どうして太一さんがここに？サマーキャンプに行ったんじゃない？
」

私の目の前にはキャンプ場にいるはずの太一さんとデジモンと思われるピンクの生物、そしてヒカリちゃんの三人がいた。

「か、奏！？お前こそ何でウチに？」

「昨日の夜、裕子おばさんに風邪をひいてるヒカリちゃんのことを頼まれてたんですよ。それで太一さんは？」

「お、俺か！？俺はその……ヒカリの様子が心配だったからさ」

はあ……太一さん動揺しすぎで嘘だってすぐにわかつちやいますよ。

「……そうなんですか。ところで……そのピンクの生物は？」

私はピンクを見つめているとヒカリちゃんが口を開いた。

「奏くん、その子はピンクじゃないよ、コロモン。コロモンだよ」

「ヒ、ヒカリっ！？」

ヒカリちゃんがそう言うと、太一さんは驚いたように声を上げた。

「お前……なんでこいつの名前知ってんだ？」

「だって……コロモンはコロモンでしょ？」

太一さんはヒカリちゃんの言葉を聞くと何も言えず、沈黙してしま
った。

・・・この空気どうしようか。さすがにこのままじゃアレだし・

「・・・太一さん、コロモン、二人ともお昼食べますか？何だっ
たらまとめて作りますけど・・・？」

「ご飯!？」

私の言葉にコロモンが食いついてきた。

私は台所に立ち、料理の準備に取り掛かろうとすると、

「奏、昼は俺が作るからヒカリたちとちょっと待つてな」

「そうですか？じゃあ、お願いします」

私と太一さんは入れ替わり、私たちはソファーに座った。

「えーっと、一応、自己紹介しておくね。私は一之瀬奏です。よろ
しく、コロモン」

「うん！よろしくね、奏」

そして、料理ができるまでの間、私たち三人はいろいろなことを話
した。

「おーい、できたぞー」

太一さんが私たちを呼んだ。
それぞれ席に着くと目の前にはポテトサラダと太一さんが作ったオムライスが並んでいた。

「いただきますーす！」「いただきます」

いただきます、と言った途端に太一さんとコロモンは勢いよく食べ始めた。

ヒカリちゃんはオムライスをスプーンですくい、口に運んだ。
そして、一言。

「おいしい」

「ん？そうか？」

「はい、おいしいですよ。料理、上手だったんですね」

「向こうでヤマトに教えてもらって、前からこれくらいはできたさ」

「へえー・・・」「ふーん・・・」

私とヒカリちゃんは太一さんに少し驚いた。
ヒカリちゃんは太一さんとコロモンを見て、自分の分のオムライスを差し出した。

「よかったらこれも食べて」

「え！いいのー！？」

「うん」

コロモンは自分の前に引き寄せた。

「ヒカリちゃん、私と一緒に食べよう？」

「え？でも・・・」

「私には少し多すぎるから・・・それに、食欲があるうちに食べておかないと治るものも治らないよ？」

そう言いながら皿をヒカリちゃんの方に寄せた。

そして、スプーンでオムライスをすくい、ヒカリちゃんに差し出す。

「ほら、口をあけて」

「う、うん・・・あーん」

ヒカリちゃんは少し躊躇いながらも小さく口をあけ、食べた。

少し頬を赤く染め、俯きがちに口を動かした。

私はヒカリちゃんのそんな様子を不思議に思いながらもオムライスを口に運んだ。

お昼を食べ終わると、突然、コロモンは顔が真っ青になり、ぶるぶる震えだした。

「コロモン、どうしたの？」

「おい、コロモン！・・・コロモン！！」

これって結構まずいんじゃない・・・

「コロモン、ごめん！」

私はコロモンを抱え、急いでトイレへ向かい、便座に乗せて扉を閉める。

「太一さん、あとはよろしくお願いします」

「あ、ああ、わかった。でもなんでコロモンがトイレに行きたいことがわかったんだ？」

「二人前のオムライスを休むことなくガツガツ食べてたんですからお腹が痛くなっても無理ないですよ？」

「あー・・・」

私の答えにどこか納得した様子で返事を返した。

私は流しに立ち、食器などを洗い始めた。

コロモンの世話を終えた太一さんはソファーに寝そべると、クーラーとテレビの電源を入れた。

そして、そのまま寝ようとしていた。

『——八月一日、お昼のニュースです。最初は連日お伝えしている異常気象についてです』

アナウンサーの発した異常気象という言葉に反応して太一さんはテレビに目を向けた。

『東南アジアでは依然として全く雨が降らず、水田が枯れて——』

「これは……メラモン……！」

テレビに映った炎人が目に入ると驚きながら身体を起した。

『中東では記録的大雨による洪水、北米大陸では真夏というのに雪に覆われています。その他、——』

「シードラモンにユキダルモン……異常気象のせいなんかじゃない、デジモンたちの世界の歪みがこっちにも影響してるんだ……！」

「お兄ちゃんにも見えるようになったの？」

「え？アイツ等が見えるのか？」

「ずっと前からよ。だって、見えるって言っても奏くんしか信じてくれないんだもん」

ヒカリちゃんに目を向けていた太一さんは私にも目を向け、疑問を投げかけた。

「まさか……奏も見えるのか？」

「ええ、普通に見えますよ。だから、ヒカリちゃんの言ってることを信じてたんですよ。見えるモノを見えないって嘘をつくのは変でしょ？」

「お前ら……」

太一さんが私たちの言葉に啞然としていると突然、テレビやエアコンの電源が切れた。

太一さんは驚きながらポケットの中にあるデジヴァイスを取り出し、それを見つめた。

——ブワァン

「ん？」「へ？」

私とヒカリちゃんは咄嗟に音の鳴った方を見た。

そこには先ほどまで電源が付いていなかったパソコンのデスクトップにノイズが入りながらも人が映った。

「お兄ちゃん・・・あれ！」

ヒカリちゃんの声に顔をあげる

『・・・さん。・たいち・・・さん・・・』

デスクトップに映る人を見て、声を聴いた途端、太一さんは驚愕の表情を浮かべた。

「こ・・・光子郎！」

すぐさまパソコンの傍に行き、相手に向かって叫び始めた。

しかし、ノイズが酷く、相手が何かを言っているようだったが言葉聞き取れず、わからなかった。

太一さんは必死に相手に話しかけているが更にノイズが酷くなり、デスクトップから消えてしまった。

その間、私は流しから離れ、ヒカリちゃんとコロモンの傍に寄って、

太一さんを見ていた。

- s i d e e n d -

第5話

- side 奏 -

太一さんは通信が消えた後、しばらくその場に立ちすくんでいた。そして、何か混乱していた様子でコロモンに言った。

「なあ、コロモン、俺だけここでこうしていいのかな？」

「太一……でも……」

「そうだな……どうやって向こうに戻ったらいいのかわからないもんな……」

そう言うと、この場に重い空気が漂った。

ヒカリちゃんは不安と心配でいっぱいのように私の手を握った。

私は何も言わずただそれを握り返した。

「……太一さん、スイカ……食べますか？」

その後、太一さんは何も言わないまま、部屋に籠ってしまった。私は冷蔵庫にあるスイカを切り分け、そのうちのいくつかを太一さんの下へ持って行った。

「大丈夫ですか？」

「奏・・・」

「ひどい顔になっているみたいですけど・・・もしよかったら相談してください。ため込んでいるもの吐き出すのもいいと思いますよ」

太一さんはしばらく黙っていたけど、話し始めた。
一つ一つ、ゆっくりと。

私はそれを黙って聞いた。

「なあ、奏、俺はどうしたらいいんだろう・・・」

「・・・それはもう決まっているんじゃないんですか？」

「・・・え？」

「太一さんはここに残りたいと思いつつも他の人たち心配で向こうへ戻りたいと思っている。だったら行けばいいんじゃないですか。太一さんはきつと誰かに背中を押してもらいたかっただけなんですよ」

「・・・」

「ヒカリちゃんのことか心配なら大丈夫ですよ。私がいますから」

「奏・・・」

「ま、これは私も言葉なのであまり真に受けなくてください。結局、どうするかを決めるのは太一さん自身なんですから」

そこまで言うとなーさんは再び黙ってしまった。

私は太ーさんを背に部屋を出ようとしたけどドアの前で止まり、太ーさんに言った。

「これだけは言っておきます。今、太ーさんに必要なものは一步を踏み出す勇気です。自分が絶対に後悔しない決断をしてください」

そう言い残し、部屋を出た。

部屋を出るとそこにはスイカを手につヒカリちゃんと困った顔をしたコロモンがいた。

「どうしたの？二人とも」

「ううん、何でもないよ」

「・・・そっか」

何か話していたみたいだけど・・・あまり詮索しない方がいいみたい。

私は何も聞かずにソファーに座った。

家の中は本当に静かだった。

私もヒカリちゃんもコロモンも特に何を話すわけではなく、ただ座

っていた。

——ガチャ・・

「ん？」

扉の開く音が聞こえ、振り向いた。

そこにはどこ決意した表情を浮かべた太一さんが立っていた。

「お兄ちゃん？」「太一？」

二人が不思議そうに見ているがそれに気付かないまま私を見た。

「奏・・・・・やっぱ、俺・・・！」

太一さんが私に何かを言おうとすると、

——ドドドドドドド

「あっ」

「な、何だ！？」

突然マンション全体が揺れ出した。

太一さんは驚きながらも外の様子を見るためベランダに出た。

地震はすぐに収まったが、少し離れたところでもものすごい音とともに水柱が立った。

そしてその中から現れたのは、

「あ、あれは！・・・・・ティラノモン！」

赤い恐竜型のデジモンが現れた。

そして、川にかかっている橋めがけて炎弾を放った。

またデジモンか・・・ドルモンに準備してもらっておこうかな。

そんなことを思っていると太一さんとコロモンが声を上げながら家を出て行こうとした。

「待って!」「太一さん!」

「ヒカリ、奏・・・・・・・・お前たちは家にいろ!」

そう言い残し、二人は家を出て行った。

「奏くん・・・・・・・・」

「・・・正直に言うと、ヒカリちゃんには太一さんたちを追ってほしくないよ」

「でも、お兄ちゃんが!」

「・・・」

「奏くん!」

ヒカリちゃん、自分の意思を伝えるようになったのはいいけど、少しは自分の身体のこと心配して欲しいけど・・・これは言っても無駄、みたいだね。

「・・・・・・・・・・はあ・・わかったよ。いいよ」

「えっ・・・・・・・・いいの?」

「どうせ私がなんて言おうと一人で追いかけて行くんでしょ?」

そう言っていると頷いた。

「だから私も一緒に行く。これが条件だよ。もし一人で行くって言うのなら何が何でも外には出させないから」

ヒカリちゃんは黙ってしまったが頷いた。

「わかったよ。でも、完全には風邪、治ってないんだから無理だけはしないでね」

「うん!」

そして、私たちは急いで太一さんたちを追った。

『ドルモン、もしもの時は頼んだよ』

『うん、大丈夫だとは思っけど、気を付けてね』

『わかってる』

太一さんたちを追う前に私は留守番をしているドルモンに念話で連絡を取り、もしもの時に備えて着いてきてもらっている。

「奏くん、あそこ!」

ヒカリちゃんが指をさした。

そこには太一さんとコロモンの姿があった。

「お兄ちゃん!」「太一さん!」

私たちは名前を呼びながら駆け寄った。

「ヒカリ!奏!・・・来るなって言っただろ!」

「でも・・・!」

「家に入ってる!早く!奏、お前もヒカリと一緒に——」

「・・・それよりもアレ、どうするんです?」

太一さんの言葉を遮り、横断歩道の先を見つめた。

太一さんはコロモンと共に後ろを振り返る。

すると、焦った表情を浮かべた。

「オ、オーガモン・・・!」

オーガモンと呼ばれるデジモンは横断歩道の信号が赤のためなのかこちらを見ながら立っている。

「ど、どうしよう・・・こんな街中にオーガモンが・・・このままじ

「やあ、みんなを巻き沿いにしちゃう！」

太一さんは私たちを守るような体勢でつぶやいた。少しすると信号が青になった。

それと同時にオーガモンが突っ込んでくる。

手に持つ棍棒を振り上げ、コロモン目がけて振り下ろした。

「うわっ」

コロモンは攻撃を避けたが、コンクリートが砕け、その瓦礫が私たちに飛んできた。

太一さんはヒカリちゃんを覆うように身体を挺している。

「……『艮の鎧』」

私は無詠唱で魔法を発動し、気付かれないように二人に風を纏わせた。

これで瓦礫が飛んできて軌道を逸らすから二人への直撃はない。それにしてもあのデジモン、どうしようか……？

「コロモンは？」

飛んでくるコンクリートが治まるとヒカリちゃんはさっきまで傍にいたコロモンを探した。

「……いた、二人ともあそこ！」

二人は私が指さす方を見るとコロモンがいた。

コロモンはオーガモンと共にマンションを飛び上がっていた。

そして、振りきりつてオーガモンに向かってアワを放った。
しかし、それはあまり効果がなく棍棒が迫る。

「えいつ」

——ドスッ

マンシヨンの壁を使い、それを回避した。

「コロモン！」

「太一！ここから速く離れて！」

「ひとりで戦うな！ いつも一緒にやってきたじゃないか！」

「太一・・・」

コロモンは太一さんの言葉に一瞬気が緩んでしまった。

これじゃ、直撃か・・・

『ドルモン、今回は出番なしだよ』

『でも、助けなくていいの？』

『こういうのも経験だと思うから』

『わかったよ。奏がそう言うなら』

「コロモン、危ない・・・！」

ヒカリちゃんもオーガモンが迫ってくることに気づいて声を上げた。コロモンはその声を聞き、前を見るとオーガモンが迫っており、棍棒がコロモンを襲った。

「コロモン！」

太一さんがコロモンの名前を叫ぶと、手に持ったデジヴァイスが輝き始めた。

それと同時に空にはゲートが開いた。

あれは・・・まさか！

『奏！あの空のつて！』

『おそらくデジタルワールドへのゲートだね』

『でもどうして・・・？』

『わからない。でも、太一さんの気持ちがデジヴァイスを通して反応したのかもしれない』

ここでドルモンとの念話を一旦切る。

信号機の上には、コロモンが進化したアグモンがいた。

再び、オーガモンが襲い掛かってくるがアグモンは火炎の息を吐き出して、上空へと打ち上げた。

オーガモンはそのまま、ゲートの中に吸い込まれた。

「太一・・・ヒカリ・・・奏・・・バイバイ・・・」

アグモンの身体は徐々に透けはじめ、オーガモンと同じようにゲートへと吸い込まれた。

「アグモン・・・待つて、俺も！・・・っ！？」

太一さんもゲートの向こう、デジタルワールドへ行こうとしたがヒカリちゃんに手を掴まれた。

「ヒカリちゃん・・・」

私はヒカリちゃんの隣に歩み寄り、抱き寄せる。

「奏くん・・・」

「スマン・・・奏」

頭を横に振り、太一さんを見つめた。

「太一さん、決めたんですね」

「ああ、やっぱりあいつには俺が付いてないと・・・」

「そうですか」

「お兄ちゃん・・・」

「大丈夫、必ずここへ帰ってくる」

「・・・うん」

ヒカリちゃんはゆっくりと手を放した。

太一さんがデジヴァイスを空に掲げると身体が浮き始めた。

「風邪・・・はやく治せよ」

「お兄ちゃん・・・」

「奏、ヒカリのこと頼んだぞ」

「わかってます。だから心配しないでください」

そう言うと太一さんは穏やかで優しい視線をヒカリちゃんと私に投げた。

そして、吸い込まれるとゲートは消えてしまった。

- side end -

第6話

Inside 奏一

太一さんとアグモンがデジタルワールドへ戻ってしまった後、私はヒカリちゃんと家に帰った。

「・・・」

「ヒカリちゃん、ずっとこのままにいるの？」

「・・・」こくん

「ちよつとの間、離してくれない？」

「・・・」ふるふる

ずっとこの調子だった。

あの後からずっと私から離れようとはせずに現在も左手を握られていて、一向に離す気配がない。

そんな様子に仕方ないかと心の中でため息をつきながらもヒカリちゃんの好きにさせた。

・・・太一さんとアグモンが自分の目の前でいなくなっちゃったことからの寂しさと、私も同じようにいなくなるかもって不安を抱いているからこういうことをしているんだろうなあ・・・

「ヒカリちゃん、心配しなくても私はどこにも行かないよ。不安と寂しさでいっぱいなら私がそばにいて、それを和らげるからさ、大

丈夫だよ」

私はヒカリちゃんの額に自分の額を当てながら言う。
ヒカリちゃんは突然の私の行動に顔を赤くしながら驚いたけど頷いてくれた。

「ただいまー」

「帰ったぞー」

「お帰りなさいー！おとーさん、おかーさん」

時間帯は夕方、お見舞いに行っていた裕子おばさんと進おじさんが帰ってきた。

私とヒカリちゃんは部屋を出て二人を出迎えた。

「裕子おばさん、進おじさん、二人ともお帰りなさい」

「二人ともただいま。ヒカリ、もう風邪は大丈夫なの？おばあちゃんも心配してたわよ」

「風邪なら奏くんのおかげで治ったみたい」

「おっ、どら？」

進おじさんがヒカリちゃんの額に手を当て確かめた。

「・・・熱は下がったみたいだな」

「よかったわねヒカリ」

二人からそう言われ、ヒカリちゃんは笑った。

「奏君、ヒカリを見ててくれてありがとうね」

「私は私のやりたいことをやっただけですから気にしないでください」

私は裕子おばさんにそう笑い返した。

「それじゃあ、私、帰りますね」

「え・・・もう帰っちゃうの？」

「うん、夕飯の準備しなくちゃいけないから」

「そうなんだ・・・」

「また明日も来るから」

「うん・・・わかった」

「裕子おばさんも進おじさんもお邪魔しました。ヒカリちゃん、また明日ね」

「またね、奏くん」

自宅に帰り、早速夕飯の準備に取り掛かろうとしていると私の部屋からドルモンが出てきた。

「おかえり、奏！もうヒカリちゃんは大丈夫なの？」

「ただいま。ヒカリちゃんなら熱は下がったから大丈夫だよ」

「そっかあ、ところで今日の晩ご飯は何なの？」

「今日は・・・——」

ドルモンと会話をしながら料理し始めた。

料理の途中、ドルモンがつまみ食いをしようとしていたけど私はそれをことごとく阻止した。

まあ、これはいつものことなので気にしてはいない。

そして料理ができあがると、ドルモンと一緒に席について食べた。

「奏、お昼のあのことなんだけど・・・気付いてた？」

「ん？・・・ああ、現実世界とデジタルワールドが太一さんとアグモンが向こうに行った後に時間差で二度つながったこと？」

「そうそれ、奏はどう思う？」

「・・・嫌な予感しかない。太一さんの時とは違って今は一般人

にもデジモンが見えてるんだから」

そう言いながらテレビのニュース番組に目を向けた。

そこには『東京湾に怪獣出現! ?』とあり、一角獣と巨大イカが戦う映像が流れている。

他にも、光が丘での火の鳥とマンモスの目撃情報があるなどとキャスターは報道している。

「太一さんが再び帰ってきてることからさっき映ってたデジモンの片方はたぶん太一さんの仲間だと思う。こういうのは太一さんに直接聞いた方がいいんだろうけど・・・」

「けど、どうしたの?」

「今はその時期じゃないと思うんだ。さっきの私の予想が正しいとして、太一さんたちは何かと戦っていることになるなら、その相手の目的がわからない。わからないままじゃ何をするにも危険が^{リクス}高くなると思うから」

おそらく選ばれし子供関連なんだろうけど・・・

「それじゃあどうするの?」

「さっきも言った通り今は情報が少なすぎるからどうにかして情報を集めないとな」

そう話し合っていると電話が鳴った。

「はい、一之瀬ですけど」

『もしもし、奏くん?』

電話の相手はヒカリちゃんだった。

「ヒカリちゃん?どうしたのこんな時間に」

『あのね、そっちにミーコいる?』

「ミーコ?うん、いないけど?・・・もしかしていなくなっちゃったの?」

『・・・うん』

ヒカリちゃんは小さな声で返した。

「大丈夫だよ、きっと帰ってくるって。もし帰ってもなかったら明日一緒に探しに行こ?」

『・・・うん、わかった・・・それじゃあね、奏くん』

「うん、おやすみ、ヒカリちゃん」

『おやすみ』

会話を終え、電話を切った。

「奏、どうしたの?」

「なんでもミーコがいなくなったらしいんだ」

「今から探しに行くの?」

「そのつもり。ついでにさっき言ってた情報収集もやれたらなってる」

「じゃあボクもついて行く」

「ん、了解」

私は準備を整えるとドルモンを抱える。

そして、ベランダから飛び降り空を翔けた。

現在地は芝浦上空。

ミーコの反応を見つけて、それを追っている。

「ミーコにあげた首輪に私の魔力のこもった鈴を付けていてよかったよ」

「相変わらず用意周到というか過保護というか・・・」

「うるさい・・・って、あれは・・・」

「奏?・・・あっ」

私たちの視線の先にはヘドロを機械で固めたようなデジモンから逃げているデジヴァイスを咥えたミーコがいた。

そして、その先には一人の少年と一匹のデジモンがいた。

あの人はあの時ディスクトップに映っていた人だ。確か名前は・・・光子郎さんとかいってたっけ？ということはあの人も太一さんの仲間の一人か・・・

「どうするの？」

「あのデジモンはあそこにいる人とそのパートナーデジモンに任せてミーコを助ける」

「わかった」

私たちは地上に降り、ミーコを追いかけた。

- s i d e e n d -

- s i d e 光子郎 -

僕は向こうでゲンナイさんが付けてくれた機能で未確認デジモンが芝浦に上陸したという情報を知ってテントモンと一緒に芝浦に向かいました。

「何やアイツはー！？」

「レアモンってやつだ！」

僕はパソコンを目の前にいる向けて分析した。
僕らがレアモンに目を向けていると僕のデジヴァイスが急に反応しました。

「なんでっか？」

「八人目か九人目がここにいるんだ！」

そう言うとテントモンは驚きながらも僕に探すように言いました。

「いいのか？」

「それしかおまへんやろ」

「じゃあ、頼んだよ！」

「はいな！」

僕はテントモンがカブテリモンに進化したのを見届けてデジヴァイスの反応がある方へ走って向かった。

- side end -

- side 奏 -

私はドルモンと一旦別れてミーコの搜索をしていた。

「いた、ミーコ！」

視界にミーコを捕らえると名前を叫んだ。

私の声に反応したのかミーコは私の方に振り向いて駆け寄ってきた。

「もう、勝手に行ったらいけないよ。ヒカリちゃん、心配して

「ただから」

口にくわえられていたデジヴァイスをポケットに入れ、ミーコを叱る。

ミーコは自分が怒られていることが分かったのか、私の腕の中で小さく鳴いた。

そして、帰ろうとすると背後から声をかけられた。

「その子ども！ちょっと待ってもらおうか」

これが・・・太一さんの仲間以外にミーコを追っていたもう一つの奴か。それにしても・・・

振り向くと丸いコウモリのようなデジモンがいた。

・・・何だろう、こいつ・・・かなり三下くさい気がする。

「——・・・おいっ！聞いているのか！」

「・・・すみません。で、何か用ですか？」

「貴様・・・選ばれし子供だろ」

「・・・選ばれし子供？何ですかそれ？」

「とぼけるな！貴様、デジヴァイスを持っているだろう！」

丸いコウモリは足に持っているピンクに光っている紋章を私に見せながら詰め寄った。

・・・私の敵と認識していいみたいだね。となると、こいつや向こうのデジモンはデジヴァイスを追っていた。もしくはその所持者、選ばれし子供を探していた。

「ったく、もういい！いいから来い！」

丸いコウモリは空いている片足で私を掴み連れて行くこととする。

「・・・ミーク、少し我慢してね」

私はそうつぶやく。

そして、小さくジャンプし、丸いコウモリに上段蹴りを当てた。

「ぐわっ！」

『ドルモン！』

『わかってる！』

ドルモンは高く積んであった積み荷の上から飛び降りて踏みつけた。

「ぐえっ！？・・・」

丸いコウモリは変な声を出しながら気絶した。
そして、私たちはこいつに近づく。

「奏、こいつどうするの？」

「こいつは私、というか選ばれし子供を探しているみたいだから何か知っているはず。ということでこいつの記憶を除いて何かしらの

情報を得る。そして私たちのことを知られたから少し前からの記憶を消す」

私は術式を展開し、記憶を覗く。

その後、記憶を消して、こいつが持っていた紋章を奪う。家に帰ろうとするとデジヴァイスが反応した。

「・・・すぐそこまで来てるみたいだね。ドルモン、帰るよ」

「はい」

私はドルモンとミィコを抱きかかえ、空へ上がった。そして空を蹴り、家に戻った。

- s i d e e n d -

第7話

- side 奏 -

帰宅後、丸いコウモリの記憶を映像化してドルモンと見ている。

そこには、私以外の選ばれし子供の姿や丸いコウモリの主、私の命を狙っている者の姿などが映っている。

「空さんも選ばれし子供だったんだ・・・」

私は太一さんにサッカー部の練習に誘われついて行った時に会った先輩も選ばれし子供だったことに驚いた。

それにしてもあいつが私を連れて行こうとしたのか理解できたよ。

私ともう一人の選ばれし子供を殺すためなんてねえ・・・でも、また振り出しに戻したから再び私のことがバレない限りは大丈夫なのかもね。

「奏、もう一人の選ばれし子供って誰なんだろうね？」

もう一人の選ばれし子供か・・・ん？というかどうしてミーコがデジヴァイスを持っていた？・・・まさか！？確か太一さんたちが選ばれたタイミングはキャンプ場に行った時。だとするとパートナーデジモンが傍にいないことも理解できる。それに、あの時見えないはずのデジモンを言えるといった。そして、四年前のこともある・・・でもこれはあくまで推測だし、ミーコが道端で拾った可能性もあるけど・・・はあ・・・

「奏？おーい、奏でってば！」

「あ、ごめん」

「どうしたの？急に考え込んだじゃってたけど」

「・・・もう一人の選ばれし子供がヒカリちゃんかもしれない」

「え？・・・うそおっ！？なんでそうなるの！？」

ドルモンは声を上げて驚いた。

「まず、選ばれし子供の共通点を考えるとおそらくあの全員が四年前の光が丘で起こった『爆弾テロ事件』、オレンジの恐竜のデジモンと黄色と緑のオウムのデジモンの戦いを目撃してる」

「でも、みんながみんな本当にいたかなんて・・・」

ドルモンは当然の疑問を聞いた。

私は頷きながらも話を進める。

「わかってる。これはあくまで推測だから・・・続けるよ？青い帽子をかぶってた女の人、空さんっていうんだけど前に光が丘に住んでいたことがあるって聞いたんだ」

ヒカリちゃんが選ばれし子供であると考えやれる要因などを話した。四年前のデジモンの騒動のに関連していること。

以前から見えないはずのないデジモンが見えていたこと。

「でもさ、もしヒカリちゃんがそうだととしてもパートナーデジモンはいないよ？」

「今日、本当ならヒカリちゃんは太一さんと一緒にキャンプに参加するはずだったけど風邪で行けなかった。だから出会うことがなかったため今はヒカリちゃんの傍にはいない」

「・・・」

「それから、ミーコがどこでデジヴァイスを見つけたのか。私のときもそうだったけど、気付いたらデジヴァイスや紋章があったことから同じようにヒカリちゃんの家の中に現れた。ミーコがそれを見つけ、遊んでいると何かの拍子にベランダの隙間をすり抜け地上に落ちてしまった。あわてて拾いに行こうと降りて行き、様々な偶然が重なってデジヴァイスを持ったまま芝浦についてしまった」

「・・・それって、かなり無理矢理じゃない？」

「そうだね。さっき言ったことも含めると、パートナーに関してはもともといなかったかもしれない。ミーコに関しては外に出た後、偶然にどこかでデジヴァイスを拾ったのかもしれない。けれども極論だけどそんな予感がするんだ」

そう言っているとドルモンは頷いた。

「奏の勘って怖いくらい当たるからそうなのかもしれないね。・・・うん、ボクは奏を信じるよ」

「ありがとね、ドルモン」

その後は敵への対策を考え行った。
偽物の光の紋章や他のデジヴァイスに反応するように精巧に有幻覚

でニセデジヴァイスを作る。

本物は私のモノと同じように認識妨害の魔法をかけて持つことにした。

「これでどれくらいのやつが騙されるかな？」

「下手したら誰もわからないんじゃないの？それくらい本物そっくりにできてるから・・・」

「それならそれでいいんだけどね。少なくともあの吸血鬼にバレなきゃいいんだから」

そう言い、ニセデジヴァイスを適当な場所に転移した。

「さて、今日はここまでにして寝るとしますか」

「そうだね」

私とドルモンはリビングから部屋に入り、それぞれ眠りについた。

翌朝、私はミーコを抱え、八神家を訪れた。

玄関の前に立ち、インターホンを鳴らすと中から声が聞こえた。

「はい・・・奏くん、いらつしゃい！・・・あ、ミーコ！」

玄関から出てきたヒカリちゃんの手には抱えているミーコに気づき声

を上げた。

私はミーコを渡すとヒカリちゃんはミーコに抱きついた。

「あの電話の後にマンションの近くをしばらくの間探してたら偶然見つけたんだ。昨日のうちに連れてこようと思ってただけけど一旦家に連れて帰ったらすぐに寝ちゃって・・・」

「そうだったんだ・・・ミーコを見つけてくれてありがとう、奏くん！」

「どういたしまして」

そして、いろいろと話しながら家の中に入った。

家に入った途端、ヒカリちゃんと太一さんの部屋から太一さんの叫び声とともにものすごい音が聞こえた。

私と一緒に部屋の中を覗くと机や太一さん、アグモンの上には棚から落ちたであろう大量の本が乗っかっていた。

「二人とも大丈夫ですか？」

「何してるの？」

「ヒカリ・・・奏・・・大丈夫だ。ちょっと名簿探してるんだよ、小学一年時の」

「そ、名簿」

私とヒカリちゃんは部屋の中に入り、ドアを閉めた。
そして声をそろえて言った。

「「名簿？」」

- side end -

- side other -

昨夜、芝浦付近で八人目か九人目の反応があつたことはすでに選ばれし子供たち全員に連絡が行き渡っていた。そして今後のことを相談するために彼らは全員集まることにした。

「行つてきまーす」

八神家へ奏がやって来てしばらくすると太一とアグモンは迎えに来た光子郎とテントモンと一緒に出掛けた。

集合時間が近づくにつれ一人、また一人とパートナーデジモンを連れて集まった。

丈とゴマモンは未だに来ていないが六人は始めることにした。

「なんか、すごい騒ぎになってるわね」

「テレビでも朝からこのニュースばかりだからな」

空とヤマトがそれぞれ思っていることを口にすると太一が疑問を口にした。

「でも変なんだよな」

「なにが？」

「前に俺とアグモンがこっちに帰ってきたときもデジモンは現れた。でも、それは俺とヒカリ、そして奏にしか見えなかった。それが今度はたくさんの人に目撃されてこれだけのニュースになってる」

この太一の言葉には全員が口をあけて驚いた。
光子郎はすぐさま自分の疑問を言った。

「ヴァンデモンのゲートを潜って来たからでしょうか・・・？」

「おそろくな。もしあのゲートを通って沢山のデジモンたちがこの世界に押し寄せてきたら・・・」

「っ・・・大変だね・・・」

この場の全員はこれまでに戦ってきたデジモンたちを思い浮かべ、
息をのんだ。

「だから、そうさせないためにも一刻も早く八人目と九人目の子供
を見つけ出してデジモン世界を救うんだ！」

太一の言葉を聞いて全員が頷き、改めて意識を持った。

そしていい感じの空気が流れたが少し離れたところから聞こえてくる
気の抜けた叫び声によって台無しにされた。
声の主は遅れてきた丈だった。

「緊張感のねえヤツ・・・」

息を切らしながら走ってくる丈を見ながら太一はそうつぶやいた。

全員がそろったところで光子郎が改めて確認を行った。

八人目と九人目は僕たちと同じように四年前に光が丘で起こったデジモン事件を目撃しているはず。

昨夜、芝浦にいたということ。

確認を終えると今日の予定である芝浦周辺を搜索することをみんなに伝えたと全員が了解したが丈だけが夏期講習があるからと断った。それを見たミミは持つてくるように言われていた名簿を丈に渡し、自分の分も連絡するように頼んだ。

それを皮切りに全員が持つてきた名簿を渡しそれぞれ仕事を押し付けると行動に移る準備をした。

- side end -

第8話

- side 奏 -

太一さんがアグモンと一緒に出掛けてから時間が経った。

裕子おばさんが作ってくれたお昼を食べ終わった後、再びミーコが外に行ってしまった。

なので私はヒカリちゃんと一緒にミーコを探しに出かけた。

「ミーコ、どこに行っただろう?」

「奏くん、今度はあっちの方探してみようよ」

「そうだね」

マンションから少し離れたところにある公園に入った。

そこでミーコを探していると不意に鈴の音が聞こえた。

聞こえた方を見るとミーコが林の中に入って行く姿があった。

「いた! ヒカリちゃん! ミーコが林の中に入って行ったよ」

「ほんとに! ?」

私たちは林の中に入り手分けして探した。

- side end -

- side other -

ヒカリは奏と別れてミーコを探していた。

奏がミーコにあげた鈴の音が聞こえるので近くにミーコがいることはわかって見つけることができなかった。

「ミーコ？どこなの？・・・ミーコ？」

名前を呼ぶが一向に出てきてくれない。

それでも一生懸命に探していると一匹のしっぽにリングを付けた白い猫とすれ違った。

ヒカリは何かを感じたのか振り返り、すれ違った白い猫を見つめた。その白い猫はヒカリの視線を感じ振り返った。

しばらくの間、見つめあっていたがヒカリが口を開いた。

「あなた、アグモンのお友達？」

「っ！？」

ヒカリの言葉を聞いた瞬間、白い猫は警戒した。

そんなことに気付かないのか無警戒に話しかけた。

「そうでしょう？」

「みゃーお、みゃーお」

「名前は？」

白い猫はさらに一鳴きすると身を翻す。

ヒカリから離れようとする少し離れたところからヒカリを呼ぶ声が聞こえた。

「ヒカリちゃん！捕まえたよー！」

ミーコを腕に抱いた奏だった。

白い猫は奏を気にせずこの場所から離れようと奏のことは気にせずに走った。

しかし、奏とすれ違いざまに本当に聞こえるか聞こえないかぐらいの音が聞こえた。

「・・・こいつがテイルモンか」

この言葉を聞いた途端、白い猫、テイルモンは硬直した。
しかし、すぐさま身体を動かしてこの場から去った。

そんな姿を奏はじつと見つめていた。

- side end -

- side テイルモン -

あの女、なんでアグモンのことを・・・それにあの男はどうして私のことを知っている・・・もしや、あの二人が八人目と九人目の子供か！？しかし、あいつらが八人目と九人目という確かな証拠があるわけではない・・・

「だが・・・」

私はあの女にあった瞬間何かを思い出そうとしていた。それが何なのかはわからない。それになぜか懐かしい感じがあつたんだ。

「それにしてもあの男の方はいつたいなんなんだ！」

あいつからは女のように温かさだけでなく凍るような冷たさまで感じた。

「まさか・・・私はあの男に対し、無意識に恐れたのか？」

・・・いや、そんなはずはない。普通の子供を恐れることなどあるはずが・・・

- side end -

- side 奏 -

ミークを捕まえてから随分と時間が経ち、すでに日は暮れている。現在は自宅でドルモンと一緒にのんびりしているのだが・・・

「・・・奏、どうにかならないの？」

「そうだねえ・・・向こうさんも未だに私とヒカリちゃんを見てるからなあ・・・」

私とドルモンは向かいのマンションの屋上からこっちを見ているテイルモンに意識を向けながら話した。

「でも、テイルモンは特にヒカリちゃんの方を気にしているみたいだけだね」

「だねー・・・でも、このままだとボク、コソコソしながらじゃないと動けないじゃん」

ドルモンはそう言い、ため息をついた。

そんな様子を見て苦笑をしていると不意に自分の魔力を感じた。

「・・・ドルモン、ちょっと行ってくる」

「?・・・行くってどこに?」

「あの二人と接触しにね」

私は窓の外を見ながら言った。

そして、気配を消し、しゅくちでテイルモンがいる屋上へと向かった。

到着と・・・うん、二人は気付いてないみたいだね。私の目の前ではテイルモンと私が作ったニセデジヴァイスを持った人型のデジモンが話している。

話の内容は人型のデジモンとテイルモンの初めてであった時のことのようなのだ。

そして、人型のデジモンはテイルモンに何かを思い出させようとしていた。

「待つ?私が?」

「ええ、あなたはそう言っていた」

「私は誰を待っていたのだ・・・?誰を探していたのだ・・・?」

テイルモンはそう言って黙ってしまった。

そろそろ頃合いかな？さて、何も考えてなかったけど・・・ま、いいか。

「こんな雰囲気の中、こんなことを言うのはあれですけど・・・人の家を勝手に覗かないでもらえますか？・・・ネコさん？」

「「っ!？」」

「どうもこんばんは、テイルモンにウィザーモン」

自分たちしかないはずの屋上に突如私が現れて驚きながらも戦闘の構えをとった。

「お前は・・・昼間の!」

「さすがに覚えてますね。なので、さっきぶりとも言った方がいいですか？」

「なぜお前がここに!さっきまで家にいたはずだぞ!」

「さあ、なんででしょうね？」

答えにならない答えを聞いてテイルモンは一段と警戒心を強めた。しかし、ウィザーモンはジッと私を見つめ、間をおいて口を開いた。

「・・・あなたはいつたい何者です？私やテイルモンのことをよく知っているみたいですが・・・まさかあなたは選ばれし子供の一人

ですか？」

「……」

「……」

私とウィザーモンは何も言わずに睨み合った。

しばらくそのままだった。結局は私が折れ、口を開いた。

「……ええ、そうです。まずは自己紹介をしておきましょうか・
どうも初めまして、私は一之瀬奏、あなたたちや太一さんたちが探
している選ばれし子供の一人ですよ」

「なにっ!？」

「やはり……」

「それにしてもよくわかりましたね、私が選ばれし子供の一人だと」

「それはこいつのおかげだ」

ウィザーモン手に持つニセデジヴァイスを私に向けた。

「微かだがこれからはお前と同じ何かを感じられたんだよ。まあ、
半分は勘だったんだがな」

「へえ・そんなことでわかつちやったんだ。で、どうするんです
？私をヴァンデモンの下へ連れて行きますか？」

それならそれで潰して帰ればいいからどちらでもいいけどな。

しかし私の予想と異なるに言葉をウィザーモンは言った。

「いや、そんなことはしない」

「・・・意外ですね、あの丸いコウモリのように無理やり連れて行くこうとするかと思ってたんですけど」

「丸いコウモリ?・・・ああ、ピコデビモンのことか」

「確かそんな名前でしたっけ・・・これは置いておくとして、二人は他のデジモンとは異なるようですね。さっきの会話の内容を聞いた限りまともな様だから警戒態勢を解くのであればあなたたちの質問に答えてもいいですけど・・・どうします?」

そう言うのとテイルモンとウィザーモンは目を合わせ、頷くと警戒態勢を緩める。

それを見て私は警戒を解き、壁に背を預けた。

そして二人を促すとまずはテイルモンが口を開く。

「なぜお前は私たちやヴァンデモンのことを知っている・・・?」

「簡単ですよ。ピコデビモンでしたっけ?昨日、芝浦であの丸いコウモリと遭遇したときに無理矢理連れていかれそうになったので迎撃したら気絶しちゃって・・・んで、その間に記憶を覗いてあなたたちの情報を得て、ついでに偽物の光も紋章を奪ったんですよ。これで用済みになったので私たちと出会った記憶を消したからあれは覚えてないでしょうねどね」

「・・・そうか」

「ついでに言うとウィザーモンが持っているデジヴァイスは偽物の光の紋章にも反応するように作ったニセデジヴァイスですよ？・・・ほら」

「「なっ!？」」

私が指を動かすとウィザーモンが持っていたデジヴァイスは霧散して消えた。

二人が驚く中、ポケットに手を入れ、

「んで、これが本物です」

本物のデジヴァイスを出して二人に見せる。

そしてそれをウィザーモンに向かって投げた。

「・・・どういうつもりだ」

「それがヴァンデモンのためではなくテイルモンのためで何かを思い出させるために必要なんでしょ？」

「・・・いいのか？」

「ええ、もう一人の選ばれし子供の目途も立っているみたいですし・・・だけど――」

「「っ!?!」」

私は一度言葉を区切る。

そして二人を濃厚な殺気を浴びせ、威圧して言い放つ。

「——ヒカリちゃんに何かやってみる……その時はお前
らを跡形もなく消してやる」

二人は殺気を受け動けないながらも再び構えた。

それを見て私はハツとし、殺気を慌てて抑えたが二人は構えをとつ
たままだった。

そして、テイルモンが冷や汗を流しながらもう一度同じことを聞い
た。

「……本当にお前は何者なんだ」

「私は選ばれし子供で魔法使いな常識とはかけ離れた子供ですよ。
それじゃこれで失礼しますね。……あ、それから私が選ば
れし子供であることは他の選ばれし子供やヴァンデモンにも内緒に
しててくださいね」

それだけ言い残し、私はしゅくちで家へと戻った。

- side end -

第9話

- side 奏 -

テイルモンとウィザーモンに接触した後にサーチャーを飛ばし、二人の様子を覗いていた。

私があつた場を去ってしばらくすると二人は偶々ベランダに出てきたヒカリちゃんに接触する。

ウィザーモンは本物のデジヴァイスをテイルモンに持たせ差し出させた。

ヒカリちゃんは不思議そうに思いながらもデジヴァイスに触れると輝きだした。

その後にもいろいろあつたけど、簡単にまとめると

・ヒカリちゃんとテイルモンが選ばれし子供とそのパートナーデジモンであることが発覚。

・この事実を知っているのは私を除くと太一さんとアグモン、そしてウィザーモン。

・事実の発覚後、ウィザーモンは太一さんにデジヴァイスを預けるとテイルモンと共にヴァンデモンが持つ本物の光の紋章を奪還しに行った。

現在時刻は22:00過ぎ、ベランダからお台場を覆うようにかかり始めている霧の様子を眺めていた。

「これは・・・未完成だけど結界か。おそらくヴァンデモンあたりが私やヒカリちゃんを逃さまいと張っているんだろう」

「これ壊せないのかな？」

「できなくはないだろうけど今の私には無理かな、未だに防御・補助魔法以外は負荷がかかりすぎてまともに行使できないから」

「ボクも無理かも・・・完全体に進化すればできなくはないけど、やったらここが余計に混乱しちゃうだろうし・・・」

「そっか・・・」

確かに完全体に進化するとありえないほど大きくなるからねえ・・・あれはさすがに・・・

「ドルモン、そろそろ寝ようか」

「え？でもこれって大丈夫なの？」

ドルモンは霧を見つめながら言う。

「この霧は外と中とを隔離するものだから直接的な害はないよ。それに何とかしようにも今のままじゃこの結界をどうすることはできない。だったらやることは決まってくるでしょ？」

「ヴァンデモンを倒すこと？」

「そう、術者はヴァンデモンなんだから倒せばこれも消えるでしょ。それにどちらにせよ奴を倒さなければヒカリちゃんや他の選ばれし子供も危ないんだから」

ああいう奴に限って結界内の人間を簡単に殺してしまうのは自分の美学に反する、とかわけのわからない言うだろうすぐに誰かが殺さ

れることはない、だからその隙に奴を倒してしまえばいい。

「それもそうだね。だったら早く寝ようよ、明日はいろいろと大変なことになるだろうし」

「だね。この霧も明日、何かを起こすための布石だろうし・・・」

私はドルモンを抱え、部屋に戻った。

私の予想通り、翌朝になるとヴァンデモンが動きを見せた。

お台場にある家という家にデジモンを襲撃させ、そこに住む住民を無理矢理連れて行った。

さて、敵地に入ったとはいえどうしようか・・・

現在、私は特に抵抗はせずに連行されて東京ビックサイトにいる。周りを見ると大半の人が不安そうな表情をしていて、中には泣いている人、空中にはお化けのデジモンがビックサイト内の人々を見回っている。

お父さんやお母さんが夏休みの間海外へ仕事に行ってるからこんなことに巻き込まれなかったからよかったよ。でも、また心配させてしまっただろうなあ・・・

『奏一、そっちは大丈夫なの？』

『大丈夫だよ、今のところはなにも動きもないから。そっちはどう？ヒカリちゃんや太一さんたちは無事？』

『うん、アクアシティってところにヤマトっていう他の選ばれし子供と一緒に隠れてる』

連行される前、ドルモンに頼んでヒカリちゃんたちの後をつけてもらっていた。

もしもの時のために。

『ん、しばらくそのまま見てて、敵が接触して危なそうになったら介入していいから』

『わかったよ。それじゃまたあとでね』

ドルモンとの念話を切り、ビックサイト内を歩いてまわる。

しばらくするとそこには見知った顔があった。

その人に気付かれないように背後に周り、

「そーらーさん！」

「ひゃっ！？……………って、かなちゃん？！もう、驚かせないでよ」

「あははは、ごめんなさい……………あと、かなちゃん呼ばないで下さいよ、くう先輩」

「ゴメンゴメン……………奏君、ここにいてことは……………」

「ええ、家にお化けのデジモンが押しかけてここに連れて来られま

したよ」

私がそう言つと空さんは驚いた表情になった。
そして、口を開いた。

「奏君・・・デジモンのこと知ってるの？」

「知ってますよ。前々から見えてましたし・・・ヒカリちゃん以外の周りは言つても信じてくれませんでしたけどね」

苦笑しながら言っているとパジャマ姿の女の子が布で覆いかぶさつた何かを連れて私たちに近づいてきた。

「空さん」

「あ、ミミちゃんも捕まつたの？」

「あたし進化した方がいい？」

確かこの人も選ばれし子供で布から顔を出した植物のようなデジモンはパートナーかな？

「あのー・・・空さん、その人は？」

三人が話しているところを悪いとは思つたが声をかけた。

「え？ああ、彼女は私の仲間よ」

「初めまして、私は太刀川ミミ、あなたのお名前は？」

「私ですか？私は一之瀬奏です」

「よろしくね、かなくん」

「かなくんって・・・まあ、いいか。」

「よろしくお願いします、ミミさん」

簡単に自己紹介をやり終え、私はミミさんが連れている布のことを聞いた。

「ミミさん、その布の中って・・・もしかしてデジモンですか？」

「え？・・・どうしてデジモンのこと知ってるの？！」

私の質問に驚き声を上げる。

空さんがミミさんの耳元で何かを言った。

「（ほら、あのとき太一が言ってたでしょ、デジモンが見えたのはヒカリちゃんと奏君だって）」

「（そういえば・・・まさか太一さんが言ってたのって、かなくんのことなんですか？！）」

「（ええ、そうよ。私も奏君がデジモンのこと知ってるって聞いたときは驚いたんだけどね）」

二人が話しているとさっきの会話を聞いていたのか布から少し顔を出したデジモンが声をかけてきた。

「あなた、奏って言うのね。私はパルモン、ミミのパートナーよ」

「うん、よろしくね、パルモン」

パルモンへと自己紹介を終え、空さんとミミさんを見てみるとまだ話していた。

パルモンと話しているときに何度か空さんとミミさんが私を見ていたので会話に内容が気になってしまった。

私は少し考え、悪いとは思いつながらも読唇術で読み取った。

・・・どうやら私が選ばれし子供ではないのかって疑ってるみたいだね。まあ、その通りなんだけどね。聞かれたら答えるつもりなんだけど、ここは一応敵地だからなあ・・・黙ってていいか。

「奏？どうかしたの？」

「ううん、なんでもない。ただ、二人とも何話してるのかなあって」

その後は二人の会話が終わるまでパルモンといろいろと話していた。しばらくして会話を終えた二人も加え四人で話していると少し離れたところから裕子おばさんの泣く声、進おじさんのなだめる声が聞こえてきた。

「ミミちゃん、奏君のことお願いしていいかな？」

「別にいいけど・・・空さんは？」

「太一のおばさんを落ち着かせてくるから」

「空さん、私も裕子おばさんのところに行ったほうが・・・」

「うっん、奏君、私一人で大丈夫よ」

そう言い残して行った。

すると、ミミさんが私に話しかけてきた。

「ねえ、かなくん、太一さんの両親と知り合いなの？」

「ええ、私のお母さんと裕子おばさんが高校の同級生だったらいいんです。こつちに引越してきたときに再会して、そのときから太一さんやヒカリちゃんを含め家族ぐるみでお世話になってるんです」

「そうなんだあ、ところで前に住んでたところってどこなの？」

「光が丘ですよ？」

「・・・・・・へ？」

あ・・・・これって・・・・やってしまった・・・・？

「かなくん、光が丘で四年前にあったデジモン同士の戦いのこと知ってる？」

やっぱりか・・・・ある程度、確信をもって選ばれし子供じゃないのかって疑っているみたい・・・・もう、この際にバラすか。

「もしかして、かなくんって選ば「選ばれし子供、ですか？」?!
じ、じああ!、やっぱり」

「奏が」

「選ばれしこどもんくっツツ!!?」

ミミさんとパルモンは身を乗りだし叫ぼうとしたのですぐさま口を塞いだ。

お化けのデジモンが数体こちらを見たけど、愛想笑いを向けるとどこに行った。

「二人とも静かにしてくださいよ。バレるじゃないですか。一応、ここは敵地なんですから」

そう言いながら口から手を離す。

「くっツ、ぷはっ・・・あ、あはは・・・ごめんごめん」

「と、ところで奏のパートナーはどこにいるの?」

話を変えられたし・・・はあ・・・

「ドルモンならここに来る前に別れて太一さんとヒカリちゃんのあとを付けてもらってますよ」

「太一さんとヒカリちゃんのあとを?なんで?」

「ヒカリちゃんを守るためです。ただでさえ、ヴァンデモンが八人目と九人目を殺そうと躍起になってるんですから保険があるに越したことはないでしょ?」

「どうしてヴァンデモンのことを・・・ん?ヒカリちゃんを守るためって・・・まさか、もう一人の選ばれしの子供って!?!」

「ヒカリちゃんですよ。さらに言うなれば、ヒカリちゃんのパートナーデジモンはテイルモンです」

これを聞いてまた叫びそうになる二人の口を塞ぎ、ため息をついた。

それからしばらくしてミミさんと空さんの下へ行ってみた。

すると、そこでは進おじさんや局員の人たちが中心となって脱出の計画を練っていた。

途中、ミミさんの両親のせいで話が一時的に止まることもあり、ミミさんが頭を抱える、なんてことがあったけど作戦が実行されようとしていた。

「行きますよ皆さん」

「「「はい」」」

男性たちは手に武器を持ちお化けのデジモンたちへと突っ込んで行った。

- s i d e e n d -

第9話（後書き）

そろそろ期末が始まってくるので7月いっぱいには更新が不定期になります。

更新できるときはしますのであしからず・・・

あと、誤字報告やアドバイスがほしいです。感想を書いてくれるとポテンシャルが上がりやる気につながります。なのでよろしく・・・

第10話（前書き）

試験勉強のせいか少しおかしくなっている気が……ハア…

誤字脱字や表現などといった改善点があればお知らせください。
感想も待ってます。

第10話

- side 奏 -

進おじさんをはじめとした大人たちの一計を案じて、女性と子供だけでも逃がそうとデジモンたちに立ち向かった。

しかし、逃げ行く先には黒い恐竜型デジモンが待ち構えていた。パルモンがトゲモンへと進化し、立ち向かうが・・・

目の前で起こる暴虐を目の当たりにしたミミさんの怒りと悲しみが爆発した。

その気持ちに反応してミミさんの持つ純真の紋章が光りだし、トゲモンが完全体であるリリモンへと進化させた。

リリモンへと進化した様子を見た後、私はヒカリちゃんたちがいるアクアシティへと向かいだした。

アクアシティへと向かう途中、上空を炎を纏った鳥型のデジモンが通り過ぎた。

「あのデジモンの足に掴まっているのって空さん？それにあればリリモン・・・」

ということはあの鳥型のデジモンは空さんのパートナーなのか・・・それしてもなんでリリモンが石化状態に・・・？

「まあいいや、それよりも今は・・・」

私は目を前に向ける。そこには町の中を見回っていたお化け型のデジモン、バケモンが私の道をふさいでいる。

「さて、お前たちには悪いけど・・・お前たち潰して・・・そこ、通らせてもらつよ？」

バケモンに笑顔で言い終わると同時に瞬動で突っ込んだ。
まずは目の前の一体に拳撃を打ち込む。

「『百歩沁鍾』！」

拳撃が当たると後続を巻き込みながら数十メートル飛んだ。
他のバケモンたちは目の前の光景に啞然とし、固まった。

「ぼーっとしてるなんて、余裕だね」

私は容赦なく潰していく。

一匹、また一匹と。

仲間が減るにつれてバケモンたちはまとまって私に襲い掛かるが・

・

「簡単な攻撃魔法なら負荷がかかることはないんだよ・・・って、
お前たちに言っても意味はないね。『魔法の射手・連弾・雷の7矢』
！」

魔法の射手は襲い掛かってきた全員に当たり、バケモンたちは地に伏した。

「ん・・・もの足りないとはいえ、軽い運動にはなつたかな？」

まあいいか、さっさとドルモンと合流しますか。

私は再びアクアシティに向けて足を進めた。

- side end -

- side ドルモン -

奏と別れて随分と経った。

ボクは鉄筋の上に乗っかり、ヒカリちゃんたちの様子を見ている。
これまでにあったことをまとめてみる。

- ・ 太一、ヒカリちゃん、アグモンが敵の目を欺きながら逃げていた。
- ・ ここ、アクアシティを通り過ぎようとすると仲間のヤマトとガブモンと合流し、ここで身を隠すことにした。
- ・ しばらくして、太一がヤマトにヒカリちゃんを預けて行動をとるべくアグモンと外に出た。

それにしても、まだこないのかなあ・・・奏ならデジモンに絡まれても無事だろうけど、こんなに時間がかかるってことは敵の量が多い？それとも向こうを出る時間が遅かった？

ヤマトがデジヴァイスで時間を確認した。

どうやら太一が出てもう、二時間たったらしい。

下を見るとヤマトがなかなか戻ってこない太一にもどかしさを感じていた。

そんな時、外から鳥の羽ばたく音が聞こえ、ヤマトとヒカリちゃんを呼ぶ声が聞こえた。

「ヤマトー！ヒカリちゃん！」

この声を聞いて二人は外へ出る。
そこに空とバードラモンが降り立った。

「ここだって、太一に聞いたの、みんなビックサイトに捕まってるのよ」

「ビックサイトか・・・!」

仲間が迎えに来たみたいだけど・・・他にもいないものがついてきたみたいだね。ホント、奏の勘はよく当たるよ。だから、早く来てよね・・・奏!

ボクはいつでも動けるように準備をした。

「——ヒエッヒエッヒエッヒエッ・・・」

「「!?!」」

どこからともなく声が聞こえた。

下にいる全員は声がする上空を見上げる。

そこにはヴァンデモンの部下であるフロントモンがいた。

「八人目を探さすとも、お前らを倒せば同じこと、ここで果てるがよい。出でよ!」

フロントモンがそう言うつと、地上が盛り上がり、そこからは緑の恐竜型デジモン、タスクモンが現れる。

「ええい!」

次は上空が緑に渦巻き、昆虫型のデジモン、スナイモンが現れた。

「ガブモン!」

これを見たヤマトがガブモンを名を叫ぶ。

それに応えるようにガブモンがガルルモンへと進化した。

ガルルモンはタスクモンへ、バードラモンはスナイモンへ立ち向かった。

そして、それぞれの戦闘が始まった。

これはまずいかもね。デジモンが二対三に加えて、あのフロントモン・・・選ばれし子供を狙うみたいだし・・・

現状ははっきり言って最悪。

ガルルモンはタスクモンのパンチで飛ばされて動けなくなっていた。バードラモンが完全体のガルダモンになってもスナイモンに力負けしてる。

それに、ヤマトがフロントモンに鎖で首を絞めつけられている。

・・・仕方ないよね、このままじゃみんな死んじゃうかもだし。それに・・・

ボクはヒカリちゃんに目を向けた。

ヒカリちゃんは自分のせいでみんなが傷つく姿に耐えられなくなっていた。

そして、

「・・・お願い・・・やめてーっ!..!」

ヒカリちゃんの叫びがこちら一帯に響き渡った。

「わたしが八人目なの・・・どこにでもついてい「ダメだよ、ヒカリちゃん！」・・・え・・・？」

ボクはヒカリちゃんの言葉を遮る。

そして、タガーを取りだしながら勢いよく鉄筋から飛び降り、

「『ダイノトウス』！」

――斬

フロントモンの気がそれているうちにヤマトの首を絞めている鎖を断ち切った。

締め付けていた鎖がなくなり、ヤマトがむせた。

「ケツホ、ケツホ・・・お前は・・・」

「大丈夫、ボクは君たちの仲間だよ」

「それってどういう・・・」

ヤマトの言葉を笑みで返して空やりりモンを見る。

「・・・あ」

どうやら二人は僕が何者なのかわかってるみたい・・・奏が教えたのかな？

そして、最後にヒカリちゃんを見る。

「あたなは・・・」

「ボク？ボクは「誰だお前は！」・・・お前さ、少しは空気読もうよ」

ボクの言葉はフアントモンの叫び声によって止められた。
ため息をつき、フアントモンを見上げながら言う。

「お前に教えることなんてないよ。だから・・・さっさとくたばれ！」

ボクは手に持っていたタガーを投げた。

投げたタガーをフアントモンは軽々と避けた。

「フン、いったいどこを狙っている」

「ん？どこつて、それは・・・」

ボクは投げた先を見て笑いながら視線を送る。

「お前の後ろにいる私に向かってだよ！」

「なっ！？」

フアントモンは突然現れた姿に驚きながら振り向いた。
だけど、

「遅い！」

奏はタガーを受け取ると、ファントモンが振り向く前に神速で身体を切り裂いた。

「がはっ・・・」

すると、ファントモンが消滅した。

奏は地上に降り立って、タスクモンとスナイモンを殺気をチラつかせながら睨んだ。

「お前たちはどうする？やるんだったら相手になるけど・・・」

しばらく沈黙が続いたけど、二体は逃げるように消えて行った。

- s i d e e n d -

- s i d e 奏 -

「奏ーっ！」

「よつと・・・お疲れさん」

「遅いじゃん！」

「あははは、ごめんごめん、行く先々でバケモンとかと戦ったりしてたからさ」

あの二体が消えるとドルモンが飛びついてきた。

そんなドルモンを抱え、労いの言葉をかけているとヒカリちゃんが近づいてきた。

「奏……くん……なの？」

「そうだよ。正真正銘、ヒカリちゃんがよく知っている一之瀬奏だよ」

「奏……くん……奏くん！」

ヒカリちゃんは私の名前を叫びながら勢いよく走ってきた。それを見たドルモンは私から降り、それと同時にヒカリちゃんは私に抱きつくと言き出した。

「うう……っ、奏くん、お父さんが……！お母さんが……！みんなが……！私のせいで……ぐすっ……」

「ヒカリちゃんだけのせいじゃないよ、私のせいでもあるんだから……今は泣けるだけ泣いた方がいいよ、少しは楽になるから」

そう言い聞かすとヒカリちゃんは一層強く抱きつき声を上げながら泣いた。

そんなヒカリちゃんの背をさすった。

「奏君……」

ヒカリちゃんが落ち着いていたのを見計らって空さんたちが近づいてきた。

「さっきぶりです、空さん。そっちの人は初めまして」

「ああ、今さっき空にお前のことを聞いた、俺は石田ヤマトだ」

「私は一之瀬奏です、よろしく願いします」

この後、ドルモンの紹介も行った。

そしてこれからのことを考え始めた。

「ヤマト、これからどうするの？」

「そうだな……よしっ、ビックサイトに行こう！」

ヤマトさんは空さんから聞いた太一さんの頼み通り、太一さんを追ってビックサイトに向かおうとした。

「待ってください、ビックサイトに行つてどうするんです？」

「どうつて、捕まっているみんなを助けに……」

私はため息をつき、ヤマトさんと空さんを見る。

「向こうに行つて捕まっている人を逃がしているときにヴァンデモンや他のデジモンが襲撃してきたら少なくともケガ人、最悪の場合には多くの人が死にますよ。それに捕まっている多くの人は連日のデジモンの事件のせいでデジモンに対して恐怖を抱いています。だから私たちがデジモンを連れて行けばさらに混乱するでしょうね」

「……」

そういうと二人は黙ってしまふ。

「奏くん、それじゃあどうするの・・・？」

「ヴァンデモンをビックサイトから連れ出して倒す」

「でもどうやって・・・」

「ヴァンデモンは今、テイルモンを使って私やヒカリちゃんを探し出そうとしている。だったら、それを利用すればいい」

三人は不思議そうに私を見ていて、ドルモンは私は何をしようとしているのかわかったような表情をした。

「簡単に言くと、ヴァンデモンに八人目と九人目が見つかったという情報を流し、ビックサイトから引き出す。その時あいつはテイルモンを連れてくるだろうからその時にテイルモンを・・・」

「待つて！そうしたら奏君とヒカリちゃんが危険だわ！」

「そうだ！わざわざ自分から危険な行くことは・・・！」

空さんとヤマトさんの制止の声が入った。

私は首を横に振り言葉を続ける。

「わかってます。だけど、これが今できる最善の策です。それから行くのは私とドルモンだけです。ヤマトさん、空さん、二人は他の仲間と合流してください。それからヒカリちゃんをお願いします」

私は抱き着いているヒカリちゃんを預けようとすると

「いやっ！奏くんが行くなら私もっ！・・・私だってテイルモンを助けてい！」

更に力強く抱きついて離れようとはしなかった。

この後、私はヒカリちゃんを説得しようとしたけど、結局は失敗してしまう。

そして、私とヒカリちゃんやマトさんと空さんを何とか説得して、無茶をしないという条件で何とか許してもらった。

「でも、どうやってヴァンデモンに知らせるの？」

「それはこうやって・・・」

私は有幻覚を使い、ファントモンを生み出す。

「「「！？」」「」」

「とまあ、こんな感じです。これは襲い掛からないので心配いりませんよ」

ドルモン以外の全員が驚いて、私と有幻覚を見た。

「奏くん・・・？」

「ゴメンね、驚かせちゃって・・・怖い？こんなことができる私が・・・」

私はヒカリちゃんや空さん、ヤマトさん、それぞれに目を向ける。

「うっん、奏くんは奏くんでしょ？だから怖くないよ」

「そうよ、私は少し怖いけど・・・かなちゃんだもの、だから私も大丈夫よ」

「ああ、少なくとも俺もそんなことで誰かをどんな人間かを決めつけないよ」

「ありがとう、みんな・・・じゃあ、改めて自己紹介をするね」

私はみんなに向き直り、笑みを浮かべて言い放つ。

「私は一之瀬奏、可能性の紋章を持つ選ばれし子供で前世を受け継ぐ魔法使いです」

- side end -

第10話（後書き）

魔法・技に関しては『世界に落ちた者』で使用したものなのでそこらを探してください。

第11話

- side ミミ -

ビックサイトのあるフロアにて・・・

大人たちの作戦が失敗した後、私や他の子供たちは大人たちとは引き離されてしまい、ビックサイトの中のどこかのフロアに集められた。

そこではヴァンデモンは捕らえた子供たちを一人一人テイルモンに見せて八人目と九人目を探していた。

やっぱり・・・かなくんがどこにもいない・・・

私は辺りを見渡して少し前に知り合った年下の男の子を探した。

もしかしてあの時どこかに隠れたのかな？無事だといいな・・・

私はかなくんの心配をしながらテイルモンに目を向けた。

テイルモンはパートナーのヒカリちゃんが自分の目の前に来ないことを願いながら目の前に立つ子供を見て首を横に振っている。

かなくんが言った通りテイルモンがヒカリちゃんのデジモンなんだ・・・あの時のテイルモンと全然違うし・・・それよりも、この状況をどうにかしないと！

今できることを考える。

そうしているとピコデビモンがヴァンデモンの所に飛んできた。

「ヴァンデモン様！」

「なんだ」

「八人目と九人目が見つかりましてございます」

「なに！？」「っ！？」

かなくんとヒカリちゃんが見つかったの！？

ヴァンデモンはそれを聞くと唇を釣り上げ、私やテイルモンは顔を暗くした。

「聞いたかテイルモン」

ヴァンデモンが厭味つたらしく見下ろすとテイルモンは鋭い目でヴァンデモンを睨み返した。

「よし、そうとわかればここにはもう用はない」

そう言いヴァンデモンはピコデビモンと何かを話しているとフロア一帯に霧のようなものが漂った。

「あ・・・」

私はそれを吸い込むと視界が真っ暗になった。

- side end -

- side other -

ヴァンデモンが八人目と九人目を見つける少し前、太一はミミや両親を助け出すため、ビックサイトに向かった。

「・・・なんだ？」

太一はビックサイトに入って行くピコデビモンを見つけると声を上げる。

物陰に身を潜めていると今度はヴァンデモンがテイルモンを連れてどこかに向かっていた。

「ヴァンデモン・・・」

「どこに行くんだろ・・・」

ヴァンデモンの行方を疑問に持ちながらもビックサイトに足を踏み入れた。

アグモンが進化したグレイモンがビックサイト内にいるバケモンを撃退しながら進んでいると、

「あつ！太一さーん！」

一角からミミが出てきて太一に駆け寄った。

「みんなは！？」

「眠らされちゃったの・・・私はたぶん紋章のおかげですぐに目が覚めて・・・それよりもヴァンデモンが八人目と九人目を・・・かなく

んとヒカリちゃんを見つけたって!」

「なんだって!?・・・って、なんでミミがヒカリが選べれし子供って知っているんだ?それになくンって・・・」

「太一さんはよく知っているでしょ、一之瀬奏くんのこと。ビックサイトに連れて来られた時に知り合ったの。その時になくンが自分とヒカリちゃんが残りの選ばれし子供だって教えてくれて・・・」

「奏も選ばれし子供なのか?!それになんで奏のやつがヒカリのことを・・・いや、それは奏と会った時に聞けばいいか。よし、みんなとの所に行こう!」

太一とミミはグレイモンに乗って仲間の下へと急いで向かった。

ヤマトと空は奏と別れた後、ガルルモンとガルダモンに乗り、フジテレビに向かった。

到着するとそこには光子郎、丈、タケル、ヤマトとタケルの父親の石田さん、そしてウィザーモンがいた。

「お兄ちゃん!」

「タケル!」

二人は名前を呼びあうとお互いの無事を喜んだ。
そんな中、ウィザーモンはガルダモンの掌にいる石化したリリモン

に近づいた。

「あなたは・・・」

「私はウィザーモン、それよりも・・・ヴァンデモンのデッドスクリームを受けたのですね」

「ええ・・・」

ウィザーモンは空に確認をとるとリリモンに向けて手をかざる。掌からオーラのようなもの出て、リリモンを包み込んだ。すると、リリモンの石化が解けた。

「「!？」」

「リリモン・・・!」

「・・・あれ？私・・・・・・・・・・わあ・・・・・・・・!」

ガルダモンの掌から飛び降りると身体を動かして確認していた。ウィザーモンは空やヤマトに向き直ると懐に手を入れながら口を開いた。

「ヒカリはどこにいるんだ、早くこれを渡さないと・・・」

そう言っって懐から取り出したのは光の紋章だった。

「なっ！これは・・・!」

「・・・ヒカリちゃんの光の紋章ね」

「みたいだな」

事情を知らない光子郎だけが驚き、空とヤマトは特に驚くことはなかった。

そんな二人を見た丈とタケルは二人に声をかけた。

「なんで二人とも太一の妹が選ばれし子供だって知っているんだい？」

「そうだよ、僕たちだってさっき知ったばかりなのに」

「奏に聞いたんだよ、ヒカリちゃんのことウイザーモンのことも」

「奏？誰だいその人は・・・？」

丈をはじめとして、タケルと光子郎も頭に？を浮かべていた。

「九人目の選ばれし子供よ、丈先輩。丈先輩はあの時いなかったけど光子郎君とタケル君は覚えてるでしょ、あのとき太一が言ったこと」

空がそういうと二人は思い出し、驚いた表情になった。

そんな中、ウイザーモンが空に尋ねた。

「ヒカリと奏はどこにいるのです」

「ヒカリちゃんは奏くんは・・・」

空はそう言いながらフジテレビを見上げる。

それにつられて他の面々も同じように見上げた。

「・・・ここ、ですか？」

「ええ、二人はテイルモンを助けるために態とヴァンデモンの手下に捕まったの」

「『『『なっ!?!』『』『』」

これにはさすがに奏と一緒にいた者たち以外は驚きを隠せなかった。

「じゃ、じゃあ早く二人を助けに行かないと！」

タケルがそう叫ぶと全員がうなずく。

そして二人のもとに急ごうとしたとき、上空にコウモリの群れを連れ、テイルモンの頭を掴んだままヴァンデモンがフジテレビの展望台に入ろうとしていた。

その際、地上にいる選ばれし子供たちをニヤリと一瞥した。

「みんな、展望台に急ぐぞ！」

「よし、案内しよう！」

石田さんの案内のもと奏とヒカリがいる展望台へと急ごうとすると地中から二体のデジモンが現れた。

「こいつらは!?!」

ヤマトが声を上げて驚く。

ヤマトたちの目の前に現れたのは先ほど奏から逃げて行ったタスク

モンとスナイモンだった。

「ガルルモン！」

ヤマトが叫ぶとデジヴァイスが光だしガルルモンはワーガルルモンへと進化した。

そして二体に攻撃を仕掛けた。

「ここは私たちに任せて！」

「ヒカリと奏を助けるんだ！」

ガルダモンとズドモンもワーガルルモンと二体の相手をすると言い、ヤマトたちに二人を助けに生きように言った。

「わかった！行くぞ！」

ヤマトたちはこの場をワーガルルモンたちに任せ、展望台に向おうとする。

しかし、ウィザーモンは光の紋章を奪還する際にヴァンデモンから受けたダメージがかなり残っていたせいか膝から崩れ落ちてしまった。

「うつ・・・」

「ウィザーモン、大丈夫！？」

「手を貸そう、さっ」

タケルが駆け寄り、心配する。

そして石田さんがウイザーモンに手を貸し、支えながら展望台へと向かった。

- side end -

- side 奏 -

ピコデビモンがヴァンデモンに私とヒカリちゃんのことを知らせに行つてすぐのこと。

「・・・ヒカリちゃん、怖い？」

私は隣で少し不安そうにしているヒカリちゃんに声をかけた。

「少しだけ・・・でも、テイルモンを助けるために頑張る。それに奏くんが近くににいるから大丈夫、奏くんは怖くないの？」

「私？私はあまり怖くないよ。ヒカリちゃんがいるし、近くにはドルモンがいるからね」

「え？どこにもいないよ？」

ヒカリちゃんはあたりをきよろと見渡す。
そんな様子にクスクス笑いながら答えを教える。

「ヒカリちゃんの足元にいるよ」

「やつほー、ヒカリちゃん」

「わっ！？ドルモン！いつからそこにいたの？」

「最初からだよ」

「あれ？それなら私、気付くはずなんじゃ・・・」

「ドルモンには気配を消してもらった上に私が見えないように光を屈折させてたからね」

ヒカリちゃんは私の説明がよくわからなかったようで頭に？を浮かべながら首を傾げた。

「簡単に言ったらドルモンが魔法で見えなくなっただって言えばわかるかな？」

「うん、それならなんとなくわかる」

それからしばらくの間、三人で会話を続けた。
少しでもヒカリちゃんの不安が和らぐようにと・・・

「・・・来たか」

「だね」

「どうしたの二人とも？」

急にこんなことを言い出した私とドルモンにヒカリちゃんは聞いた。

「もうすぐここにヴァンデモンが到着する。テイルモンもちゃんといるみたい」

テイルモンが来るという言葉に反応したけど、すぐに顔を曇らせた。

「・・・不安なら手を繋ぐ?」

「うん・・・」

そう言い、手を差し出すとヒカリちゃんは握り返した。

「大丈夫、ここには私もドルモンもいる。下には空さんたちがいてここに来てくれる。太一さんだって急いでここに向かってくれる。だから大丈夫だよ、みんなでテイルモンを助けてヴァンデモンを倒すから」

「うん!」

ヒカリちゃんのしっかりとした返事を返した。

私はそれを聞き、頷くと消していたファントモンの有幻覚を出した。それを終え、少しすると天井がコウモリに覆われ、ヴァンデモンたちが降りてきた。

- side end -

第11話（後書き）

感想や評価、お待ちします。

第12話

- side 奏 -

現在、私とヒカリちゃんの目の前にはヴァンデモンが佇んでいて、愉快そうに笑っている。

そのヴァンデモンの手にはテイルモンが捕われていて悲しそうな表情でこっちを見ている。

「娘、小僧、お前たちは何故自分から名乗り出たのだ、私が何をするのかわかっているのか？」

「・・・何となく」

「・・・ええ」

私たちの返事を聞いたヴァンデモンは興味深そうな表情になった。

「では何故」

「・・・みんなを苦しめるから」

「何？」

ヴァンデモンは表情を崩し、テイルモンは驚いた表情になり、ヒカリちゃんを見る。

ヒカリちゃんは私の手を強く握り、強い意志の宿った目でヴァンデモンに言い放った。

「あなたが、みんなを苦しめるから！」

ヒカリちゃん・・・フツ、ヴァンデモン相手に怯まないでああも言い返すなんて・・・まるで巫女みたいだね。優しさとか心の強さを持ち合わせてるところとかこのかにそっくりだ・・・って、これをもったって意味はないね、今の私は一之瀬奏であって風水双樹ではない。だからこれはもう、大切なものだけ思い出でしかないのだから・・・

私はヒカリちゃんの姿を見て、懐かしい思いになりながらもヴァンデモンに目を向ける。

ヴァンデモンはすぐに表情を戻し、感心したように笑う。

「向こう気の強い娘だな、それに比べ・・・」

ヒカリちゃんから私に視線を移し、品定めするように私を見る。私はそれを気にせず、ただ見つめ返す。

「まあいい、テイルモン、何故八人目と九人目の顔を見ない」

「そんな奴らは知らない。そんな奴ら、八人目と九人目などではない」

「なるほど・・・」

テイルモンは私たちを見ずに言う。

それに対し、ヴァンデモンは笑みを浮かべながら指を鳴らした。すると、私たちの背後にまわっていたピコデビモンがヒカリちゃんに近づこうとした。

あの丸いコウモリ・・・ヒカリちゃんに何かするみたいだね。ここを潮時にしますか・・・そんじゃまずは、

私はヒカリちゃんの手をほどき、丸いコウモリ目がけて気で強化した右手で思いつき裏拳を放った。

「うぎゃ!？」

——ドスッ・・・

短く叫び声が聞こえると、鈍い音が展望台に鳴り響いた。

「「なっ!？」」

ヴァンデモンとテイルモンは驚きながら音の鳴った方を見た。

壁に丸い窪みを中心に亀裂が入っていて、その下には丸いコウモリが瓦礫に埋もれながら倒れていた。

そして、二人は私を見た。

「ヒカリちゃんに手を出そうとするなんてねえ・・・それよりも・・・テイルモン、私たちのために惚けなくてもいいよ。それからヴァンデモン、テイルモンを返してもらっよ・・・」しゅくちゅ」

ヴァンデモンに捕われていたテイルモンを自分の腕の中に転移させた。

突然テイルモンが私の腕の中に移動したことに私とドルモンを除く三人は驚いた。

「奏!?! いったいどうやって・・・」

「私の'力'を使って瞬間移動させたんだよ。前に言ったでしょ？
私は魔法使いだって」

そう言いながらテイルモンを降ろす。

テイルモンはヒカリちゃんの前に立ち、目配せし、微笑み合った。
そして二人は顔を引き締めヴァンデモンに向き直る。

「小僧、何をした！」

「何でしょうね。．．．それよりもお前の前に出てきた理由を言う
てなかったですね」

私は一歩前に出ながら言う。

そんな私を鋭い目つきで見返すヴァンデモン。

「一つ目はテイルモンの救出、そしてもう一つは．．．——」

私は身体強化を行った後、瞬動でヴァンデモンの懐に潜り込む。

「なっ！？」

「——お前を潰すことだよ。『大鵬拳』！」

上方へ向けて渾身の打撃を打つ。

ヴァンデモンが天井に打ち付けられるが、威力が強すぎたために天井を突き抜けた。

「おまけだ、ドルモン！」

「『メタルキャノン』！」

不可視になっていたドルモンに追撃をさせる。

ドルモンの放った無数の鉄球はさらに天井を破壊しながらもヴァンデモンを直撃した。

「グッ・・・貴様あ!!」

おーおー怖い怖い・・・それにしても思ったよりダメージが少なそうだね。やっぱり身体ができてないからかな？

「覚悟はいいだろうな・・・」デットスクリーム「メガブラスター!!」「『フラウカノン』!」チツ!

ヴァンデモンが私たちを殺そうと反撃しようとするがプラズマ弾とエネルギー弾によって遮られた。

私たちが振り返るとそこにはリリモンと青いカブトムシのようなデジモンがいた。

「奏くん!ヒカリちゃん!助けに来たわよ!」

「二人とも大丈夫か!」

「空さん!ヤマトさん!」

空さんとヤマトさんが他の仲間と一緒に駆け寄ってきた。

私たちも合流するため駆け寄ろうとすると突然身体が宙に浮いた。

「・・・ヴァンデモンか」

「うるさくなってきたな、場所を移そう」

リリモンたちの攻撃で高ぶりが引いたのか、冷静な声で屋上へと場所を移した。

私たちの目の前にはヴァンデモン、展望台内には空さんたち、上空にはそのパートナーデジモンたちが完全体となつて戦闘態勢になっている。

さて、どうしたものか、ドルモンのメタルキャノンはそこまでダメージになつていなかったし・・・やっぱり成長期と完全体じゃ少し無理があるか、だったら仕方ない。

「ドルモン、やるよ」

「りょーかい！」

私のデジヴァイスが輝きだすとドルモンが光に包まれた。

「——ドルモン進化ーっ！・・・ドルガモン！」

光が収まるとそこには黒い翼を生やし、身体が倍以上になったドルガモンへと進化した。

「大きい・・・」

「お前、進化できたのか・・・」

ヒカリちゃんとテイルモンはドルガモンを見てそれぞれ思ったことを口にした。

「もちろん！奏と模擬戦やってたらいつの間にかね。それからヒカ

りちゃん、ボクより大きなのなんて上にいっぱいいるでしょ」

と、ドルガモンはテイルモンに答え、ヒカリちゃんには苦笑いしながら話しかける。

そんな三人を見て小さく笑い、気持ちを切り替える。

「フン、たかが成熟期に進化したところで何ができる」

「だってさ、どうする？ドルガモン」

「じゃあ、そのたかが成熟期がどの程度か知ってもらわないとね」

ドルガモンは勢いよく上空へと上がった。

「『パワーショット』！」

ドルモンの時以上の質量の鉄球をヴァンデモンに向かって放つ。

しかし、ヴァンデモンが両手を翳すと鉄球は消滅した。

「あれ？」

「あらら」

んー・・・本気じゃないとはいえドルガモンのあれを簡単に消滅させるのか・・・ん？あれは・・・

「フン、時間の無駄だ、フフフフ・・・ぬわあっ！？」

ヴァンデモンは余裕の笑みを浮かべ鼻で笑っていると背後から攻撃を受け、片膝をついた。

余裕の笑みから一変し、怒りに満ちた表情で向き直るとそこにはウィザーモンの姿があった。

「何!？」

「ヒカリ!受け取れ!！」

「え？」

ウィザーモンは懷から本物の光の紋章を取り出すとヒカリちゃんに向かってそれを投げた。

「ウィザーモン!」

「まだ生きていたのか・・・」

ウィザーモンの姿にテイルモンは喜び、ヴァンデモンは忌々しそうに睨んだ。

ウィザーモン・・・光の紋章の奪還に成功したみたいだね。だけどその代償は大きかったか・・・今も無理して・・・いや違う、気力だけで身体を動かしてるみたい・・・このままじゃウィザーモンは・・・

私はそう思いながらウィザーモンとヴァンデモンを見つめる。

「借りは返さないと気が済まないタイプなのでね」

「黙れ!」

マズイ！

ヴァンデモンはウィザーモンに手を翳し、攻撃を放とうとしていた。それを見てしゅくちでウィザーモンの前に立つ。右手に魔力を収束させ、それを振り下ろす。

「『断罪の剣』！」

放たれた攻撃は断罪の剣によって両断されると消えた。

ツ・・・これでも身体に負荷がかかるか、やっぱり魔法を使うにはこれに頼るしかないか・・・

首にかけている紋章に一瞬目を向け、ウィザーモンに声をかける。

「・・・大丈夫？」

「ああ、すまない奏」

「うつん、それよりもあまり無理しないで・・・その身体、紋章の奪還の時のヴァンデモンとの戦いで限界が来てるんでしょ？」

「・・・お前は何でもお見通しなんだな」

「見たらわかるよ。空さんたちのところに転移させるから」

「・・・ああ、頼む」

「『しゅくち』」

ウィザーモンを展望台の中へと転させ、私は瞬動でヒカリちゃん前へ立った。

「奏、ウィザーモンは・・・」

「紋章奪還の時のダメージが酷いようだったから空さんたちのところで待機してもらってる」

そう言うとテイルモンは顔を暗くする。
そんな時、ここに三つの気配が増えた。

「ん？・・・やつと来た」

「どうしたの？奏くん」

ヒカリちゃんに微笑みながら伝える。

「太一さんたちが来たんだよ」

それを聞いた途端、ヒカリちゃんは笑みを浮かべた。

「ヒカリちゃん、デジヴァイスは持ってる？」

「え？う、うん、お兄ちゃんから朝に渡されて・・・ほら」

デジヴァイスを取りだして私に見せる。

私はそれを見て頷き、ヴァンデモンに目を向けながら言う。

「それらを絶対手放さないでね」

「うん！」

「貴様ら・・・いい気になるな！」

ことが上手くいかないせいか声を荒げ私たちへと攻撃を放とうとした。

しかしそれは展望台の中から聞こえた声によってまたもや遮られた。

「させるか！メタルグレイモン！！」

「『ギガデストロイヤー』！」

上空から二つのミサイルがヴァンデモンに向かって撃たれた。

ヴァンデモンはメタルショットのときと同様に両手をミサイルに翳す。

「ドルガモン！やれ！」

「わかってる！——『パワーショット』！！」

ドルガモンはすぐさまヴァンデモンの背後に回り込む。
そして先ほどとは桁違いの速度と威力で鉄球を放った。

「フン・・・なっ！？グハッ！・・・グヌヌ・・・」

「どう？さっきと違って全力でやったけど」

「貴様ア・・・！調子に乗るな！『ナイトレイド』！！」

ヴァンデモンはドルガモンに背を向けると私やヒカリちゃんに向け

てコウモリの群れを放った。

「ヒカリ！奏！」「奏！ヒカリちゃん！」

太一さんとドルガモンが叫ぶ。

チツ、こっちに向けてきたか・・・負荷のせいでうまく魔力が練れないけどやるか・・・

「ヒカリちゃん！テイルモン！動かないでよ！——」『マ・セシル
ド』！」

私は両手を突き出し目の前に盾を出現させる。
盾とコウモリが衝突すると一帯に爆音が響き、煙が舞った。

- side end -

第12話（後書き）

感想・評価など待ってます。

第13話

- side ヒカリ -

私とテイルモンを守るために奏くんが何かを叫ぶと真っ白くてきれいな丸い盾が目の前に出てきた。

それとこっちに向かってくるコウモリたちが当たると大きな音が鳴って、煙で目の前が見えなくなった。

「クツ・・・ヒカリ、大丈夫？」

「けほつけほつ・・・テイルモン、私は大丈夫だよ・・・あ、奏くん・・・奏くんは!？」

私は奏くんの名前を呼んだ。

テイルモンも一緒になって名前を呼び続けた。

「・・・ヒカリちゃん、テイルモン、二人とも大丈夫？」

「奏くん!・・・え・・・？」

「奏・・・お前・・・!？」

煙が張れてきて私とテイルモンは目に映った奏くん言葉を見失った。なぜなら奏くんの両腕から血が流れていたから・・・

「二人とも・・・どうしたの？」

「どうしたの?じゃないよ!奏くん、腕からいっぱい血が流れてる

んだよ！」

「奏、早くケガの手当を・・・！」

「ん？ああ、これくらいなんともないよ。それに止血はしてるから治療の必要もないよ」

本当に何でもないといったように奏くんは言った。

「でもっ！」

「奏っ！」

私とテイルモンの心配をよそに奏くんは語りかける。

「心配しすぎだよ、二人とも。見た目は悪いようだけど本当に大丈夫、負担がかかったまま魔法を使った代償だから」

え・・・？代償って・・・

「・・・どうということなんだ？」

「ノーリスクで使えるほど魔法は万能じゃないってこと。今の私には制約がかかっているみたいで思うように魔法が使えないんだよ」

あの時、断罪の剣じゃなくて防御魔法だったらこんな風にならなかつただけだね、と苦笑いながら言う。

私の・・・私のせいで・・・奏くんが、奏くんが・・・っ！

そう思ったら私は奏くんを見れなくなつて俯いて黙っていることしかできなかった。

そのまま俯いていると頭に何かが触れた。

「え・・・？」

頭を上げると奏くんが私の頭に手を乗せてながら穏やかに微笑んでいた。

「ほらほら泣かない、ヒカリちゃんは泣き虫なんだから・・・」

そう言つてポンポンと軽くたたいた。

「どうせヒカリちゃんのことだから私がこうなつたのは自分のせいだと思い込んでるんでしょ？」

「ッ!？」

その言葉を聞いたら身体がビクついた。

「やつぱり・・・せつかく二人を守れたのに二人にそんな顔されたら私どうしたらいいのかわからなくなるじゃん」

私はテイルモンを見たらテイルモンもつらそうな表情をしていた。奏くんを見ると困つたような表情になっていた。

「でもっ!」

私はただ声を上げる。

そんな時、後ろから意思のこもつた声が聞こえた。

「ヒカリ、強くなろう」

え？

振り返ったらさっきとは違って決意した表情のテイルモン。

「テイル・モン？」

「もう、奏がケガしなくていいように・・私たちが奏と一緒に戦えるくらいに！」

「私とテイルモンが奏くんと？」

「そう！私だって守られるだけじゃ嫌なんだ！守りたいんだ！」

私たちが奏くんと一緒に戦う・・そして奏くんを守る・・・・・

「そう・・だね。私も守られるだけじゃ嫌だ・・私も奏くんの力になりたい・・・！奏くんを守りたい！」

そう言うとき首にかけていた光の紋章が輝きだした。

「「え？」」

「これって・・・光の紋章が覚醒した？」

「奏・・お前のも光ってるぞ」

テイルモンの言うとおり、奏くんの紋章も光っていた。

「ホントだ・・・もう私の紋章は覚醒してるのに・・・もしかして私の可能性の紋章がヒカリちゃんの光の紋章に共鳴したのか？」

奏くんは何かを考えながら黙ってしまった。

私とテイルモンは頷きあつて、私たちの決意を伝えるために奏くん
に声をかけた。

「奏くん・・・私、強くなる・・・みんなから守られるだけじゃなくて
みんなを守るくらいに・・・いっぱい、いっぱい！」

「そうだ！もう奏が私たちのために傷つかなくていいように私たちは
強くなる！」

「・・・それが二人の決意なの？」

「うん！」「ああ！」

奏くんは小さく息を吐くと優しい表情になった。

「うん、さっきとは違っていい顔になったね・・・そんじゃ、ここ
を出てささつとヴァンデモンを倒そうか」

「・・・え？」

私とテイルモンは奏くんの言葉に変な声が出た。

「奏くん・・・ここを出るって？」

「ん？ああ、簡単に言うところだね、『幻想空間』という魔法で作

った時間の流れ方が違う世界、って言えばわかるかな？二人が私の名前を呼んでこっちを見たときにいろいろと時間がかかりそうだったから引き込んだんだよ」

私たちは驚いて何も言えなかった。

奏くんはそんな私たちを見て笑い、言った。

「驚いてるところ悪いけど二人とも準備はいい？」

私はテイルモンと目を合わせて奏くんを見て頷いた。

「そう、じゃあ行くよ！」

奏くんが指を鳴らすと突然空間が割れた。

- s i d e e n d -

- s i d e 奏 -

幻想空間から戻ると、煙が晴れかけていた。完全に煙が晴れる前に腕の血を拭い、

「『ファーストエイド』」

治癒の魔法を発動させる。

傷口は完全に塞がり傷跡も残らなかった。

そして完全に煙が晴れ私たちの姿を見たヴァンデモンは驚愕した。また、展望台にいる太一さんたちや上空にいるリリモンたちも驚いていた。

「バカな！無傷だと！？」

「いや、無傷ではなかったよ・・・」

この驚きようを見る限りあの技には自信があつたみたいだったけど・
・エヴァさんに比べたら・・・いや、比べる必要はないか。

ヴァンデモンを無視し、展望台に向かって叫ぶ。

「太一さん！」

「何だ！奏！」

「今からこいつを倒すので手を出さないでください！」

「何言ってるんだ！お前一人じゃ「お兄ちゃん！」ヒカリ？」

太一さんの言葉を遮り私と同じようにヒカリちゃんとテイルモンも
叫ぶ。

「奏くん一人じゃないよ！私とテイルモンも一緒だから！」

「だから私たちを信じてくれ！太一！」

太一さんはしばらく仲間たちと何かを話したけど少しすると返
事が返ってきた。

「奏！ヒカリ！テイルモン！俺たちはお前たちを信じる！だけど危
なくなったら手を出すからなーっ！」

よしっ、許可をもらえたから早速！

「ドルガモン！」

「うん！」

私が呼ぶとドルガモンはすぐさま私の下に來た。

「ドルガモン、久しぶりにアレ、やるよ！」

「え・・・ほんとに！？」

ドルガモンは驚いたような、どこか嬉しそうに言葉を返した。

「ホントだよ・・・ヒカリちゃんもテイルモンも準備は？」

「大丈夫だよ！」

「いつでも構わないぞ！」

そして私たちはヴァンデモン向き直った。

ヴァンデモンは冷静さを取り戻し、鼻で笑いながら言った。

「フン、あれをどうやって防いだのかは知らないが紋章が覚醒していないお前たちなど私の脅威ではない」

「そう・・・なら試してみるか？」

「何い？」

私は深い笑みを浮かべながらヴァンデモンを睨み返す。

「ドルガモン！」

「テイルモン！」

「いくよ！」

私たちがそれぞれの名前を叫ぶと紋章とデジヴァイスが輝き始めた。

「なっ！？この光はまさか！！」

その輝きはドルガモンとテイルモンを包み込む。

「——ドルガモン超進化ーっ！……ドルグレモン！」

「——テイルモン超進化ーっ！……エンジェウーモン！」

光が収まるとそこには朱い身体に翼を生やし、どこか楽しげにヴァンデモンを見下ろす超大型の獣竜型デジモン、ドルグレモン。

そして、八枚四対の翼を持ち、光を纏いながらヴァンデモンを鋭く見下ろす大天使型デジモン、エンジェウーモンが現れた。

二人の姿を目の前にして太一さんたちや他のデジモンたちは言葉を失う。

一方でヴァンデモンはどこか焦っているかのような表情で二人を睨み返していた。

「ヴァンデモン……選ばれし子供たちの使命を邪魔し、現実世界

にまで浸食したあげく、ヒカリや奏を亡き者にしようした・・・その罪の大きさを知れ！」

「お前は奏とヒカリちゃんを殺そうとし、あまつさえ、自分の部下を殺したんだ・・・だから殺される覚悟があるんだろ？」

「この世界をすべて闇へと塗り替え、デジタルワールドと融合し、全てを統べる王となるため、私は私のなすべきことをしてきたまでだ！——『デッドスクリーム』！！！」

ヴァンデモンから放たれるコウモリがドルグレモンとエンジェウーモンに襲い掛かる。

それを見てドルグレモンはつまらなそうな顔になりながらがエンジェウーモンの前に出て翼を一振りする。

たった一振り、ただそれだけでコウモリたちはいとも簡単に弾き返され、消滅した。

「なん・・・だと・・・」

「お前さ、全てを統べる王とか言ってた割には弱いんだね・・・あまり長引かせるのもあれだからこれで終わりだよ、エンジェウーモン！」

「ええ！」

そう言うと、ヴァンデモンは背を向けてこの場を離れようとした。しかしドルグレモンがそれを許すわけもなくヴァンデモンに向かって急降下する。

「『ブラッディタワー』！！！」

「・・・君に救われ、永らえた命を、その命を君たちのために役立てれたんだ・・・私にとってとても幸せなことなんだ・・・」

「ウィザーモン・・・!」

「やだ・・・死んじゃやだよ・・・ウィザーモン!」

「テイルモン・・・ヒカリ・・・すまない、できることならもつとお前たちを助けてやりたいが・・・」

ヴァンデモンから受けていたダメージのせいで今にも死んでしまいそうなウィザーモンにヒカリちゃんとテイルモンは泣きついている。そこから少し離れたところから太一さんたちもその様子を見ていて、誰もが悲痛な表情を浮かべていた。

同じように見ていたドルモンが念話で話しかけてきた。

「・・・奏、助けてあげれないの?」

「・・・さつき見てわかったけど、思ってたよりダメージが酷い。それも立っていられたのが不思議なくらいね」

「っ!・・・どうにもならないの?」

『治癒の魔法は何故か弾かれるから時を操る上位魔法、ティム・フオールナ・プリンシパトゥが使えればいいんだけど、こればかりは制約が完全に消えるまで使えないんだ・・・紋章の力を借りてもね・・・』

この時どんな顔をしていたのかわからない。
ただ、ドルモンは悲しそうな表情で私を見ていた。

それからしばらくして、ウィザーモンはヒカリちゃんやテイルモンに看取られながら息を引き取った。

- s i d e e n d -

第13話（後書き）

『ティム・フォールナ・プリンシパトゥ』・・・ななついろ ドロ
ツプスより、秋姫すももの呪文

第14話

- side 奏 -

あのあと、しばらくするとヒカリちゃんとテイルモンは泣き止んで、空気を变えようと私やドルモンと一緒に自己紹介を始めた。

まずはヒカリちゃんたちが自己紹介を行い、私たちの番になった。

「それじゃ今度は私だね。一度自己紹介した人もいますが改めて・
・私は一ノ瀬奏、お台場小2年です。ヒカリちゃんや太一さんとは家族ぐるみでお世話になっていることもあって2人とは幼馴染です」

簡単に自己紹介を行うと初対面の3人がそれぞれ自己紹介をしてくれた。

一人目は城戸丈さん、年は太一さんたちの1つ上で選ばれし子供の中では最年長。

印象は頭が固い、良くも悪くも真面目で責任感が強い。

二人目は泉光子郎さん、ミミさんと同じ年で選ばれし子供の中では参謀担当。

いつもパソコンを持ち運び、印象は様々な知識を探求する前世でいう綾瀬さんのような人。

最後は高石タケル君、私やヒカリちゃんと同じ年で選ばれし子供の中では最年少。

印象、と言うより思い浮かべたものはギリシャ神話にあるパンドラの箱の一番底に残っていた希望。

決してそれを失うことのない強い心の持ち主。

とまあ、こんな感じだった。

一通り自己紹介が終わると太一さんが聞いてきた。

「なあ、あの時どうやってヴァンデモンの攻撃を防いだんだ？それにウィザーモンを助けたときのあれは・・・」

太一さんの言葉に反応してヒカリちゃんとテイルモンが私を見つめた。

んー・・・どうしようか、知ってるのはあの時アクアシティにいた三人だけだし・・・別にいいか、どうせ後々わかることだし。

「簡単に言うと魔法ですね。ウィザーモンのときはぶった切って、次のは盾で防いだけですよ？」

「魔法！？」

ヒカリちゃんに空さん、ヤマトさんを除く全員が声をそろえて驚いた。

「かなくん、魔法ってあのおとぎ話とかに出てくる魔法？」

「そういうのもありますけどゲームに出てくる方が多いですね」

ミミさんの質問に首を縦に振って肯定して付け加える。

「ははは、この世の中に魔法なんてあるはずがないじゃないか」

と、丈さん。

そっとう丈さんに何も言わずただ笑みを浮かべじっと見つめ返す。

「・・・え？本当、なのかい？」

「さあ？どうなんでしょうね？信じるもよし信じないもよしそれは自分で判断してください。他に何か聞きたいことがあれば答えられる範囲で答えますよ？」

そう言うとき今度はタケルくんが口を開いた。

「奏くんはどやってドルモンの出会ったの？僕たちみたいにキャンプ場からデジタルワールド行っていないのに・・・」

「ん？ああ、四年前のあの事件の後に時々なんだけど私の夢の中とデジタルワールドが繋がってたんだ。初めの頃は単なる夢だと思ってたんだけど、そこにいる時間が次第に長くなっていった・・・そんな時ドルモンのひとつ前のドリモンの時に私たちは出会ったんだ。」

「夢の中って・・・そんなことあるの？」

「私が体験したからあるんじゃないかな？ほら、私って魔法使いでしょ？だからこんなことがあっても不思議じゃないと思うんだけど・・・結局のところ私もよくわからないんだけどね」

「そうなんだ」

この後、デジモンたちからは魔法ってどんなの？や魔法を見てみたい！と魔法について聞かれたけど次の機会にと諦めてもらった。話しがひと段落して私は太一さんにこれからこのことを尋ねた。

「太一さん、これからどうするんです？」

「どうするってそりゃヴァンデモンを倒したんだ、もう他にすることなんて……」

「……本当にそうですか？」

「どういう意味なんだ？」

「それは……」「お兄ちゃん!」「」

私の言葉に疑問を持ったヤマトさんに答えようとするのとタケル君の叫び声が遮った。

ヤマトさんや他の人たちもタケル君の方を見る。
タケル君とヒカリちゃんは上空を見つめていた。

「タケル？」

「ねえ、よく見て……」

「霧……晴れないよ……」

「「何だって!?!」」

ヤマトさんと太一さんは声をそろえて驚き、上空を見上げた。
他の人たちも同じく見上げると全員は声を失った。

「……そう、ヒカリちゃんとタケル君は言うとおり霧が晴れてないんです。つまりはまだヴァンデモンを倒しきれてないんです」

そう言うと全員が息をのんだ。

あの後しばらくすると、光子郎さんのパソコンから電子音が鳴り響いた。

「メール……ゲンナイさんからだ！」

全員がパソコンを開く光子郎さんの周りに全員が集まって、メールの内容を見ようとする。

『子供たちよ喜べ、ヴァンデモンを倒すヒントを見つけたぞーう』

パソコンの画面にはおじいさんのアニメーションが添付されているメールが映し出されていた。

そしてすぐに画面が切り替わり、石碑に刻まれた文字のようなものになった。

『古代遺跡で見つかった予言の詩じゃ……』

はじめにコウモリの群れが空を覆った。

次に人々がアンデットデジモンの王の名を唱えた。

そして時が獣の数字を刻んだとき、アンデットデジモンの王は獣の正体を現した。

天使たちがその守るべき人の最も愛する人へ秘めたる可能性を纏った光と希望の矢を放ったとき奇跡が起きた。

と、では幸運を祈る』

これだけを言い残してゲンナイさんのメールは終わった。

・・・秘めたる可能性か、これって私の紋章のことかな？アンデットデジモンの王はヴァンデモン、獣の数字って言うのはあれのことだろうし・・・

『奏、やっぱりヴァンデモンは完全には倒し切れてなかったんだ・・・ごめんね』

『ううん、謝る必要なんてないよ。予言通りならヴァンデモンは復活するんだ、その時にあいつを潰せばいいんだから』

『そう・・・だね』

『そうだよ。それに今度は私も出るつもりだよ？あれだけじゃ物足りないし偶には私も暴れたいし』

『・・・本気？いくら一般人が少ないといっても自重はしてよ？奏が本気になったらここら一帯がすごいことになるだろうから』

『私だってそこまでするつもりはないよ。紋章の力を借りて制約を一時的に失くすと言っても身体に負担をかけるわけにはいかないから自重はするつもり』

『それならいいんだけど・・・』

ドルモンと念話で話しているとヒカリちゃんが近くにやって来た。

「奏くん、ドルモン、他のところへ移動するってみんなが呼んでるよ?。」

「へ？・・・あ、ごめん、気付かなかった・・・ヒカリちゃんありがとね。それじゃ行こうか」

ドルモンとヒカリちゃんと一緒に太一さんたちの後を追った。

太一さんたちに追いついた後、ミミさんと光子郎さん、丈さんは自宅に一度戻る言い、戻って行った。

それに便乗して私も一度戻ることにした。

「太一さん、私も一度家に戻っていいですか？」

「奏もか？・・・わかった、俺たちは丈たちについて行くから用が終わったらそこに来いよ」

「わかりました。・・・ドルモン、行くよ」

「りょーかい」

私はドルモンを抱えしゅくちで自宅へ転移した。

「・・・・・・・・」

突然私とドルモンが消えたことに口をあけて驚く太一さんを残して・

自宅に戻ってみると私の部屋以外は荒らされていた。

「やっぱり日頃から私の部屋に認識障害の結界を張っておいてよかったよ。結界のおかげでバケモンたちは私の部屋を認識できなかったみたいだから無傷だね」

「そんなのやってたの？ボク全然気づかなかったんだけど・・・」

「だって私がいるときは発動しないようになってるからね。この部屋には魔法関連のモノがあるからお母さんやお父さんに変に扱われて発動なんてしたら困るじゃん」

呆れるドルモンに言いながら目当てのモノを手を取った。

「何なのその指輪？」

「これは前世で愛用してた魔法発動体と魔法具の『ジッパー』。この二つは本来ならこの世界に存在するはずはないんだけど・・・何故か私の手元に届いたんだよね」

「そうなんだ・・・ん？それじゃあどうやって魔法使ってたの？その魔法発動体っていうのがないと魔法は使えないはずでしょ？」

「それは紋章が代わりになってたからだよ。私の魔力に耐えられるくらいの強度はあったんだけど、魔力の伝達能力に少し難があつらこつちに切り替えないとって思ってたからちょうどいい機会だよ」

それにしても、私にかかる制約の緩和と魔法発動体の機能・・・私の紋章ってどこか他の紋章と比べて違うんだね。まあ、困るってわけじゃないからいいんだけど。

私は二つの指輪を嵌めると再びドルモンを抱え、太一さんたちの下へと転移した。

- s i d e e n d -

第15話

- side 奏 -

丈さんの住むマンションへと向かうと、そこにはすでに太一さんたちがあり、ヤマトさんたちのお父さんが

光子郎さんの両親、丈さんのお兄さんに現状を説明していた。

「すみません、遅れました」

「いや、大丈夫だ。今、これからのことを話してたんだが、私たちは霧を突破する方法を探しに行き、他はビックサイトに向かうようになったんだが・・・奏君、君はどうしたい」

と、石田さん。

行くのは石田さん親子の三人で太一さんやヒカリちゃんたちはビックサイトか・・・両親は仕事でお台場を離れてるんだ、なら、ビックサイトに行くより石田さんたちと行動して情報を集める方がいいかもね。

「だったら、私もついて行っていいですか？」

「ああ、構わないが・・・ご両親のことはいいのかい？」

「それなら大丈夫です。運がいいのか悪いのか、二人ともこの台場を仕事で離れていたの・・・」

「そうだったのか・・・では早速行こうか」

石田さんの一言でそれぞれの場所へと向かった。

石田さんの車に乗り込む前に私と一緒にいたいとヒカリちゃんに引き留められたけど説得して何とか納得してもらった。

それはさておき、石田さんが用意していたゴムボートに乗り込み海上に出て結界の外へと出ようと試みるが結局はダメだった。

その後海岸に戻り、ビックサイトに向かおうとすると突如海中からギザモンの群れが私たちに襲い掛かってきた。

そして現在ドルモン、ガブモン、パタモンが駆逐している。

「『メタルキャノン』！」

「『プチファイヤー』！」

「『エアースョット』！」

あのデジモンどれだけ湧いて出るんだよ・・・私もやりますか。

私の隣にいるタケルくんに声をかける。

「タケル君、私、ドルモンたちを手伝ってくるから石田さんにすぐに出れるようにって言って」

「奏くん危ないよっ！それにヒカリちゃんとテイルモンに奏くんに魔法を使わせないでって頼まれてるんだから！」

ヒカリちゃん、テイルモン・・・

「・・・はぁ・・・わかったよ魔法は使わないよ。まったく二人とも心配性なんだから」

「じゃあ!」

「だけど、手伝いにはいくよ・・・ってことでさっき言ったことよろしく!」

「奏くん!?!」

タケル君の静止の声を無視してギザモンの駆逐に参加する。

「ドルモン、タガー貸して」

「ほい!」

ドルモンはどこからかタガーを取りだし私へと投げた。

「ん、あんがとさん。さて、興じるとしますか!」

- s i d e e n d -

- s i d e タケル -

奏くんを止めようとしたけど結局はみんなのところに行ってしまった。

だけど・・・

「すごい・・・」

僕は奏くんを見て素直にそう思った。

奏くんはギザモンたちの攻撃をかわしながら剣を振るっている。

それだけじゃない、パタモンとガブモン、ドルモンに指示を出しながらギザモンたちを倒していた。

「よつと・・・ガブモンはこっちに向かってプチファイアーを！パタモンはそのままドルモンにタイミングを合わせながらやって！・・・って危なっ！？うじゃうじゃ出てきすぎだ！少しぐらい遠慮しろ！『紅寸剄』！」

・・・へ？

奏くんが慌ててギザモンの攻撃を避け、文句を言いながらそのギザモンを思いっきり殴った。

そうしたら、ギザモンはトラックに跳ねられたみたいに跳ばされた。

「・・・」

そんな光景に呆氣にとられていると奏くんがこっちを見て口をパクパクした。

何だろう？

——わ・す・れ・て・な・い？

・・・あっ！？

「そうだった！お父さんたちに伝えなきゃ！」

さつき奏くんに頼まれていたことを思い出して声を上げた。
そんな僕を見ていた奏くんはクスリと笑って促した。

ボクは少し恥ずかしい気持ちになりながらも頷いて頼まれていたことを伝えるためにお父さんとお兄ちゃんのところに行った。

- side end -

- side 奏 -

ん、タケル君は石田さんたちに伝えて、すぐに動ける準備は整ってるみたい。・・・ギザモンが限りなく出てくるからそろそろ撤退しますか。

「ガブモン！パタモン！きりがいいから撤退するよ！先にタケル君たちのところに戻って！」

「わかった！」「わかったよ！」

二人は攻撃をやめ、車へと急いだ。

「ドルモン、気付いてる？」

「あの街路樹のところにいるコウモリでしょ？今のところボクたちに害を与えるような様子はないみたいだけど・・・」

そう、ここに来る前からあのコウモリたちはいた。
まるで何かを待っているかのように・・・

「奏くん！ドルモン！二人とも急いで！」

「っと、タケル君が呼びだ」

「そうだ・・・ね！」

ドルモンは思いっきりメタルキャノン放つと私の腕の中に跳んで来た。

そして、ドルモンを抱えたまましゅくちでタケル君たちが待つ車の前に転移した。

「石田さん、出してください」

「わかった！」

車に乗り込むと同時に発進した。

ギザモンたちは追ってこようとするが車のスピードに追い付けないためにどんどん距離が開いていく。

それを見たタケル君たちは安堵の息を漏らした。

「ふうー、一時はどうなる事かと思ったが・・・」

「うん、だけど奏くんすごかったね！」

ヤマトさんにタケル君が応え、目を輝かせて私を見た。
それに同意するかのようにパタモンとガブモンも頷いた。

「あはは、ありがと・・・だけど予言が始まっちゃったけどね」

窓の外を見ながら言う。

タケル君たちは驚きの声を上げ、石田さんは慌てて車を止める。
そして全員が車から降り、空を見上げた。

「あれ見て!」

コウモリの大群が空を覆っていて、フジテレビの方へと向かっていた。

「はじめにコウモリの群れが空を覆った・・・」

「ええ・・・嫌な予感がします。ビックサイトに急ぎましょう」

全員は頷き、ビックサイトへと急いだ。

ビックサイトに着いた途端、ヴァンデモンの名を呼ぶ声がビックサイトから聞こえてきた。

それを聞いて太一さんたちと合流しようと足を速めた。

『ヴァンデモン様・・・ヴァンデモン様・・・——』

目の前には多くの人たちが機械のようにヴァンデモンの名を呼び続けていた。

太一さん、ヒカリちゃん、空さん、ミミさんはそれを止めさせそうと必死に呼びかけているけど反応はなく、ヴァンデモンの名を呼ぶ声は収まらなかった。

「これはいい……」

石田さんの呟きに丈さんのお兄さんが答えた。

話しを聞く限りでは全員は眠っていて寝言を言っているだけの状態らしい。

そんな人々を見渡しているとヒカリちゃんは私に気付いて駆け寄ってきた。

「奏くん！大丈夫だったの？」

「大丈夫だよ、まったく、ヒカリちゃんもテイルモンもタケル君に私に魔法を使わせないように見張らせておくなんて心配すぎだよ」

「だって……奏くんがまた死んじゃいそうになったら……」

私の手を握って俯きながら言った。

そんなヒカリちゃんの後ろにはテイルモンもいて、心配そうな目で見上げている。

「大丈夫……って言ってもヒカリちゃんとテイルモンは納得できないか……」

うーん、困った。二人とも私を心配して言ってくれるからあまり強く言えないし……

うんうん言いながら困っているとドルモンが口を開いた。

「ヒカリちゃんもテイルモンもあんなのを見て心配するのはわかるけどいくらなんでも心配すぎだよ。……それとも奏のこと信じられない？」

「そんなことないよ！」

「だったら信じてあげよ？それに奏が無理をしてたらボクたちで止めさせればいいんだから。奏は本当に強いけどヒカリちゃんにはとても弱いんだ」「そこまで！」あいたっ！？何するのさ！事実でしょ！」

事実だけど別に今言わなくてもいいのに・・・

「はぁ・・・ドルモンのバカ・・・」

私はため息をつき、ぼやいた。

ヒカリちゃんとテイルモンは私とドルモンのこんなやり取りを見て小さく笑った。

「笑わないでよ二人とも」

「あはは・・・ごめんね奏くん」

「クスッ・・・ああ、すまない」

二人は謝ってるけどまだクスクスと笑っている。
そんな様子にため息をつきながらも笑った。

ヒカリちゃんにテイルモン、そしてドルモンはもし私が無茶をしたら何が何でも止めると宣言した。

特にヒカリちゃんとテイルモンは幻想空間内での決意のこともあったからあの時と同じような強い意志で答えた。

それから私たちはいつの間にか集まっている太一さんのところへ近

寄ってみると何やら予言のことを話していた。

「——それで三番目の予言は何だった？」

「そして時が獣の数字を刻んだとき、アンデットデジモンの王は獣の正体を現す」

空さんの質問に光子郎さんはゲンナイさんが教えてくれた予言を暗唱した。

「何だよその獣の数字って？」

「・・・ここに知恵が必要である。思慮のある者は、獣の数字を解くがよい。その数字とは、人間をさすものである。そして、その数字は666である」

「へ？・・・奏？」

「ヨハネの黙示録、13章18節にあらわれる第二の獣に従うものに押された666という数字のことです。この666は数秘術ゲマトリアで獣の数字と呼ばれるみたいですから多分このことだと思いますよ」

太一さんの疑問に私が答えると周りは驚いて静かになった。

「どうかしました？みんな固まって・・・？」

「い、いや・・・何でも知ってるなって・・・」

「何でも知りません。知ってることだけですよ？って、これは置

いとして今言った666というのはこの場合6時6分6秒のことかと。他に当てはまりそうなものはないですし・・・」

これを聞いて太一さんはデジヴァイスを見た。

「・・・っ、もうすぐだ!」

これって時計の機能とかあったんだね。

そう思いながら私もデジヴァイスを見てみるとすでに6時を刻んでいた。

「車で行こう!」

と言い、石田さんと太一さん、ヤマトさんたちは車に乗り込みコウモリの群れを追った。

そんな背中を見ているとヒカリちゃんは握りしめていた私の手をさらに強く握った。

「お兄ちゃんたち大丈夫かな・・・」

「大丈夫だよきっと。それに太一さんたちが危なくなったら私たちで助けよ?ね?」

「うん・・・」

それから数分後、時計が6時6分6秒を刻むと同時にフジテレビの方から爆音が鳴り響いた。

そしてそこには巨大なデジモンが姿を現した。

-
s
i
d
e

e
n
d
-

第16話

- side 奏 -

爆音とともに現れた獣の下半身と硬い外殻の上半身をもつ巨大なデジモン。

その巨体は2？ほど離れたビックサイトからでもその大きさがわかり、それはこちらへと進行している。

爆音が聞こえてくるのでおそらくメタルグレイモンとワーガルモンがそれを食い止めようと戦っているのだろうが歩みを止めることはなくゆっくりと一歩また一歩と向かってきている。

それにしても・・・

「あれがヴァンデモンか・・・なかなかデカいね」

「デカいけど理性も知性もなくしたただの獣でしょ？なら大丈夫でしょ」

私とドルモンは他の人たちが目の先にいるヴァンデモンが進化した巨大なデジモンに驚き、声を失っている中、特に驚くこともなく普通に話していると・・・

「奏・・・それにドルモン、どうしてお前たちはあれを見てそんなに冷静でいられるんだ？」

他の人たちの中で平常心を保っていたテイルモンが聞いてきた。

「何でって言われても・・・前に前世の記憶を受け継いでるって言

ったよね？その前世の出来事に比べたら今の状況なんてまだまだぬるいし、エヴァさんより弱いし・・・それをどう驚けと？」

「ボクはあんなの奏が怒った時や本気になった時に比べたらまだかわいものだよ？あの状態の奏は広域殲滅魔法とかバンバン放ってくるほど鬼畜染みてるから」

好き勝手言うドルモンに非難の視線を向ける。

ドルモンは視線に気づいてあ、あはは・・・と苦笑いしながら私から一步離れた。

「ま、簡単に言ったらドルモンはただ肝が据わってるだけで、私は慣れてるだけだよ」

テイルモンはどこか納得したような表情になった。

ふと視線を向けられていることに気づいてその視線の方を見るとヒカリちゃんが見つめていた。

「ヒカリちゃん？」

「慣れてるって・・・どういうこと？今よりもっと怖いことがあったの？」

「怖いといふかなんというか・・・前世のことだけだね。主に中学生の時にいろいろあったからね・・・」

修学旅行や魔法世界やら数えたら限りないけど本当にいろいろと戦りまくってたし・・・

「真祖やら鬼神やらドラゴン・・・他にもいるけどそういうのを見慣

れてるからヴァンデモンが進化してあんな風になっても特に驚いたり恐れたりする要素なんて……あ、前世のことについての詳しいことは内緒。気が向いたら話してあげるから我慢してね」

「う、うん」

ヒカリちゃんに微笑んで頭に乗せる。

しばらくそうしていると太一さんが急いで戻ってきた。

あのデジモン、ヴェノムヴァンデモンがビックサイトの人たちを自分の糧にしようとかっちへ進行しているということだった。

さすがに何万人もの人たちを短時間で避難させることはできないためにヴェノムヴァンデモンを倒すしか方法がないとテイルモンが言った。

それに賛同し、他のデジモンたちも手伝うと声をそろえたが首を横に振った。

「あなたたちは待つてなさい。一緒に行くのはパタモンとドルモンの二人だけ」

「えーっ！」

「今やることは次の進化ができるよう、エネルギーを蓄えておくこと」

その言葉に悔しそうな表情になりながらも他のデジモンたちは納得した。

「じゃあ行こう、パタモン、ドルモン」

「うん！」

「りょーかい！」

テイルモン、パタモン、ドルモンの三人が駆け出し、それぞれエンジェウーモン、エンジェモン、ドルグレイモンに進化すると先にメタルグレイモンたちのところへと向かった。

それに続いて太一さんたちに加え、私を含めた最年少組、光子郎さん一家の計九人が石田さんの車に乗り込み三人の後を追った。

メタルグレイモンたちはヴェノムヴァンデモンの攻撃を受けてしまいアグモンとガブモンへと退化してしまう。
ヴェノムヴァンデモンは二人を踏み潰そうとすると、

「『ホーリーアロー』！」

「『ヘブンスナックル』！」

「『メタルメテオ』！」

電撃の矢と黄金に輝く拳撃、大型超高質量鉄球がそれを阻んだ。
三人の攻撃を受けたヴェノムヴァンデモンは呻き声をあげ、体勢を崩して倒れた。

それを見て、車を止めると太一さんとヤマトさんはアグモンとガブモンへと駆け寄った。

私たちも車から降りると光子郎さんがお父さんに「ヴェノムヴァンデモン完全体なのかと聞かれ調べてみると、

「きゅ、究極体!？」

「完全体より上の進化があったのか!」

驚きの声を上げた。

やっぱり究極体だったか。まあ、ドルグレモンなら負けることはないでしょ。だけど・・・

私は全員が驚いている中、ドルグレモンたちの戦いを眺めていた。ヴェノムヴァンデモンの放つ光線をドルグレモンは軽々と避け、接近して尾で切り付けたり、鉄球をぶち当てたりと主立って攻撃を仕掛けている。

そんな私に気づいてヒカリちゃんとタケル君が隣に来た。

「どうしたの？」

「ただ、このままじゃギリ貧かかって・・・」

決定打がないんだよな。あんな巨体じゃ、メタルメテオで潰すまでいかないみたいだし・・・それにエンジェモンとエンジェウーモンの攻撃もさほどダメージになってないみたいだしね。

「さて、どうしようか・・・」

そう思いながらいつの間にか落ち着きを取り戻し、予言の解読をしている光子郎さんたちをちらりと見た。

- side end -

- side 光子郎 -

石田さんに促されてゲンナイさんが送ってくれた予言の解読をしています。

「天使たちがその守るべき人の最も愛する人へ秘めたる可能性を纏った光と希望の矢を放ったとき、奇跡はおきた・・・」

「天使たち・・・天使たちってあの」

お母さんは戦っているエンジェモンとエンジェウーモンに向けてた。ボクはそれに頷いて肯定する。

「では、次の守るべき人というのは・・・」

僕は奏君と一緒にいるタケル君とヒカリさんに目を移す。

「タケル君とヒカリさんだ。次に最も愛する人だけど・・・」

「ワテらに置き換えてみまひよ。天使がワテとしたら守るべき人は光子郎はんや」

「最も愛する人はお父さんとお母さんだ！・・・ということはタケル君とヒカリさんが最も愛する人は・・・」

「家族だよ。親兄弟だ」

お父さんも僕と同じ答えなようだったけど・・・

「でもこの『秘めたる可能性を纏った光と希望の矢を放つ』というのは・・・」

「それは私たちの紋章のことでしょうね」

「え？」

僕たちの前にはいつの間にかタケル君、ヒカリさん、そして奏くんが来ていました。

「タケル君の希望にヒカリちゃんの光、私の可能性・・・矢を放つというのはそのままですよ。ということで・・・ドルグレモン！少しの間時間を稼いでおいて！」

「りょーかい！任せて！」

ドルグレモンは奏君の言葉に返事を返すと猛攻を始めた。
そして奏君はタケル君とヒカリさんに向き直った。

・・・いったい何をする気なんだろうか。

「それじゃ、二人とも準備はいい？」

「うん！」

二人は自分の紋章を握りしめ強く頷いた。
そして、

「僕の希望を！」

「私の光を！」

二人の紋章は輝き、光の筋がエンジェモンとエンジェウーモンそれぞれの下へ向かった。

そして、その光の筋は希望の矢と光の矢へと変わった。

「そして最後に私の可能性を！」

奏君からは虹色に輝く光がエンジェモンとエンジェウーモンの持つ矢と交わりあった。

「さて、準備は整ったから・・・太一さん、ヤマトさん、心の準備はできました？」

「ちょっと待ってください！いったい何をするつもりですか！？」

「予言の通り最も愛する人へ矢を放つんですよ。あ、矢が刺さっても大丈夫です。あれ自体には殺傷能力なんてありませんから」

「しかし、本当その通りにいくなかって「光子郎、大丈夫だ」太一さん！？」

まだ予言の推理の途中で根拠のない奏君の発言に待ったをかけようとする太一さんに止められた。

「光子郎、俺たちや奏を信じろ！」

ヤマトさんまで・・・

僕はこれ以上は何も言わず二人に頷いて返した。

それを見た二人はエンジェモンとエンジェウーモンに向き直った。

「ヤマト止めて！」

「太一無茶しないで！」

アグモンとガブモンが心配する声をするが二人の決意は変わらなかった。

二人は互いに逃げないようにと手を握り合った。

「「奇跡よ！起きろ！」」

エンジェモンとエンジェウーモンの矢が放たれた。

秘めたる可能性を纏った光と希望の矢は二人を貫くと二人のデジヴァイスが輝きだし、二人を包んだ。

そして、

「——アグモン、ワープ進化ーっ！・・・ウォーグレイモン！」

「——ガブモン、ワープ進化ーっ！・・・メタルガルルモン！」

アグモンとガブモンは究極体へと姿を変えた。

- side end -

第17話

- side 奏 -

光が収まるとそこにはアグモンとガブモンが究極体、ウォーグレイモンとメタルガルルモンへと進化した。

そしてすぐさまドルグレモンたちと共闘し、再びヴェノムヴァンデモンへ挑んだ。

ウォーグレイモンはヴェノムヴァンデモンの巨体を押し返し、メタルガルルモンは氷結弾を放ち、凍てつかせる。

しかし、ヴェノムヴァンデモンは力づくで氷を砕きくと怒りをあらわにし、光線、ヴェノムインフューズを無作為に放ち始めた。

そして現在、ウォーグレイモンたちを追いかけていた私たちはその攻撃に巻き込まれてしまい離れ離れになってしまった。

「ヒカリちゃん！タケル君！いたら返事して！」

ヴェノムヴァンデモンの攻撃によって破壊され、砂煙が立ち籠る街中でサーチャーを飛ばしながら二人を探している。

「戦闘音がデカすぎて声が聞こえないか…」

——— おに…… ちゃん…… かな……

「今の声…… あっちの方か！」

声が聞こえた方へと翔けると次第にはつきりとその声が聞こえる。

「お兄ちゃん！奏くん！」

そして、まず初めに見つけたのは私よりも少し背の低い男の子。

「タケル君！」

「え？……あ、奏くん！」

タケル君は私を見つけると暗い表情が明るくなった。
そしてこの周囲に誰もいないことを知って移動することにした。

「奏くん、これからどうするの？」

「ヒカリちゃんを探して合流する。今、サーチャーと飛ばしてて……
っ、いた！」

「ヒカリちゃん見つかったの！？」

「ここからあまり離れてないところで私たちを探してる。タケル君、
行こう！」

「うん！」

私たちはヒカリちゃんの下へと急ぐ。

数百mほど移動すると小さくだけど声が聞こえてきた。

——か……で……ん……お……ちゃ……

「奏くん、この声って……！」

「うん、ヒカリちゃんだ！」

私たちは頷きあつて走るペースを上げた。

そして次第に声は大きくなりヒカリちゃんの姿を見つけると声をそろえて名前を呼んだ。

「ヒカリちゃん!!」

「あ……奏くん! タケルくん!」

ヒカリちゃんは私たちに気づき、駆け出した。
そして、

「奏くんっ!」

ヒカリちゃんは私に勢いよく抱きついた。
私はそれを受け止める。

ただ受け止めたその身体は小刻みに震えていた。

「……あはは…ごめんね、奏くん…強くなるて言ったのに……」

「大丈夫、弱いから怖くなるっていうのは違うよ。それにヒカリちゃん
は自分で思ってるほど弱くないよ」

「そう…なのかな?」

そつだよ、と言いながら笑いかける。

それを見たヒカリちゃんはどこか安心したような表情を浮かべた。
そんな時、ヴェノムヴァンデモンの流れ弾…もとい、流れヴェノム
インフューズが私たちのすぐ近くの建物に当たり崩れだした。

「え……キヤーツ!」「っ……うわぁーっ!」

私たちが目がけて落ちてくる瓦礫を目にして二人は悲鳴を上げながら私にしがみついた。

そんな二人に優しく声をかける。

「二人とも大丈夫だよ。私が……二人を守るから!」

この言葉と共に可能性の紋章が輝きだした。

そして、指輪を嵌めている右手を瓦礫にかざす。

「グイント・ヴァッサー・フォル・モント! 来たれ雷の精、風の精。雷を纏いて吹きすさべ南洋の風! 『雷の暴風』!」

稲妻を纏った竜巻は私たちに振り落ちてくる瓦礫をすべて呑み込むと塵へと変えた。

「え?…うそ……?」

「奏…くん?」

二人は雷の暴風に声を失い、私を見る。

「二人とも私は魔法使いだよ?こんなこと造作もないんだから」

私は笑みを浮かべながら二人に伝えるが未だに放心したままだった。しかしヒカリちゃんは何かを思い出して慌てたように言った。

「あっ…奏くん!副作用があるんじゃない?っ!?」

「ヒカリちゃん、心配しなくても大丈夫だよ。今回はあの時みたいにはならないから。紋章の力を借りて制約を一時的に打ち消してるから」

そう言いながら虹色に輝いている紋章を見せた。

「本当に大丈夫なの？本当に…あの時みたいにならないの？」

「本当だよ。あの時みたいに怪我はしない。それに無茶だけはしないって約束したでしょ？」

「うん、そう…だったね」

そんな時、遠くの方から声が聞こえ、私たちはその方向を見つめるとビックサイトにいた空さんたちがここに来ていた。

そして、どこからかカブテリモンも出てきて全デジモンがヴェノムヴァンデモンの腹部に向けて攻撃を放つ。

最後にウォーグレイモンがグレートトルネードで貫くとヴェノムヴァンデモンは膝と着いた。

「やった…の？」

「いや、まだまだよタケル君…ほら」

ヴェノムヴァンデモンは呻き声を上げながら立ち上がるとそのまま叫び続けた。

それがやんだかと思つた途端に腹部から何かが顔を出した。

そしてその何かは口から黒い波動のようなものを吐き出し、ドルグレモン以外のデジモンたちは吹き飛ばされた。

「キイエーッ!」

「キャッ!」

「な、なに……あれ……」

ヒカリちゃんとタケル君は腹部に出てきた何かに怯え、私に引っ付いた。

そしてその顔には諦めたような表情が浮かぼうとしていた。

「んー…上空にはドルグレモンだけか……これはこれで好都合か」

「奏くん…もしかして……」

ヒカリちゃんは私がやるうとしていることに気が付いたようで顔を上げた。

「そうだよ。タケル君、少しの間ヒカリちゃんのことお願い」

「どういうこと!」?

「タケルくん…奏くんはヴェノムヴァンデモンを倒しに行くつもりなんだよ……」

それを聞いたタケル君は黙っていたけどしばらくすると、

「……大丈夫、なんだよね?」

「もちろん」

「そつか…ヒカリちゃん」

「うん」

二人は顔を見合わせて頷くと私を見た。

「絶対に無事に戻って来てよ！」

その言葉に笑って頷き、ドルグレモンのいる空へと上がった。

- side end -

- side other -

奏はヒカリとタケルと別れ、ドルグレモンの隣に立った。

「奏、やっと来たんだね」

「まあね、それにしても打撃があまり聞かないみたいだね」

「そうなんだよ。それに無駄に攻撃力と防御力が高いみたいだから……」

「そんじゃまあ、私がやるからサポートお願い」

「りょーかい！」

ヴェノムヴァンデモンと攻撃を始める。

「それじゃあいさつ代わりに……おお、地の底に眠る死者の宮殿よ、

我等の元に姿を現せ！『冥府の石柱』！！』

「ムッ！」

奏は無数の巨大な石柱を召喚し、それらをヴェノムヴァンデモン目がけて落下させた。

ヴェノムヴァンデモンはそれらを破壊しようとヴェノムインフューズで迎撃するがすべてを壊すことはできずに押しつぶされる形で地に倒れた。

「ヴィント・ヴァッサー・フォル・モント！影の地統ぶる者、スカサハの、我が手に授けん、三十の棘もつ靈しき槍を！『雷の投擲』！！』

今度は自身の伸長をゆうに超すほどの雷状の槍を創り出し肢体に打ち込む。

「ギーーツ！コ、コシヤクナーツ！」

本体は奇声を上げるが力ずくで槍を引き抜こうとする。

そして上半身の槍を上体を起こしながら引き抜き、それが取れると下半身へと移った。

「……おかしいな、結構深くまで刺したはずなんだけど」

「ほら、あれじゃない？執念ってやつ」

「マジですか…それにしてもあの本体はギャーギャーとうるさいし……サクツと終らせようか。銀の光輪ここへ！『エンジェルリング』！！』

巨大な光の輪を幾重にも展開させると収束し、捕縛した。

「結構練り込んで作っただから簡単には解けないよ。ドルグレモン、うるさい本体の口を塞いで」

「わかった！『メタルメテオ』！」

巨大な鉄球は本体を押し込む形でヴェノムヴァンデモンの身体に埋まった。

「うるさく鳴く口を塞いだしこれで最後にしようか！ヴィント・ヴァッサー・フォル・モーン！契約に従い、我に従え、氷の女王。来れ、とこしえのやみ、えいえんのひょうが。全ての命ある者に等しき死を。其は、安らぎ也。『おわるせかい』…終わりだ、砕ける！」

周囲150フィート四方に絶対零度に近い極低温空間を発生させる。その中心いるヴェノムヴァンデモンは抵抗する間もなく完全に凍結してしまい、言葉と共に砕け散った。

「これで終わるか、それにしても……」

地上を見渡すと辺り一面がおわるせかいの余波を受けてヴェノムヴァンデモンと同様に凍結していた。

ヒカリちゃんたちやデジモンたちに被害がないようにと結界を張ったとはいえ……

「調子の乗りすぎたかも……」

「かもじゃないよ！何で加減しなかったのさ！？」

隣から突込みが入った。

「あ、あはは……仕方ないじゃん！久々だったんだから！……はあ
…そうは言ってもあとの祭りか……威力調整しながら氷を解かすか
…ヴィント・ヴァッサー・フォル・モーント、契約に従い 我に従
え 炎の霸王……—」

私は燃える天空を詠唱し、辺りの解凍を始めた。

- s i d e e n d -

第18話

- side 奏 -

街の解凍はそれほど時間はかからず、三十分程度で終わった。

幸いにもヴァンデモンに眠らされていた多くの人々には魔法を目撃されなかった。

ただ、まじかで見えていた石田さんと泉夫妻には魔法に口外しないように簡単な暗示をかけることにした。

「奏くん！ドルモン！」「大丈夫だったんだね！」

「ただいま。ヒカリちゃん、タケル君」「二人ともたっだいまー！」

ヒカリちゃんとタケル君はが私たちを見つけると駆けて来た。

そして二人に手を引かれながら足を進める。

奥には太一さんやヤマトさん、究極体から退化したコロモンとツノモンがいた。

その他にもこつちに来ていた空さんたちも近くにいた。

「すごいじゃないか奏！」

「お疲れ、奏」

などと太一さんやヤマトさんをはじめ、全員が労いの声をかけてくれる。

そんな中、見慣れないデジモンがいた。

「あれ？あなたは？」

「プロットモンです。よろしく」

テイルモンが退化したたれ耳が特徴のプロットモンが答えてくれた。

「アグモンたちを究極体にするのにエネルギーを使っちゃってテイルモンも成長期に戻っちゃったのね」

そう言ってヒカリちゃんはプロットモンの頭を撫でた。

「なるほど……お疲れ、プロットモン」

「奏もお疲れ様」

しばらくすると少し強めの風が吹いた。

これによってヴァンデモンの霧の結界は風に流されて遮られていた夜空が見えようとした。

「ねえ見て、霧が晴れていく!」

空さんの言葉につられて全員が空を見上げる。

しかし霧が完全に晴れ、目に写った空を見た瞬間、安堵の笑顔が消えた。

「ええーっ!」

「うそっ!」

「こんなことって……」

「な、何だよこれ……」

霧が晴れた夜空には不気味に浮かぶ逆さまになった大陸が浮かんでいた。

しばらくの間言葉も出ないまま見上げていると丈さんのお兄さんがビックサイトにいる人々が目を覚ましたということを知らせき来てくれた。

それ聞いて喜んでいる太一さんたちから少し離れ小型テレビを取り出すと電源を入れる。

そこから流れてきたのはお台場だけではなく、世界各国の空にも逆さまの大陸が浮かんでいた。

「これもヴァンデモンの仕業なのか……」

「そんなことないよ！ヴァンデモンは奏がちゃんと倒したもん！」

「うん！間違いない！」

ヤマトさんの言葉をツノモンとコロモンが否定する。

そんな中、一人空を見上げていた光子郎さんが何かに気づいて太一さんと呼んだ。

「太一さん、ちょっと単眼鏡であそこを覗いてくれませんか？」

「え？……どこ？」

「ほら、あの山なんですけど……」

光子郎さんが指さすが同じような山ばかりで一向に見つかる様子はない。

突然、太一さんは単眼鏡で大陸付近を飛んでいる飛行機を見つけ、声を上げた。

「あ！飛行機が落ちる！」

「ピヨモン！」

太一さんの声を聞いて空さんはパートナーの名前を呼ぶ。

それにピヨモンは頷くとバードラモンへと進化し、飛行機の下へ向かった。

しかし、どこからか現れた赤いクワガタのようなデジモン、クワガーモンが飛んできて片翼に触れ、固まった。

すると飛行機はバランスを崩して急降下してしまった。

バードラモンは支えようと機体の下に潜り込むが呻き声を上げる。

「頑張つて！バードラモン！」

空さんのデジヴァイスは光りだし、バードラモンをガルダモンへと進化させた。

テントモンがカブテリモンへ進化し、ガルダモンの援護に行った。

「ワテも手伝いま……っわつと！？このお！」

先ほどのクワガーモンがカブテリモンへと突進する。

それを慌てて避け、メガブラスターを撃つがすり抜けてしまった。

「何やて！？」

「避けてカブテリモン！触れてはダメ！」

再び突進してきたクワガーモンをガルダモンの言っどおり避けるとクワガーモンはどこかへ飛んで行ってしまった。

その後、二人は港の近くの海上に飛行機を下して戻ってきた。

二人の話を聞いた光子郎さんは納得したような顔になって空に浮かぶ逆さまの大陸がデジタルワールドだと告げた。

丈のお兄さんが日本だけではなく世界中にもデジモンが出現していると言っど私とヒカリちゃんを除く全員が周りに集まった。

「あれがプロットモンとドルモンのいた世界？」

「いや、あれはもう私たちのいたデジタルワールドではない」

「現実世界とデジタルワールドは時間の流れ方が違うんだ。プロットモンたちが来て数日経っけど、デジタルワールドではもう何年も経ってるんだよ」

「わかりやすく言うなら浦島太郎みたいな状態かな？」

三人でヒカリちゃんに返した。

「それだけじゃないよ。僕たち、デジタルワールドの歪みを正さないまま来ちゃったから向こうじゃ大変なことになってるんじゃないの？」

と、コロモン。

振り返るといつの間にか太一さんたちも私とヒカリちゃんの近くに來ていた。

「それじゃあその歪みが現実世界にも影響を及ぼし始めたっどことか」

そう言うとコロモンは多分と言って頷いた。

全員黙って空を見上げていたけど太一さんが口を開いた。

「行ってみよう！もう一度、デジタルワールドに！」

「でもどうやって行くの？」

ミニさんが当然の疑問を言う。

太一さんは悩んでいたが私も質問した。

「太一さん、太一さんたちはデジヴァイスに導かれてデジタルワールドに行っただって言うてましたよね？」

「ああ、それがどうかしたのか？」

「だったらデジヴァイスにもう一度導いてもらえばいいんじゃないですか？」

それを聞いてハッとした光子郎さんがこれに賛成してくれた。

「ええ、試してみる価値はありますね」

「よし、みんなのデジヴァイスを集めるんだ」

この言葉に頷いて輪になっている私たちはデジヴァイスを集めた。するとデジヴァイスは光りだし、その光は夜空に浮かぶデジタルワールドへと伸びていった。

「この光に乗ればきつと……」

一歩、足を踏み入れようとするとタケル君のお母さんが叫んだ。

「タケル！」

「せっかくみんな揃ったのにゴメンねママ。でもちよつと行って、ダメよ！」

タケル君を必死になって引き留めようとするタケル君のお母さんを石田さんが止める。

「行かせてやれよ。俺たちだって散々勝手なことをしてきたんだ」

「……」

石田さんの言葉に何も言えなくなって黙ってしまった。

「皆さんは家族に何も言わずに行っていていいんですか？」

そう言うともみんなは黙ってしまったけど、

「私ちよつと行ってくる！」

ミミさんはそう言ってこっちに来ている両親のところへ走った。それが皮切りとなって太一さん、ヒカリちゃん、空さんも走る。

「奏君、君は行かないのですか？」

「あー…うん、そうですね。おじさんとおばさんに伝言を頼みに行ってきます」

そう言い残して館さんとヒカリちゃんの後を追う。
追い付くとそこには両親に抱きつく二人の姿があった。

「奏君……あなたも行ってしまうの？」

「ええ……だからお願いがあります。裕子おばさん、進おじさん、お父さんとお母さんに行ってきます、と伝えてください」

「……それだけでいいの？」

「はい」

「わかった、そう伝えておこう。太一たちにも言ったがどうか無事に帰って来てくれ。奏君も太一たち同様に私たちの子供のようなものだからな」

二人は悲痛そうな面持ちで言った。

太一さんとヒカリちゃんとは両親から離れ、私と声を揃えて言う。

「……行ってきます！」

そう言い、仲間の待つところへ向かった。

戻ってみるとすでに全員が私たちを待っていた。

「みんな、行こう！」

太一さんの言葉に全員が頷いて光へと入る。
そして大勢の人たちに見送られながら私たちはデジタルワールドへと旅立った。

-
s
i
d
e

e
n
d
-

第19話

- side other -

「フフフ、愚か者たちは恐怖の仮面を纏い、捌きの時を永遠に待ち続ける…素晴らしい、実に素晴らしい」

薄暗い闇の中、巨大な望遠鏡のようなものを覗きこみながら道化師のようなデジモンがつぶやいた。

「一気に叩き潰せばいいものを！」

と、機械に覆われた大蛇のようなデジモンが反論する。

「時の流れが違っただよ。じっくり構えていればいいのさ、アイツみたいに」

「グルルウ……」

呆れたように操り人形のようなデジモンが言葉を返し、全身がサイボーグでできているデジモンを見る。

「もうすぐ選ばれし子供たちが帰ってきます。退屈な時間はもうすぐ終わりです」

「ピエモン、ちょっといいかい？」

「何でしょうピノッキモン」

「望遠鏡を覗きながら何かやっていたけど何をしていたんだい？」

道化師のようなデジモン、ピエモンに操り人形のような姿のピノッキモンが尋ねた。

ピエモンは愉快そうに笑いながらそれに答えた。

「いやなに、彼らにちょっとしたプレゼントですよ」

ピノッキモンはそうかい、とだけ言い、下がった。

それを見たピエモンはさらに一歩前に出て高らかに言う。
今から公演でも始めるかのように。

「さあ、楽屋を後にしましょう！舞台の幕が上がります！タイトルは『選ばれし子供たちの最期』！！」

- side end -

- side 奏 -

「ドルモン大丈夫？」

「うん。でも……」

「ヒカリちゃんたちと切り離されたね」

現実世界からデジタルワールドへワープする途中、第三者である何者かの妨害によって私とドルモンはみんなと異なる場所に落とされてしまった。

「それにしても……しばらく来ない間にこんなに変わるものかねえ……」

…」

「こっちじゃかなりの時間が経ってるし、暗黒の力がいろいろやってるみたいだし」

そう言いながらドルモンとかなり離れたところにそびえたっている螺旋状の山を見る。

その山には海や森、荒野などといったものが暗黒の力によって変えられていた。

「ところでヒカリちゃんたちの居場所がどこなのかわかってるの？」

「もうわかってるよ。ヒカリちゃんのデジヴァイスに付いている私の魔力を探したら一発だよ」

「流石だね！」

「ありがと。でもここから結構離れてるんだよね。それに加えて嫌な感じがビンビンと……」

「そっか…だったら」

「うん。全速力で行くよ」

ドルモンを抱えて空に上がり、

「『縮地无疆』！」

長距離用の縮地でヒカリちゃんたちの下へと急いだ。

- side end -

- side other -

太一たちはデジタルワールドのとある森の中へと到着すると以前の
ようなデジタルワールド姿はなく変わり果てていた。

そんな中、奏がいないことに気づきデジタルワールドの変わりよう
に愕然としながらも全員で近くを探し回ったが見つかることはな
かった。

しかし搜索の途中で以前にミミとパルモンが出会ったことのあるチ
ューモンと再会した。

再会したチューモンは弱り切っており、二人の顔を見ると安心した
ようで気を失った。

しばらくして目が覚めたチューモンに耳とパルモンは話しかける。

「いったい何があったの？」

「仲良かったスカモンは？」

「あいつは…死んじゃったんだよ……」

チューモンは泣きながら語りだした。

ミミたちがファイル島を去った後のある日、相棒のスカモンは暗黒
の力の巻き沿いになって死んでしまったと。

「——…そして暗黒の力が世界を覆っていった。そして、暗黒の
力は自分の支配しやすいように世界を…作り変えていったんです…
…」

「世界を作り替えるって…いったいどうやって……？」

チューモンは怯えながらも森の外へとみんなを誘導してある山を見せた。

「所々に昔の残骸は残ってるけど、ほとんどはあの山に組み込まれてしまったんだ。……スパイラルマウンテンって呼ばれるんだ……」

そしてスパイラルマウンテンを作り上げた者たちの名を怯えながらも口にした……ダークマスターズと。

太一たちはそれが倒すべき相手だと認識して意気込みをしたそんな時、どこからともなく笑い声が響き渡り、一体のデジモンが現れた。

「選ばれし子供たちよ、待っていたぞ！」

「メ、メタルシードラモンだあ！？」

目の前に現れたのは機械に覆われた大蛇のようなデジモン。

それを見て、デジモンたちは成長期へと進化して立ち向かうが赤子の手を捻るかのようにあしらわれた。

「何で！八対一なのよ！」

「……つ、メタルシードラモンは究極体デジモンです！いくら八対一でも成熟期ではないません！」

「究極体だって！？」

「止めだ！アルティメットストリーム！！」

相手が究極体であることに驚き、混乱しているさなかメタルシード

ラモンはビームを放ち、選ばれし子供たちを別の場所へと飛ばした。

メタルシードラモンに飛ばされてきた場所は一帯に濃霧が発生して
いて、視界の悪い場所だった。

そして先ほどと同じくどこからか低いうなり声が響く。

「どうしたのエンジェモン？」

「何かが…ちょっと調べてくる」

エンジェモンはうなり声の方へと足を進める。
その瞬間、何かによって撃ち落され、パタモンへと退化してしまっ
た。

「パタモン！しっかりして！」

地響きを鳴らしながら現れたのは全身がサイボーグでできているデ
ジモン。

「あ、あいつは究極体デジモン…ムゲンドラモンです！」

「なんだって！？…みんな！」

今度はパタモンを除いて全員が完全体に進化するがムゲンドラモン
は必殺技である∞キャノンを撃ち続け、寄せ付けなかった。
そして今度は地面が割られ、別の場所へと飛ばされた。

「ここは何処…どうなってるの…？」

無重力空間のような場所に飛ばされてしまったようだ。

全員警戒をしながら辺りの様子を見てみると突然ワーガルルモンとガルダモンが殴り合いを始めた。

「何やってるんだ！ワーガルルモン！」

「やめてガルダモン！味方同士なのよ！」

ヤマトと空が止めようとしたが二人から返ってきた言葉は驚くべきものだった。

「私の、意思じゃない！」

「身体が…身体が勝手に動いているんだ！」

それを聞いた光子郎が二人や自分の身体をよく見てみると自分たちの身体に糸が付いていることに気が付いた。

「糸が付いている……！操られているんだ！」

「フフフン、やっと気が付いたみたいだね」

「何者です！」

突如聞こえた声に警戒心むき出しで光子郎が叫んだ。
しかしその声の主は変わらない口調で続ける。

「僕のことなら得意のパソコンで調べればいいじゃないか…ほら」

声の主は光子郎の手を操りながらパソコンを操作させる。

「ピノッキモン……っ、こいつも究極体です！」

「僕のが分かったね。さあ！ラストステージへ飛んで行け！」

ピノッキモンの系に引つ張られ、選ばれし子供たちは飛ばされ、

「お前たちもとつとと行くんだ…ブリットハンマー！！」

デジモンたちは全員完全体から退化させられながら飛ばされた。

今度の場所はどこか闘技場を思わせるような場所だった。
そして選ばれし子供たちの目の前に現れたのはピエロのようなデジモン。

「フッフ、私たちのお持て成しはいかがでしたかな？楽しんでいただけただろうか？」

「ひい、ピエモン！？」

ピエモンを目の当たりにしてチューモンは短く悲鳴を上げた。
太一とヤマトは紋章を向けながら互いのパートナーの名を呼んだ。

「アグモン！」「ガブモン！」

二人は究極体へと進化してピエモンへと立ち向かう。

ウォーグレイモンとメタルガルルモンはそれぞれ必殺技を放つ。

「ガイアフォース！！」

「コキュートスブレス！！」

超高密度の高熱エネルギー弾と絶対零度の冷氣。

しかしそれらをピエモンは優雅に避けながら反撃した。

「トランプソード！！」

背にある四本の剣を二人へと投げつけた。

それらに当たってしまった二体はいとも簡単に倒されてしまい、成長期へと再び退化してしまった。

「そ、そんな……」

「究極体が二体でかかって行っても敵わないって言うの……」

「敵も究極体なんですよ！？」

「同じ究極体といってもあなた方は進化できるようになって間がない。勝てると思うのは大きな間違いです」

選ばれし子供のほとんどは圧倒的な力の差を見せつけられ恐怖している。

「ではこの辺で私たちダークマスターズのメンバーを紹介しましょう…メタルシードラモン！…ムゲンドラモン！…ピノッキモン！」

三体はそれぞれ地中、石柱、空中から姿を現した。

「そして私、ピエモン。楽しい時間というのは瞬く間に過ぎてゆくものです。さーあて、誰から終わりにしましょう……」

そう言い、ピエモンは品定めをするかのように選ばれし子供たちを見下ろす。

そして、一人の少女に目を止めた。

「フム、気丈にも私を見ているお嬢さん…あなただ」

その少女、八神ヒカリを見つめ返し、どこからか取り出した短剣を手持った。

「ヒカリ！」

「……っ」

「おや、恐怖で泣き出すかと思いましたが……」

少し驚いたような表情になったピエモン。

「……奏くんが助けてくれるから」

「ん？奏君？……ああ、あの坊やのことですか」

「お前！奏を知っているのか！」

太一の叫びに愉快そうに笑いながら答える。

「ええ、知ってますとも。何せあなた方と彼を離れ離れにしたのは私なのですから」

『なっ！？』

「彼からは嫌な予感がありましたのでデジタルワールドへ来る途中に細工をさせていただきました。それにその彼がこちらに向かって来るにしても少なくとも数日はかかるでしょう」

それを聞いてもヒカリは奏のことを信じることを止めずに視線を逸らさずにいた。

「フム、そのようだといくら本当のことを言っても信じ続けるみたいです。ね。よろしい、ならばそんな希望を抱いたまま死になさい！」

『ヒカリ（ちゃん／さん）！――』

ピエモンは短剣をヒカリへと投げた。

子供たちが悲鳴を上げ、ダークマスターズの笑い声上がる。

短剣が迫るときヒカリは目を強く閉じ、信じる人の名を叫んだ。

「っ……奏くん……奏くーん――！」

悲鳴と笑い声の中、それは聞こえた。
小さく、そしてたった一言。
それは確かに聞こえた。

——しゅくち

「なっ!？」

『え……?』

短剣はヒカ리를捕らえることなく地面へと刺さった。
この場にいた全員が驚くさなか、上空から声が聞こえた。

「ハア…ハア…何とか間に合ったみたいだ」

声が聞こえた途端、選ばれし子供もダークマスターズも全員がその
声の方を見上げる。

そこにはドルモンを肩に寄せ、ヒカ리를抱きかかえている奏がいた。

- side end -

第19話（後書き）

お知らせ、というか謝罪です。

ダークマスターズ（略称、ダマス）編に突入しましたが、ダマスの一人目、メタルシードラモンなんですが……もしかすると奏は介入させずに飛ばすかもしれません。

なので先に謝罪をさせていただきます。

もしアドバイスがあればありがたいです。

第20話

- side other -

「（嫌な予感がして急いで来たみたら案の定予感が当たるとは私のそれも捨てた者じゃないね。ま、それはともかくとして……）」

奏は首に腕を回し、微かに震えながら抱き着いているヒカリの頭を軽く撫でる。

「ヒカリちゃんが無事でよかった…遅くなってごめんね？」

「うっん、奏くんは来てくれたから……」

そっか、と言いながら太一たちの前へと降りる。

そしてヒカ리를テイルモンに預けピエモンと対峙する。

「おかしいですね。あなたは普通ならここから少なくとも数日かかるところへ落としたつもりなんですが……」

「生憎と私は普通じゃないものですから常識なんて通用しませんよ？それにしても観客がそろいもしていないのに始めるなんて待っていてくれないんじゃないですか？」

「公演時間は守っていただかないとこちらとしても困りますので」

「そうですか……でも終わる前に来て見せてもらっただ……お捻りを受け取ってくださいよ」

そう言つて背後に光の矢を199矢展開する。
ドルモンも地面に降り、戦闘態勢をとつた。

「奏、待てよ！あいつら全員究極体だぞ！」

「そうだ！いくらなんでもお前と完全体までにしかなれないドルモンじゃ……！」

太一とヤマトが叫び、ダメージを負っているアゲモンとガブモンも立ち上がろうとする。

それを見たピエモンたちも笑いながら言う。

「フッフ、彼らの言うとおりですよ坊や。いくらあなたが強くてパトナーが完全体に進化できようとも私たちには敵いません。無駄なことはお止めなさい」

「無理なこと、ですか…確かにこの状況じゃさすがにきついんですけど」

「やってみなきゃわかんないよ？」

デジヴァイスと紋章は光りだす。
いつもとは異なる輝き方で。
そして光はドルモンを包んだ。

「——ドルモン、ワープ進化ーっ！…ドルゴラモン！」

光が収まり、現れたのは寧猛な雰囲気を漂わせる獣竜型の究極体デジモン。

「ドルモンが究極体に進化した……」

太一がつぶやく。

ヤマトや他の選ばれし子供たちは声を失いながらもドルゴラモンに目を奪われていた。

しかし、ピエモンは笑みを崩してはいなかった。

「ほう、究極体に進化できたのですか。驚きはしましたがどうせこの二人と同じく究極体に進化して間もないなのでしょう？」

「さあ、どうでしょうか……？」

奏は不敵な笑みを浮かべた。

「まだ終幕には早い。なので第二幕と行きましょうか」

ピエモンをはじめとするダークマスターズは警戒を強めた。

「タイトルは……『現れた魔法使いと破壊の権化』」

言い終わると同時に背後に展開していた魔法の射手を放った。これが始まりを告げる合図になった。

ドルゴラモンがピエモンとメタルシードラモンと戦っている一方。

「氷結せし刃、鋭く空を駆け抜ける！『フリーズランサー』……！」

ピノッキモンとムゲンドラモンに無数の氷の槍が襲う。

ピノツキモンは避け、ムゲンドラモンは被弾してしたが特にダメージはないようだ。

そしてそのまま∞キャノン撃つ。

「つと」

奏は上下左右にと危なげなく避ける。

しかし避ける位置を予測していたピノツキモン。

「くらいなよ！ブリットハンマー！！」

ハンマーを叩きつけられながら必殺技を放たれた。

「チッ！」

魔法の射手をハンマーに当て、軌道をずらしたが全てを避けきれず一部が腕に掠った。

「……ッ（掠ったか……でも、うん、まだ動く。……それにしても正直言つてこの状況はつらいな。今は私に集中しているとはいえ何時標的をヒカリちゃんたちに返るのかわからないし。それに表に出ていないけど魔法による負荷が身体に来てる）」

今度は∞キャノンが撃たれ、回避に専念する。

「（魔法の代償が表に出る前に、そして何よりもヒカリちゃんたちに矛先が向く前にどうかしてみんなを逃がさないと……）」

自分以外の選ばれし子供を逃がすために思考を巡らせながら防戦気味に戦い続けた。

「すげえ……」

選ばれし子供たちは目の前の戦いに目を奪われていた。

自分たちが手も足も出なかったダークマスターズをまとめて相手をしている奏とドルゴラモンに。

しかしそんな中、ヒカリとタケルは奏の様子に少し違和感を感じていた。

「奏くん……」

「大丈夫だよね……」

「二人ともどうしたんだ？」

様子がおかしい二人に気づいたテイルモンは声をかけた。

「テイルモン……奏くん無茶してないかな？なんかそんな感じがして……それにほら、魔法を使ってるのに紋章が光ってないから」

「ホントだ……でも前に言ってた代償は出てないようだけど……」

「そうなんだけど……」

ヒカリとタケルにつられ、テイルモンも奏を心配するような表情になっていった。

奏のことを心配しているとドルゴラモンの声が響いた。

「ミミ！逃げろ！」

三人をはじめ、全員が上を見上げるとピエモンが持っていた剣の本がすぐそこまで飛んできていた。
そしてその軌道上にはミミがいた。

「あ……ああ……っ」

ミミは迫ってくる剣の恐怖で足がすくみ、動けずにいた。
そして刺さろうかとしたとき、

——コテン……

一瞬の静寂。

全員何が起こったのか理解できない。
ただミミの足元に先ほどまでミミの腕の中にいたはずのチューモンが倒れていた。

「チュー……モン……？」

「ミミちゃん……よかった……」

ミミは気付いた。

チューモンは自分を守るために自らを犠牲にし庇ったのだと。
急いでチューモンを抱き上げると泣きながら叫んだ。

「チューモン……しっかりして、ねえ！」

「よかった……ミミちゃん無事なんだ……僕、ミミちゃんを守れたんだ」

「そんなことはいいの！それよりも早く治療をしないと！」

ミミが叫ぶもチューモンの呼吸は弱くなっていく。

「ミミちゃん…今度生まれ変わったら、デートして……」

「っ！？チューモン！」

チューモンは弱弱しく呟くと力尽きて動かなくなり消えていつてしまった。

「……っ、まだだ…また救えなかった」

下ではチューモンがミミを庇い消えていった。

奏は顔を俯せると聞こえるか聞こえないかぐらいの大きさで呟いた。

「どうしたんだい？もう終わりなのかい？」

「……」

ピノッキモンとムゲンドラモンは奏を挟み、行く手を遮ったまま言った。

奏はピノッキモンの言葉に反応せずに俯いたままだった。

「……ん？もしかして選ばれし子供の身代わりになったあのバカなデジモンのことを考えているのかい？」

「っ！」

「へえ、やっぱりそうか、必死になって僕たちを抜こうとなっていたのってそういうことか。それにしてもあのデジモンもバカだよな、自分から死に急ぐなんて」

そう言い、声を上げて笑い出した。

「……………う…い」

「ん？なんだって？」

奏の言葉を聞き取れなかったピノッキモンは聞き返した。

「……………うるさいと言ってるんだ！——『百歩沁鐘』！！」

奏は顔を上げると同時にピノッキモンの懐に入り、気を凝縮した裏拳を撃ち込んだ。

「ギャツ！？」

勢いよく飛ばされたピノッキモンは壁に深くめり込み、瓦礫に埋もれた。

すぐさまムゲンドラモンの距離を縮め、

「お前も引っ込んでろ！『星脈地転弾』！！」

高密度の気弾をムゲンドラモンにほぼゼロ距離から放った。

「グウツ！？」

ムゲンドラモンは何か持ちこたえようとしたが耐えきれずピノッキモンと同様に壁にめり込んだ。

「……誰かが来たみたいだけど……敵意はないみたい。それに太一さんたちのことを知ってるみたいだ……だったら」

来訪者へと念話を送り、用件を伝え終わるとドルゴラモンのところへ向かった。

「あいつら……絶対に許さねえ！」

「ああ、あいつらだけは絶対に……っ！」

チューモンの死に怒りを抑えきれないでいる太一とヤマト。

再び立ち上がるうとするアグモンとガブモン。

そして再び戦おうとすると透明な何かに包まれダークマスターズから離れていった。

「これは……」

「いったい……」

「二人とも落ち着くっぴ」

二人が振り向くとそこには選ばれし子供たちと、

「ピッコロモン……」

「選ばれし子供たち、久しぶりだっぴ」

前回世話になったピッコロモンがいた。

今、結界を張ってダークマスターズから逃げていることを伝えた。久しぶりの再会によるこぶが違和感に気づいたタケルが慌てて口を開いた。

「ピッコロモン、奏君とドルゴラモンは!？」

タケルの言葉にハッとした子供たちはピッコロモンを見つめた。

「あやつらは…まだダークマスターズと戦っておる」

『なっ!？』

全員が絶句した。

「どっということだよ!何であいつらを助けてくれなかったんだよ!」
「?」

「あやつらを連れて来なかったのは奏の頼みだからっぴ!!」

ピッコロモンは口調を少し荒げて子供たちを黙らせる。

全員が黙るとヒカリが口を開いた。

「奏くんの?」

「そうだっぴ。それから伝言もあるっぴ。『私にはもうみんなを守りながら戦うほどの体力が残ってないからピッコロモンに代わりにみんなを逃がしてもらいました。すみません、勝手なことをして…』

…。ダークマスターズを振り切って時間はかかるかもしれないですけど必ず合流するので心配しないでください」

それを聞き終わると太一は拳を叩きつけた。

「奏のやつ何考えてんだよ！」

太一は自分の不甲斐なさに何度も何度も叩きつけた。

「奏くんならきつと大丈夫だよ」

ヒカリは太一だけでなく全員に言った。

「そうだよ、奏君のことを信じようよ！」

タケルもヒカリの言葉に続いた。

「ヒカリ…タケル…そう、だよな。奏を信じよう」

叩きつけるのを止め顔を上げると他も心配そうな顔はしているものの奏を信じているようだった。

それを見たヒカリとタケルは頷きあった。

そうして奏とドルゴラモンを残し、選ばれし子供たちはダークマスターズから逃れた。

- side end -

第20話（後書き）

『星脈地転弾』・・・東方より、紅 美鈴

第21話

- side 奏 -

「クッ……まさか九人目とそのパートナーデジモンにここまでやられるとは」

ピエモンは片腕を庇いながら呟き、周りを見た。

メタルシードラモンは自慢のクロンデジゾイト合金で覆われた身体には至る箇所深い傷がつけられていて、地に伏しながらもこちらを睨んでいる。

ピノッキモンはうるさい口は閉まっけていて破壊されたハンマーを手を持ちながらも戦闘態勢を解いていない。

ムゲンドラモンはメタルシードラモン同様に身体には深い傷がつけられていて、所々切れたケーブルから火花が散っている。

「ハア…ハア…ドルゴラモン、まだいける？」

「ああ…問題ない。奏こそ大丈夫なのか？」

正直に言って結構ヤバイ。いろんな箇所の筋肉が悲鳴を上げてるし、呪文を詠唱する度に酷い頭痛が起こる。

「……私も大丈夫」

身体の悲鳴を表に出さずにダークマスターズを睨みつける。

しばらく互いに睨み合いを続けているとピエモンが口を開いた。

「このままでは分が悪い。なので退かせてもらいますよー！」

その言葉と同時に∞キャノンが撃たれた。

しかしそれに威力はなく、閃光が一带に広まった。

「チッ！逃がすか！『ドルディーン』！！」

ドルゴラモンがダークマスターズに向けて破壊の衝撃波を放った。

「逃げられたね」

「そつみいだ」

私の言葉に返事を返した。

そして閃光が収まると言った通りダークマスターズはこの場から全員消えていた。

「……ッ」

「奏！」

「……ありがと、ドルゴラモン。一先ずどこかに移動をしよう」

力が抜けて崩れ落ちそうになった身体を抱えられてそのまま休める場所へと移動した。

移動する途中に森を発見し、そこで休むことにした。

ドルゴラモンはすでにドルモンへと退化し、すぐ傍で心配してくれている。

「奏…無茶すぎだよ。無茶しないってヒカリちゃんたちと約束したじゃん……」

「うん、でもあの状況じゃこれがベストだったと思うよ。代償は大きいとはいえ、結果論で言えばみんなを逃がすことも私あいつらを退かせることができた……ま、反省はしてるけど後悔はしてないよ。それに合流したときにいろいろを怒られることも覚悟できてるよ」

「はあ……」

ドルモンは何も言えなくなつてため息をついた。

「で、これからどうするの？今の状態じゃあ立つことさえつらいんでしょ？」

「まあね。このままみんなを追つても足手まといになる…だから数日身体を休めることにする」

ジッパーを発動し、倉庫の中からデカイミニチュア模型を出した。

「…何それ？」

「ダイオラマ魔法球。見せたことなかったっけ？」

ドルモンは首を横に振った。

「魔法具の一つでこれの中に入ることができるんだ。弄ってるから

この中の一日は外の三十分になつてゐる。わかりやすく言えばデジタルワールドと現実世界の時間差を短くしたもの」

「へえ、そんなのあつたんだ」

「魔法球の中で一日経たないと外に出られないから気を付けてね。中での数日間治療に専念するからドルモンもそのつもりで。それから立ち入り禁止の場所があるからそこには絶対入らないで……命の保証はできないから」

「……何か危ない言葉があつたけどりょーかい」

半径500メートルに認識・侵入不可の結界を張り、魔法球の中へ転移した。

ダイオラマ魔法球内一日目。

まずは代償の確認を試してみた。

- ・魔法の無理な行使のため身体に負荷がかかり、あらゆる箇所ですこい筋肉痛が発生。
- ・魔法の無理な行使のため脳に負荷がかかり、種類に関わらず魔法の行使が現段階では不可能。

例外として、身体強化・一部防御魔法は可能。

と、こんな感じだった。

酷い筋肉痛に耐えながらもジッパーの中から回復用の魔法具・『癒しの天使』を取り出して使用し、切れた筋繊維を時間をかけながら癒した。

これならば魔法とは違い、魔力を込めるだけなので頭痛が起こることはない。

そして、これを何度も繰り返しながら一日を過ごした。

ダイオラマ魔法球内二日目。

変化なし。

『癒しの天使』による治療を継続。

ダイオラマ魔法球内三日目。

治療の甲斐あって酷い筋肉痛から普通の筋肉痛へと変わった。

まあ、思っていたより身体への負荷が小さかったからこんなものかでもそれとは対照に魔法が使えなくなったのは少しきついかもしくない。だけどドルモンもいるし複数で来られない限りは大丈夫か。

と考えながら身体を動かして状態を確認する。

「うん、やっぱり普通に筋肉痛だ。この程度なら戦闘には問題ないけど……」

魔力を練り上げ、魔法の射手を唱えようとすると、

「ッ……ハア…ハア…こればかりはダメか、この様子じゃ数日でまた使えるようになるのは無理そうだ」

こめかみを押さえながら呼吸を整えた。

しばらくすると頭痛は治まり顔を上げるとドルモンがいた。

「頭、また痛むの？」

「魔法を使おうとするとね。でも普通でいる分には何の問題もないから大丈夫」

「そっか……どれくらいで元に戻りそうなの？」

「身体に関しては大丈夫なんだけど魔法はダメだね、当分使えない。回復の目途は立ってるけどすぐには無理。まあ、魔法が使えないのは痛いけどほんの一部だけでも使えるからマシな方だよ」

「なら身体を動かす分には何の問題もないんだね？」

それを肯定するとドルモンは何かを考えだし、そして、

「じゃあさ、ボクと模擬戦しようよ」

「……はあ？」

「だーから、模擬戦だよ！も・ぎ・せ・ん！魔法が使えなくなっても戦えるでしょ？だったらここに居る残りの時間は身体が鈍らないようにした方がいいでしょ」

確かにその通りなんだけど、いきなり模擬戦！とか言われたら……いや、まあ、ドルモンだしね、いつものことが。それにじっとしていられなくなったのかもね。

「?……で、どうなの?」

「そうだね、少しでもあのころの勘を取り戻すのもいいかもしれない」

ジッパーの中から日本刀『ニバンボシ』を取り出した。

「うん、少し身体に合わないけどしっくりくる。さて、最近はずっと使ってなかったから錆を落とすでしょうか」

そう言うドルモンは顔を輝かせ笑顔になった。

「そうでなくっちゃ!——ドルモン、ワープ進化ーっ!…ドルゴラモン!」

ドルモンはドルゴラモンに進化すると距離をとった。

「やる気満々だね。一応それでも病み上がりだから最初は軽くだから」

「わかってる。準備はいいよな」

構えをとるドルゴラモン。

「もちろん」

ニバンボシに手をかけ、同じように構えをとる。

「それじゃあ……」

「興じるとしますか！」

同時に距離を詰め、模擬戦が始まった。

ダイオラマ魔法球内四日目。

三日目に続きドルゴラモンとの模擬戦を何度も繰り返した。

一戦一戦数を重ねていくうちに剣筋や体術が変わっていくのが感じられた。

それはあの頃とはまだかけ離れているが実戦には十分なものに仕上がっていた。

「奏、その様子じゃ大丈夫みたいだね」

「おかげさまでね。魔法は使えなくても魔力変換ができるようになったからよかったよ」

「それじゃあ今日が終わったら……」

「うん、ここを出てみんなと合流するよ。だから残りの時間は身体を休めるよ」

そして数時間後、私たちは魔法球から出た。

-
s
i
d
e

e
n
d
-

第21話（後書き）

『癒しの天使』・・・MARより、スノウのARM
『ニバンボシ』・・・TOVより、ユーリの刀

第22話（前書き）

どうもです。

9月に入っているいろいろと忙しくなってきたので更新が……
それに23話が書きづらいよ、だれかヘルプミー!!

第22話

- side other -

奏とドルモンがダイオラ魔法球で休息を終え、合流するために足を進めているとき、太ーたちはメタルシードラモンを倒し、海を解放した。

しかしメタルシードラモンを倒す際、ホエイモンが犠牲になった。ヤマトやミミはこれまでに犠牲になったデジモンたちを悼むこのまま進むことに不安と戸惑いを感じはじめた。

そしてそのことが原因で太ーとヤマトは衝突し、口論となってしまった。

しかし空と丈に止められると森の中を移動し始めた。

「ヒカリちゃん、こういう時どうしたらいいんだろう……？」

「わからない。でも、もし奏くんがいてくれたら……」

「でも奏は今ここにはいない。だから私たちで何とかしないと」

「そうだよ、あんまり奏にばかり頼ってられないよ？」

四人は太ーとヤマトの口論から流れ出した重い空気から少し離れた最後尾で小さな声で話していた。

「そうだよね、奏くんがいないんだから私たちで何とかしないと。じゃなきゃこのまま、みんながバラバラになっちゃいそうな気がするの」

「そうだね。でも本当にどうしたら……」

テイルモンとパタモンの言葉に頷きながらもうんうんと考えながら並んで前について行っている、

「あ……」

不意にヒカリが足を止めキョロキョロと辺りを見渡した。それにすぐ気付いた三人はヒカリに近寄った。

「ヒカリちゃん？」

「今何か聞こえなかった？」

「何かって？」

「何か人の声みたいなのが聞こえなかった？」

「声？僕には聞こえなかったけど……」

タケルはパタモンとテイルモンに視線を移すと二人は首を横に振った。

「ヒカリ、聞こえた声ってもしかして奏かドルモンだったりする？」

テイルモンの質問に首を横に振るヒカリ。

「三人ともみんなから離れっちゃってるから急ごうよ、追い付けなくなるよ」

パタモンの言うとおり太一たちとは距離が開いており、四人は急いで追いかけた。

『——二人とも危ないから離れるなよ』

『『ごめんなさい』』

そんな選ばれし子供たちをテレビ越しに今か今かと待ちわびるデジモンが一体いた。

「早くこつちに来ればいいのに…僕、待ちくたびれちゃうよ」

ピノツキモンだ。

そしてその後ろに控えているデジモン、キウイモンが相槌を打った。

「所詮人間の子供ですから」

「まったくもう……それにしてもあいつらはまだ合流してないんだね」

「あいつら、とは？」

キューイモンが聞くとピノツキモンは悔しそうな表情になって叫びだした。

「あいつらはあいつらだよ！名前は確か…奏とドルゴラモンだ！奏

とキウイモンに自慢するかのようには話し始めた。

「これがねえ、44マグナム！破壊力あるんだよ！それからこれは、ダムダム弾！これを撃ち込むとねえ…おなかの中が破裂するんだ！」

ピノッキモンは他にもおもちゃ箱の中を漁りながら選ばれし子供たちに来るのを待ち続けた。

選ばれし子供たちはピノッキモンの罠に振り回されていた。

ピノッキモンは選ばれし子供たちがバラバラにするとタケルを自分の屋敷に連れ去った。

その様子をヤマトは全身を拘束された状態でまともにタケルの名を呼ぶもできずタケルが連れ去られる姿を見ることができなかった。

「んんーっ！」

タケルを助けようと何とかして拘束を解こうと力を込めるがそれはビクともせず、何をやっても失敗に終わった。

しかし、しばらくすると再び地面が動き始めた。

「!?!」

何もできないまま進んでいくと止まった。

すると太一たちの声が聞こえた。

どうやらヤマトのところだけでなく他の選ばれし子供たちの地面も動いていたようでタケルを除く全員が集まることができた。

「ヤマト!？」

ミノムシ状態のヤマトを見つけたガブモンは急いで駆け寄って拘束を爪で断ち切った。

「タケルがピノッキモンに連れ去られた……!」

「何だつて!？おい、ヤマト!ピノッキモンは何処にいるんだ!」

「何処だかわからない……」

「しっかりしろ!ヤマト!」

タケルを連れ去られて気が動転し、いつもの冷静さを失っているヤマトに太一が喝を入れた。

「最初のあの道がピノッキモンのところにつながっていたはずです!」

全員は光子郎の言葉に頷き、道を探そうとするとピノッキモンの傍にいたキウイモンが現れ、いきなり攻撃を仕掛けてきた。

「ピノッキモン様は今お遊びの時間です。邪魔しないでください。リトルペッカー!」

それを見たデジモンたちは迎撃する。

「おい!タケルは何処なんだ!」

未だにパニック状態のヤマトが叫ぶがキウイモンは不敵に笑うだけで一向に応えようとはしない。

それを見てさらに声を荒げた。

太一はキウイモンを倒すことに専念させようと言うが聞く耳を持たず、タケルの居場所を聞き出そうとさらに声を荒げた。

「早くしないとタケルが…ガブモン！」

「わかった！——ガブモン、ワープ進化ーっ！……あれ？」

ガブモンは進化しようとしたがヤマトのデジヴァイスと紋章は光らず、メタルガルルモンへと進化することができなかった。

「光らない……」

ヤマトはわなわなと震えながら呟いた。

ガブモンや太一が声をかけるがショックが大きいようでただ紋章を見つめるだけで反応が返ってこなかった。

「リトルペッカー！」

選ばれし子供たちが気を逸らしている隙にキウイモンは攻撃を放った。

それにいち早く気づいたピヨモン。

「——ピヨモン進化ーっ！……バードラモン！」

バードラモンへと進化してリトルペッカーを翼で防ぎ、

「メテオウイング！」

火の粉を放ってキウイモンを倒した。

バードラモンから退化し、駆け寄ってくるピヨモンに対して空は労いの言葉をかけた。

しかし、そんな二人にヤマトは怒りをあらわにして迫った。

「アイツを倒したらタケルの居場所がわからないじゃないか！」

「落ち着けヤマト！」

太一が間に入るがそんなのお構いなしといったようにさらに迫ろうとしたそんな時、

「おーい！」

森の奥から足音と声が聞こえた。

全員がその方を振り向くとそこには手を振りながら駆け寄ってくるパタモンと捕われていたタケルがいた。

子供たちは一斉にタケルに駆け寄った。

ヤマトも例外ではなく駆け寄り、その顔には怒りはなく少しほっとしたものだった。

「僕ね、ちゃんと一人でも自分の身を守ることができたよ！」

少し興奮気味にはなるタケルに全員が褒め称えた。

それを聞いてタケルは頭をかきながら笑顔を浮かべた。

「……」

しかしそんな中たった一人、ヤマトだけが表情を暗くし、踵を返し

てこの場から離れた。

「ヤマト!？」

様子のおかしいことに気づいたガブモンはこの場から離れていくヤマトの後を追いかけていった。

しかしタケルに夢中になっていた他の子供たちはヤマトがこの場からいなくなったことに気づくのは少し後のことだった。

- side end -

- side 奏 -

「奏、本当にここらへんなの？」

「その筈。私の魔力がだんだんと近くなってきてるから」

そう言つてドルガモンの背に乗りながら指示を送った。
随分と空を飛んでいて今は森の上を飛んでいた。
そのまま飛んでいて少しすると、

「奏!あれ見てよ!」

ドルガモンの言う方向を見ると湖があり、その近くを歩いている人の姿が見えた。

「あれは…ヤマトさんとガブモン……何か様子がおかしいけど」

「何かあつたのかな？」

「さあ？……ドルガモン、気付いてるよね？」

「もちろん。ヤマトやガブモンの対岸の森の中にいるやつらでしょ？」

「うん」

視線を移すとそこには前に戦ったピノッキモンが大樹のようなデジモン、ジュレイモンがヤマトさんたちを見ているのを見つけた。

「ピノッキモンは殺気立ってるみたいだし……一先ず様子を見てみようか」

「わかった」

そして気配を断ちながらピノッキモンたちにギリギリまで近づき、聞き耳を立てた。

- side end -

第22話（後書き）

読んでいただき感謝。

22話を呼んでくれたならわかると思いますが23話はジュレイモンがヤマトを唆す回のやつです。

前書きにも書きましたが書きづらいです。

ネタバレになるかもですが究極体対決の回避、そのための説得の言葉（会話）が……ハア…

第23話（前書き）

お久しぶりです。

9月に入って本当に忙しい毎日が続いています。
それでも更新を頑張っていきます。

第23話

- side 奏 -

「――…みんな、このデジタルワールドに来てから成長した。それなのに俺はどうだ？俺は昔のままだ、何も変わっちゃいない……」

「そんなことないよ！ヤマトだって……！」

「俺はいつたい何なんだ！俺はこのままでいいのか！？このままじゃダメなんだ！変わらなくちゃダメなんだ！もつと強くならなきゃダメなんだ！……そのためには、みんなと一緒にいちゃダメなんだ……」

「ヤマト……」

湖畔で叫ぶヤマトさんを離れたところから見ていた。

ヤマトさん……そこまで自分に厳しくしなくてもいいだろうに……。それに自分で自分が成長してるなんてなかなかわかるものじゃないのにね。私が言える立場じゃないけどヤマトさんも随分と過保護だね。タケル君を第一に考えてるのはいいけど、そのせいで周りが見えなくなるんだろう……

そうこう思っているとフォッフォッフォ、と笑いながら先ほどピノッキモンと一緒にいたデジモンがヤマトさんに近づいてきた。

「やつぱり来たか。さて、あいつは戦闘の意思はなさそうとはいえ、今の状態じゃあヤマトさんが言いくるめられていいように誘導させ

られそうだし行くのでしょうか」

- side end -

- side other -

笑い声と共に森の奥からジュレイモンがヤマトとガブモンの目の前に姿を現した。

二人は敵意満々で睨みつけるがジュレイモンは敵意はなく、ただ話がしたいだけだと言ってきた。

「……悪いがあんたの話し相手になる気はない。行くぞ、ガブモン」

ヤマトはジュレイモンを無視してこの場を去ろうとする。

しかしジュレイモンは腕を伸ばしてそれを阻んだ。

「まあお待ちなさい。年よりを邪魔にするものではありませんぞ」

笑いながら行く手を遮るジュレイモンをヤマトは鋭くにらみつけるがジュレイモンは気にせず言葉が続けた。

「『俺はいつたいなんなんだ』、『俺はこのままでいいのか』」

「!？」

「そうやって時に立ち止まり自分自身を見直すことは大事なことです」

「聞いていたのか!」

「聞くも何も、知らないことなど何もないのでございますよ。フオッフォッフォ」

笑いながら答えるジュレイモン。

予想していたように答えを聞き出そうとして自分に詰め寄ってくるヤマトを見て満足そうに笑みをこぼしながら笑い続けた。

ヤマトが口を開こうとした時、ヤマトでもなくガブモンでもない第三者の声が響いた。

「何でも知ってるねえ…なら、私がここに来ることも知っていましたか？」

「ム？」

「この声って……まさか!？」

三人は声が聞こえた方を一斉に見た。
そしてそこにいたのは……

「…奏、なのか？」

「そうですよヤマトさん。時間がかかりましたけど何とか合流できてよかったです」

そう言ってヤマトとガブモンに笑みを向け、歩み寄った。

「ま、いろいろ言いたいこと聞きたいことがあるでしょうけど、とりあえず後回しにしてください。ヤマトさんが言いくるめられる前にこいつを倒しますから」

「奏、やっぱりこいつは……！」

「そうだよガブモン。こいつの目的はヤマトさんと太一さん、アグモンとガブモンを戦わせることだろうから」

「何だつて!？」

「だから二人きりになった所をピノツキモンは狙わずにお前が出てきた。で、選ばれし子供同士の戦いを楽しみにしているピノツキモンは今頃、太一さんたちのところで嫌がらせでもしてるでしょうね。間違ってますか？ジュレイモン？」

いつの間にか笑いを止めていたジュレイモンに奏は淡々と問いかけた。

「フオツフオツフオ、実に想像力豊かなお方だ。あなたが言ったそのようなことは断じてそれはありませんぞ。私はただ純粋に話し相手がほしかっただけ、どうです？あなたも私の話し相手になつてはもらえぬだろうか？」

「寝言は寝て言うてください。ヤマトさん、ガブモン、こいつを倒しちゃうけど構わないよね？」

「あ、ああ」

「大丈夫なの？」

ヤマトは何か言いたげだったが、奏はガブモンに大丈夫、と言い、ジュレイモンに笑みを向けた。

「さてジュレイモン、お前はまだ何もしていないとはいえ、倒させてもらいます」

「ま、待つn——」

奏はジュレイモンの言葉を遮って言葉を発した。

「破邪走光・煉獄」

空や海よりも青い炎がジュレイモンを容赦のかけらもなく閉じ込める。

「——っ！！！」

蒼炎の中からは声なき声が上がった。

「靈力の行使なんて、しゅくち以外ほとんどやっていなかったけど……まあ、出来はそこそこかな？」

満足そうに蒼炎を背に向けて言った。

「さて、ヤマトさん、ガブモン、ここじゃなんですから場所を移しません？」

- s i d e e n d -

- s i d e 奏 -

湖畔から少し森の奥に入った所で三人で腰を下ろし、あのこと話を話していた。

当然、心配され怒られた。

まあ、ぺこぺこ頭を下げて謝ったら一応許しはもらえた。

「ははは…以後気を付けます、はい」

「ところでドルモンはどうしたの？一緒にじゃなかったの？」

「ドルモン？ドルモンならドルゴラモンに進化して太一さんたちを影から見守ってもらってます。さっき言ったようにピノッキモンが近くにいるでしょうから、一応もしもの時に備えてね」

ガブモンの質問に答える。

「私からもいいですか？さっきは随分と荒んでいましたけど、私がないうちに何かあったんですか？」

「それは……っ」

「俺が説明するよ」

俯いてしまったヤマトさんに代わってガブモンがこれまでに起こったことを話してくれた。

メタルシードラモンの戦いの後、ヤマトさんと太一さんが口論になっ
てみんなの雰囲気が悪くなったこと。

ピノッキモンの罠に嵌り、タケル君が連れ去られた。

ピノッキモンの仲間にタケル君の居場所を聞きだすため究極体へと
進化させようとしたが進化できなかったこと。

そして、

「他のみんなに比べて成長してない自分はみんなとはいえない

「……と思ってみんなから離れた、か……ヤマトさんは他人に優しくして自分自身に厳しすぎなんですよ」

「そんなこと……っ」

「ありますよ。みんなのことを気遣ったから太一さんの考えが正しいとわかっていながらも口論になったんでしょ？特にミニさんが酷い状態だったから」

「……」

「……話変えますね。ガブモンは言ってた進化できなかった理由ですけど……」

「何か知っているのか！」

進化の話を始めようとした途端、ヤマトさんは勢いよく顔を上げ、身を乗り出した。

「少し落ち着いてください。……私の推測ですけど、理由は友情を蔑ろにしたから」

「どういうことなの？」

「キウイモンとの戦いとき、タケル君のことばかりでみんなのことを蔑ろにしてたんじゃ？もしそうならそれはヤマトさんの持つ友情の紋章に反することだから光ることはなく、進化できなかった」

ヤマトさんは思い当たる節があるようで視線を逸らした。

「似たようなことを二人は知ってるはずですよ」

「似たようなことだと?」

「……太一さんとスカルグレイモン」

「「!?!」」

「知ってますよね?太一さんの間違った勇氣を持ったせいでメタルグレイモンではなくスカルグレイモンに進化させてしまった。そして今回は友情を蔑ろにしたせいで進化できなかった。これらからのことから思ったんです。紋章の意味に対して間違った、或いはそぐわない進化はできないのではと」

二人は思い出しているようで身体を硬直させた。

「でも、まあ、少し気持ちを落ち着かせてみんなと向き合えばまた進化できるようになりますよ」

「本当に、また進化できるのか……?」

「ええ、みんなを…仲間を信じれば必ず」

ヤマトさんは出会った時よりは少し落ち着いた様子で、ガブモンもヤマトさんを見てホッとした。

「友情、それがヤマトさんの個性なんですからそれを大切にしないと」

「……友情が俺の個性?どういうことだ?」

「え？…もしかして知らないんですか？私たちの紋章の意味はその人が持つ最も優れた個性なんですよ」

「そうなの？俺たちそんなこと聞いたことないよ」

「……ということは、誰が私たちが選ばれし子供に選ばれたかも知らない…ですよね」

「偶然じゃないのか！？」

この様子じゃあヤマトさんとガブモン、おそらく他の人も聞いたことないのか……

「いいえ、偶然ではないんですよ」

「じゃあ一体誰なんだ、俺たちを選んだのは……」

「それは本人に聞いた方がいいと思うから…ヤマトさん、みんなと合流しませんか？」

「っ！？それは……」

「大丈夫だよヤマト、みんなならきつと」

「そうですよ。ヤマトさんにはガブモンが、それに私もいるから」

「ガブモン…奏…」

ヤマトさんは少し悩んだ顔をしたが頷いて立ち上がった。

「ガブモン、奏、行こう」

「わかった!」「はい!」

この時ヤマトさんの紋章が光ったような気がした。

- s i d e e n d -

第24話（前書き）

約2か月ぶりの更新です。

本当に久しぶりですね。正直に言うとなんか忘れてのですよ。

レポートの山に遅い時間まで資格講座が、その他にも…正直鬼畜な状況ですね。これが来年度まで続くのかと思うと病んでしまいそうです。

第24話

- side other -

奏とヤマトが再会したその頃、太一たちはピノッキモンの部下であるガーベモンたちと対峙していた。

リリモンがゼロ距離のフラウカノンで、メタルグレイモンがギガデストロイヤーでそれぞれ倒し、残り一体となっていた。

この状況では勝てないと踏んでか、ガーベモンは自ら武器を捨て、ごみ箱から両手を上げながら出てきた。

「わかったよ…オレの負けだ……」

選ばれし子供たちはそれを見て気を緩ませた。

しかし、そんな子供たちを見たガーベモンは唇を釣り上げて自分が入っていたごみ箱の口を子供たちに向けた。

「なーんてな！この中はブラックホールになってんだ！みんな吸い込んでやる！」

ゴミ箱は強力な吸引力ですべてを吸い込もうとしていた。

辺りの木々が吸い込まれていく中、選ばれし子供とそのデジモンたちは何かにつかまったり、踏ん張るなどしてなんとか耐えていた。しかし、それが長時間続くわけもなく、限界が来ようとしていた。そんな時だった。

「『ドルディーン』！」

突如上空から衝撃波がガーベモンに襲いかかった。

「まったく、見てられないな」

ため息交じりのそんな声が響くと、全員が空を見上げると一体のデジモンが片手を翳し佇んでいた。そのデジモンを見て嬉々としたヒカリとタケルが声を揃えてその名を呼んだ。

「ドルゴラモン！」

「ああ、四日ぶり……いや、数時間ぶりだな。みんな無事でよかったよ。（ピノッキモンの気配はないな。だとすればジュレイモンのところか。……ん？奏の気配、それにヤマトとガブモンもか……もうすぐそこまで来てるな）」

ドルゴラモンが周囲を確認しながら地上に降り立つと全員寄って来た。

「ドルゴラモン、無事だったんだな！」

などと太一たちが声をかける中、奏がいないことに気付いたヒカリは少し不安げに尋ねた。

「……ドルゴラモン、奏くんは……どこに、いるの？」

そんな雰囲気気付いてか、ドルゴラモンは優しげな表情で答えた。

「心配しなくても大丈夫だ。多分そろそろ……」

——ガサガサ

草木を掻き分ける音が鳴った。

それは徐々に大きくなり、全員の期待が膨らんでいった。そして、

「ふう、やっと終わった。そこまで酷くない獣道とはいえて……つて……」

頭や肩に葉っぱをつけた奏が現れた。

「奏？どうした……の……」

「奏、ガブモンどうした……っ、みんな……」

奏の後からはガブモンとヤマトが出て来たが太一たちの姿を見るなり顔を逸らした。

「奏……それにヤマトとガブモンも……」

太一も同じようにヤマトを見て、顔を逸らしながらつぶやいた。

- s i d e e n d -

- s i d e 奏 -

……うん、何と言うか思ってた以上に酷い。

それが私みんなの雰囲気を感じて思ったことだった。

私が無事だということに安心していただけ、どの顔も不安や疲れなどが浮かんでいた。

自分の身代わりとなって死んでしまったチューモンのこともあるか

らだろうか、特にミミさんは酷かった。

「ヒカリちゃんは何処に行つたんだろ？」

先ほどから姿の見えないヒカリちゃんを探すためにドルモンと森の中を歩いていて。

太一さんたちがいるところからみんなの声が聞こえるが、それよりもヒカリちゃんを探すことに専念した。

「ねえねえ、太一とヤマトが喧嘩してるみたいだけど止めなくていいの？」

「いいの。本気でぶつかり合えば本音も自然とこぼれるだろうからね。ま、酷くなったら止めるよ」

「奏がそう言うならボクはもう何も言わないよ」

「そうしてくれるとうれしいよ……って、こんなところにいたんだ」

ドルモンと話しているとヒカリちゃんの後姿を見つけた。

だけど、様子がおかしいというかなんというか、何かを探しているようだった。

「ヒカリちゃん、何してるの？」

「探し物？」

「あ…奏くん、ドルモン」

急に名前を呼ばれてと少し驚いたように振り返ったけど、私たちだとわかるとホッとした様子で話してくれた。

「声の主を探してる？」

「うん。この森に入ってから何度か呼ばれてる気がする……」

その声はヒカリちゃんだけに聞こえるようで、近くにいたテイルモンに確認しても首を傾げるばかり。

他の人に聞いても同じ反応だから一人で探していたらしい。

「ヒカリちゃん、その声ってどんな声なの？なんて言ってたのさ？」

「確か、女の人のような声だよ。でもなんて言ってたかわからないの」

「そっかぁ、奏はどう思う？」

「ヒカリちゃんを信じるよ。でも、こればかりはその場に居合わせないと詳しいことは言えないね」

ドルモンはそうだよな、と頷いた。
そんなときだった。

……。……。

「！また聞こえた。奏くんとドルモンは聞こえた？」

「……聞こえたけよ。でも奏、これって……」

「うん。ドルモンの思ってる通り、ホメオスタシスだと思う」

「ほめおすたしす？」

ヒカリちゃんは頭に？を浮かべながら復唱した。

「そうだよ。それにしても、ホメオスタシスはこの近くにいるみたいだし…ヒカリちゃんはとうする？」

「行きたい。会ってなんで私だけが声を聞けたのか知りたい」

「それじゃあ決まりだね。奏、ヒカリちゃん、行こっか」

そして、私とドルモンとヒカリちゃんはホメオスタシスを探しに森の奥へと進んだ。

- side end -

- side テイルモン -

太一とヤマト、ウオーグレイモンとメタルガルルモンが喧嘩している最中、ヒカリと奏とドルモンの姿が消えていた。

「奏たちがいるから大丈夫だろうけど……」

心配だな。太一たちの喧嘩はすぐに終わりそうもないし、探しに行こう。

そう思ってその場を離れようとすると、呼び止められた。

「待ってくださいテイルモン」

「ん？何だ光子郎？」

「何処に行くんです？」

「ヒカリと奏とドルモンがいなくなってるからちょっと探しに行こうと思ってるね」

そう言うと光子郎は三人がいないことに気づいて自分も行くと言って一緒に探すことになった。

「三人は何処に行ったんでしょうか？」

「わからない。でもそんなに遠くに入っていないのだろうけど」

三人を心配しながら森の奥へと歩みを進めていくと声が聞こえた。

——「久しいね。お前たちがヒカリちゃんに呼びかけたんだな？」

——「これがホメオスタシスなの？」

——「そうだよ。確か奏が夢でこっちに來た時以來だね」

「三人は誰と話しているんです？」

「わからない」

私たちは誰もいないはずのところで誰かと話す三人に疑問を持ちながら様子を見ていた。

何度か会話があったが突然奏の身体が光りだした。

「「奏（君）！」」

それを見た私たちは慌てて駆け寄ろうとした。

奏は何事もないかのように可能性の紋章を何かに掲げる。
すると紋章は輝き始め、その輝きがこの森を包んだ。

- s i d e e n d -

第24話（後書き）

明日も更新する予定なので楽しみに。

第25話

- side other -

奏とドルモンがヒカリを探しに森の奥へ行った少し前、太一たちはヤマトと向き合っていた。

「ねえヤマト君、どうしてあの時急にいなくなったの？」

「……」

空は心配した様子で声をかけるが、ヤマトは黙ったまま顔を逸らした。

「ヤマト、黙ってないで何か言えよ。本当にどうしちまったんだよ……」

「お兄ちゃん……」

ヤマトの態度がおかしいと思い、空と同じように声をかける太一とタケル。

それでもなお黙り続けるヤマトに空は手を伸ばそうとした。

「空には、お前たちには関係ないだろ！」

空が伸ばした手をを振り払い叫んだ。

その場の全員が言葉を失った。

ヤマトの自分がやったことに気づき、再び気まずそうに顔を逸らした。

「ヤマト…何やってんだよ！空に謝れよ！」

「うるさい！お前に俺の何がわかるんだよ！」

「はぁ！？いきなり何言つてだお前。訳がわかんねえぞ。それに、お前が何も話そうとしないからわかるものもわかんねえよ！」

太一がそう言つとヤマトは目を強う瞑り、顔をゆがめた。
そして何かを決心した顔になり、太一を見て言った。

「……太一、俺と戦え」

「はぁ！？おいヤマト、本当にどうしちまつたんだよ！お前らしくないぞ！」

「俺らしくない？はっ！自分でもわからないのに、なんでお前にそんなことがわかるんだ！いいからっ！俺と戦え！！」

「ヤマト落ち着いて！ガブモンからも何か言ってくれよ！」

アグモンがヒートアップする二人を仲裁しようとし、それを手伝つてもらうためにガブモンへと協力を仰いだ。

しかしガブモンは何も答えず黙っていたがヤマトを見据え、口を開いた。

「……ヤマト、それがヤマトの出した答えなの？」

「……ああ」

「そっか…だったら…」

「ガブモン？」

ガブモンはアグモンへと向き直った。

アグモンはガブモンの名前を呼ぶが返ってきたのは言葉ではなく青い炎だった。

「っ！？ガブモン！？何するんだよ！」

「アグモン…俺と戦え！」

「ガブモン！？」

アグモンはガブモンの言葉に驚いた。

それは他にも同じように驚きを隠せていない。

「ヤマト、俺は例えみんなを敵に回しても、俺はヤマトと一緒にだよ！（ヤマト、俺には分かってる。本当は信じたいんだよね。仲間も友達も友情も）」

「ガブモン……」

ヤマトの持つ友情の紋章とデジヴァイスが輝きだし、ガブモンを包んだ。

「——ガブモン、ワープ進化ーっ！…メタルガルルモン！」

輝きが収まるとガブモンは究極体へ、メタルガルルモンへと進化した。

「（進化…できた……。もしかして奏が歩きながら言っていたことはこのことだったのか？ だけど今は……）」

——友情なんていろんな形をしているものなんです。複数に向けるモノ、一つに向けるモノ。その他にも多くの形がある。でも、どの形にも共通するものは絆。それがあればきつと……

「（奏の言った通り、本当に進化できた。けど、これは本物で偽物の友情。だからこそ、自分たちの納得できるものを見つけるんだ。だから今は……）」

——ただどね、友情の形なんて本物だとか偽物だとかそんなものは存在しないだ。結局は自分で見つけて自分で決めたものが一番なんだ。

ヤマトとメタルガルルモンは奏の言った言葉を思い返ししながらそれぞれを睨んだ。

——ジュレイモンの策に乗るみたいでいやだけど、太一さんとアグモンと喧嘩してみるのもいいかもしれないよ？ それはそれで何らかのきっかけになるかもしれないから。

「（今は……！）」太一（アグモン）！俺と戦え！！」

「ヤマト…ガブモン……本気、なんだな」

二人はその問いに答えずただ黙って睨むだけ。
そんな二人にクソッ、と言いながら見つめ返した。

「……ああ、わかったよ。そんなに戦いたきや戦ってやるよ！アグモン！！」

「わかったよ太一！——アグモン、ワープ進化ーっ！・・ウォーグレイモン！」

ウォーグレイモンに進化すると、四人は対峙した。

そして、太一とヤマト、ウォーグレイモンとメタルガルルモンはそれぞれの戦い^{ケンカ}を始めた。

ケンカを始めた太一とヤマト、ウォーグレイモンとメタルガルルモンを止めようと必死に声を上げる空たち。

しかし四人は止まるそぶりを見せずに殴り合い、技の応酬を続けた。どんな中、究極体になれないデジモンたちは究極体の同士の戦いを見てることでしかできずにいた。

「あーもう！何でこんな時に奏もドルモンもいないんだよ！」

「ゴマモン、そんなこと言ってるの」

「なにおう！？」

悪態をつくゴマモンにテイルモンは呆れながら言った。

「どうせ私たちには止められないのだから好きにやらせばいいじゃない」

「おい！お前には仲間を思ふ気持ちがないのかよ！」

「あれば止められるというの？」

「そ、それは……っ」

テイルモンの言葉に言葉を詰まらせ何も言えなくなった。

「だったら黙ってみてるしかないじゃない」

それだけを言つて身を翻した。

そんな淡泊な態度に憤怒したゴマモンはテイルモンに突っかかるうとしたがテントモンに止められ、悪態をついた。

「ガイアフォース　！！」

「コキュートスブレス！！」

究極体同士の必殺技がぶつかり合う中、そのパートナーである二人も殴り合いを続けた。

誰の声も聞こえないようで、本当に手を付けられないようだ。しかしそんな時だった。

突如、森の奥から光があふれだし、森を、選ばれし子供たちとそのパートナーデジモンたちを包み込んだ。

それは上空で戦っている究極体二体も例外ではなく、二体はそれぞれ

れコロモンとツノモンに退化させられながら光に包まれた。

「これは……」

「どうなっちまったんだ……」

気付けば全員は何もない真っ白な空間に飛ばされていた。

混乱する中、どこから幼くもオトナびたウイスパーヴォイスが聞こえた。

「初めまして。選ばれし子供たちとそのパートナーデジモンたち」

白い空間の奥から出てきたのは、

「奏……なのか？」

「いいや違うよ。ホメオスタシスが奏の身体を通して話しているんだ」

「ドルモン……それにヒカリも……」

奏……いや、ホメオスタシスの後に続いてドルモンとヒカリが出てきた。

「改めて、初めまして。私はデジタルワールドの安定を望む者です。この身体の主、奏さんやドルモンからはホメオスタシスと呼ばれています」

自己紹介を終えたホメオスタシスは選ばれ子供たちへと笑みを向けた。

-
s
i
d
e

e
n
d
-

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8623t/>

電腦世界に落ちた者

2011年11月15日01時57分発行